

城下町金沢学術研究2

城下町金沢の世界史的 위치づけに関する
比較都市史研究

平成23（2011）年3月31日

金 沢 市

目次

城下町金沢の世界史的 위치づけに関する比較都市史研究

城下町金沢学術研究会 研究代表 伊藤 毅

はじめに	1
1. 城下町とは何か	2
・ 城下町研究の系譜	2
・ 武士という存在	6
・ 信長のアイデア	10
・ おわりにー城下町のアイデア	16
2. 16～17世紀世界都市の概観	19
3. 16～17世紀世界都市各論	37
4. 小規模なく一群の都市>ーフリースラント	51
おわりに	85

はじめに

本研究は前年度における「日本の城下町と金沢城下町」（宮本雅明）、および「城下町金沢の河川・用水の整備研究報告書」（玉井信行）の成果を踏まえ、世界史観点から金沢城下町を位置づけることを課題とする。

とはいえ、この課題はあまりに大きく、難しい。金沢に限らず、ひとつの都市を世界の諸都市との比較のなかで正しく定位するためには、世界の多様な都市への広範な目配りだけでなく、その類型論、発展段階論、そしてそこに内在する歴史的拘束性をひとつひとつ知悉したうえで位置づけるべき都市を捕捉しなければならない。このようなことは筆者の能力をはるかに超えた難題である。

そこで本研究では以下のような方法をとることにした。

1. まず日本の城下町の成立過程について、研究史を踏まえて新たな視点から位置づけ直すこと。ここでは筆者が近年注目している「都市アイデア」（都市をかたちづくる有形・無形の観念全般を指す）という鍵言葉を念頭において戦国期城下町から近世城下町までの道筋を明らかにしたい。そのなかで金沢という城下町にも言及を加えるが、いかに日本の城下町が特異な存在であったか（それは武士がつくった都市ということに大きく起因する）を述べることにする。
2. ついで世界都市全般に目を広げることにする。そのさい、ひとつのクライテリアとして、ユネスコ世界遺産に都市（都市の一部を含む）として登録されている西欧都市を取り上げることにした。しかも城下町が成立する時期を念頭において、16～17世紀段階での都市的状况に焦点を絞った。それでも数は依然として厩大な数にのぼるので、筆者を中心とする研究グループ（伊藤毅＋奥原徹・福村任生＜東京大学大学院工学系家研究科大学院生＞）が実見した都市を中心に概観した。実見したリアルな都市というのが条件となっている。
3. このなかでとくに金沢との比較で有用と思われる、ボルドー・トゥールーズ（フランス）、セゴヴィア・トレド（スペイン）について各論を試みた。1で指摘した金沢の都市としての特質は、これらの都市の特質と響き合う点も少なくないが、むしろその差違が際だつ。この叙述のなかで金沢の特異性が浮かび上がらせようとした。
4. 本研究は具体的な世界の都市を実際に訪れ、その解析を抜きには一步も進まないと思われたので、この委託研究を契機に、すでに予備調査を行ったことのある、オランダ・フリースラントの諸都市の調査分析を行った。調査は2010年10月に実施し、多くの成果が得られた。調査は単に16～17世紀都市の解明というテーマだけでなく、「一群の都市」「都市インフラ」「都市と水」などの観点も盛り込んでいる。この調査分析の詳細な情報は本文に譲るが、フリースラントにおいて中世に成立した、いわゆる11都市（eleven cities）は、16～17世紀に黄金期を迎えるが、金沢のように巨大化しなかった。それは都市間のネットワークのなかで領域的發展を遂げたと言

い換えることができる。つまり、中小規模の都市群が連携しながら成熟を遂げたわけである。翻って金沢を注目すると、たしかにひとつの城下町という都市類型ということができるが、金沢を仮にひとつの城下町を逸脱した領域と捉え直してみると、そこには城下町を構成する基本要素としての城郭、町人地、武家地、寺社地以外に重臣屋敷や小松城下町からの移転地区、大規模庭園をともなう御殿など、多核的地区が複合的に分散していることを知る。これらの多核的地区をひとつの小規模な都市とみなせば、フリースラントの11都市ネットワークと比肩しうるような領域的成熟を再発見することができる。

以上のような観点から、以下本文は4章構成とし、それぞれの章で世界史的観点からの金沢城下町を位置づけるための基礎作業を行ったのである。

1. 城下町とは何か

・城下町研究の系譜

(1) 小野均の先駆的研究

城下町研究において画期的な研究を行った研究者として小野均をあげなければならない。小野は明治37年(1904)岡山市に生まれ、昭和3年(1928)東京帝国大学文学部国史学科を卒業。卒業論文『近世城下町の研究』を同年出版し、史料編纂所に勤務した。この研究は当時まったく未開拓の分野であり、小野は一から城下町関係の資料を博捜し、その基礎を築いた。のちに問題となる城下町に関する主要な論点はすでにこの研究のなかで提示されており、しかも世界史的視点を含んでいたことが特筆される。しかし不幸にも第2次世界大戦さなかの昭和18年肺炎を得て早逝してしまう(享年39歳)(注1)。

小野は城下町の重要性について以下のように述べ、城下町研究の世界史的、現代史的意義について強調する。

「近世に於ける本邦都市の発展は実に世界史的の問題にして、アムステルダム、ウィーン、マドリッド、ハンブルグ、ローマの諸都市が人口僅か十万ないし二十万の間を低迷しつつありし十七世紀に於て、我が江戸及び大坂はロンドン、パリをも凌駕せんとする巨大都市として、既に現代都市の有すると同じき幾多の「都市の悩み」の裡にあった。近世都市の発展はただ江戸、大坂のみに止まらずして、現代本邦都市の過半はその成立と発展との基礎を近世に置くものである。而して近世封建領主の居城下に、これを中心として成立したる都市即ち城下町は実に近世都市発展の中核を成すものであって、現代多数の諸都市の一角には今なお石畳巖として旧城郭の屹立せるを発見し得る。故に城下町の研究は即ち近世都市、ひいては現代都市の意義を解明すべき秘鑰である。」

小野による城下町の都市史的特質は以下の3点に整理することができる。

①城郭を中心とした都市：「城下町とは城郭を中心として成立せる町の謂いであり、門前町が寺社の門前に発展せると一般である。中世及び近世の初期に於ては「堀之内」「根小屋」「山下」と呼ばれたが、後一般に城下町と称し、幕府の所在地たる江戸を初め、諸侯の居城下に成立せる町を呼称し、山下、根小屋等の名称は僅かに城下町の一部に保存せられているに過ぎない。」

②計画的都市：「徐々たる人口戸数の増加に依って村落より都市に成長せんとするものではなく、既に準備せられたる諸要素を集中総合し、万事を一朝にして解決せんとする近世城下町に於ては、ここに「町割」即ち、都市計画の実施を必要とする。」

これに続いて小野はヨーロッパの都市計画にも言及する。すなわち、「歐洲の都市計画の歴史はまたこれと同様である。上代都市に於て実施せられたる都市計画技術は漸を追って発展せる中世都市に於て見るあたわず、(略)しかるに十三世紀に於て、Edward一世によってフランスAquitaine, Guienne地方に新都市建設を見るに及んで、ここに整然たる都市計画の復活を見た。(略)仏のMontpazier, Libourne, Sauveterre, Monsegar, La Lnde, Samite, Foy 英国に於けるWinchelseaを初めとせる510余の新都市(略)」。

これはまさしく南西フランスのバステードについて述べたものであり〔伊藤 2005b・2009a〕、小野がどのようにしてバステードの存在を知るに至ったかはきわめて興味深い問題であるが、少なくともバステードに関するもっとも早い時期の言及とみて間違いないだろう。

城下町の都市計画、すなわち「町割り」は小野によると、「近世に於て再現せし城下町の都市計画は京都のそれに模せられたるものと称せられている。即ち『三州志』は高岡の都市計画に関して「京師ノ町形ニ倣ヒ作ラルトナリ」と云い、『飯田万年記』は信州飯田の都市計画に関し、「京都ノ町割ニ準ジテ堅横ニ小路ヲ割」と述べている。」と引用するように、京都がモデルになっているという。この問題はのちに戦国期の織豊系城下町の形成過程について小島道裕、千田嘉博、前川要などが発見した、長方形街区+短冊型地割りのセット生成を付け加えなければならないが〔小島2005・千田2000・前川1991〕、大筋において小野の見解は間違っていない。城下町は寺内町の都市計画と一見似たような形態をとるが、本質的には異なる系譜をもつとわたくしは考えるが、それは京都モデルの採否の差として理解すべきものである(注2)。

③ゾーニング：「近世城下に於て、これら両者は確然とその地域を別にするに至った。故に同一郭内に存在した侍屋敷と町屋とは、都市計画の実施に際し、この郭を異にし、侍屋敷は郭内に、町屋は惣曲輪を有するものに於ては、侍屋敷は内郭に、町屋は外郭に置かるるの傾向を有した。」と、小野は城下町の空間構成の重要な事実として身分に応じた住み分け、すなわち都市計画でいうところの「ゾーニング」が截然と行われたことを明らかにしている。

かくして、小野の先駆的研究は城下町の歴史的な位置づけはもとより、空間的特性につい

てきわめて重要な諸点を明らかにし、その後の城下町研究の確かな基盤を築いたのである（注3）。

（2）矢守一彦の歴史地理学的研究

歴史地理学からの城下町研究は早くに中丸による小田原を対象とした戦国期城下町の研究があり〔中丸 1959〕、松本豊寿の安芸を中心とした研究〔松本 1967〕などひとつの研究ジャンルを形成しつつあったが、もっとも包括的かつ総合的に城下町論に接近したのは矢守一彦であった。

矢守の代表作である『都市プランの研究』は、世界史的観点から城下町プランの類型化を試みた野心作で、ヨーロッパ中世都市、ドイツ中世都市（都市核、広場、囲郭、街路パターン）、朝鮮邑城、城下町を取り上げている〔矢守 1970〕。

矢守による城下町類型は以下の通り。

（A）型：中世末ないし戦国時代に卓越的なタイプ。城と城下の垂直的隔たりが顕著であり、地域制が未分化・未整備なもの。

（B）型：惣構え型。侍屋敷と町屋が近接、あるいは混在する。

（C）型：地域制が徹底し、内町と外町の区別が設けられる。→内町外町型

（D）型：近世城下町の典型。町が郭外におかれ、郭内には城郭および侍屋敷のみが収まる。→町郭外型

（E）型：元和偃武後の城下町。侍屋敷も郭外へ追い出され、城郭のみ郭内におかれる。→開放型

この類型はその後城下町研究の基本的枠組みを与え、戦国期城下町研究の進展を促すきっかけになった。なお、矢守はその後、城郭の正門である大手につながる街路の形態から、縦町型、横町型の別類型を提示し、城下町類型の精緻化がはかられた〔矢守 1988〕。矢守の城下町研究史上果たした貢献はきわめて大きく、とりわけ次にみる建築史学からの研究に決定的な影響を与えた。

（3）建築史からのアプローチ

①城下町のトポロジカル・プランニング

伊藤鄭爾は日本都市史の通史を叙述するなかで、城下町の捉え方について新しい見方を提案する〔伊藤鄭爾 1960〕。

「（城下町には）視覚的に明確に類型化できるいかなるパターンも存在しなかった。（略）しかし私たちが城下町の平面を分類するにあたって視覚的形態ではなくして都市要素の相互関係または都市活動のシステムのパターンによって規定するとほとんど唯一ともいえるシステムパターンにまとめることができる。」「すでに小野均氏は『近世城下町の研究』という画期的な著書の中で次のような意味のことを述べている。城下町は城郭を中心としてその回りに武家町を配し、市内を通過する幹線道路沿いに町屋をつづけたものであると。これはおそらく城下町の計画者が計画の原則として頭に描いていた唯一のシステムパター

ンであると思われる。(略)このような計画概念は位相幾何学(トポロジー)のそれときわめてよく類似しているので、ここでは仮にトポロジカル・プランニングと称しておこう。」

伊藤が見事に看破した城下町のもつ位相的同型性は、城下町の都市アイデアを考えるさいに重要なヒントを与えてくれる。城郭を中核とした同心円的な空間構成は一種のダイアグラムとして計画者の観念のなかに宿っていたはずであって、軍事都市として出発した城下町は、まずもって城郭という堅固な守りを中心におくことこそが武士の共通する認識であったことは疑いない。

かつて小島道裕は城下町の普遍性に言及しながら、場合によっては「秀吉マニュアル」のようなものがあつたのではないかと述べたことがあつた〔小島 1993〕。もちろんそのようなマニュアルは発見されていないし、存在したとは思えないが、戦国期を戦い抜いた武士が、都市を建設するにあたって城郭を中心とした都市構成モデルが観念レベルで共有されていたことは大いにありうる想定である。

②城下町の性格規定

西川幸治は寺内町研究において先駆的業績をあげたが、城下町についても独自の論点を提示したことが知られる〔西川 1972〕。西川は戦国期の城下町について、戦闘にあたってはみずから城下の焼き払うという行為に着目した。すなわち、「中世末、戦国争乱の世に、武将たちは各地に多数の城郭を構築し、ここを攻防の拠点として、その領国の拡大と確保をはかった。(略)戦闘をはじめると、まず城郭の外郭、城下の民屋に放火していることがわかる。合戦は城下を焼きはらってのちはじめられた。(略)戦闘にあたって城下は攻撃側によって放火され、守備側にあつて自焼されるべき運命におかれていた。」のである。

この城下町の「自焼」という行為は城郭そのものとその外側を取り巻く領域がいまだ密接な関係を形成していなかったことを雄弁に物語るものであり、都市として未成熟の段階にとどまっていたことを示している。

ついで西川は戦国期から近世にかけての城郭の性格について、次のように述べる。「中世の城郭が「城堅固の城」「所堅固の城」としてもっていた戦闘本位の城郭の性格はうすくなり、防禦性もほとんど問題にされなくなり、かわって天下統一あるいは領国支配の拠点としての性格をつよめ、城下は人々が集い来り居住するにふさわしい立地がつよく主張されてきた。(略)攻防の拠点として構築された中世的城郭とは質的にまったく異なる近世の城郭が封建的権威の象徴として現出したことを示している。近世的城郭は建築的構成においても、また自然的調和においても芸術的存在にまで高められ、城下町の中核として城下に居住し、あるいは城下を訪ねる人々の上に圧倒的な力強さと威厳をもって屹立することになり、近世社会の権威の頂点を地上に表徴し、視覚的にも城下町の景観の中に明確に位置づけられることになった。」というのである。このことは西川の「城下町＝擬制的軍事都市」論に接続していく。「城下町は中世を通じてつちかわれた戦闘本位の軍事的性

格によって貫かれていることは明らかである。しかし、城下町を総体としてみると、そのほとんどが環濠城塞都市の性格を示していない。(略)幕藩体制によって保障された太平の世にあって、城下町はたてまえとして軍事的性格によって貫かれた戦闘本位の都市であっても、しょせんはその原型たる中世の土豪屋敷構や戦国の城下にみられるように、戦闘に際して破壊される運命のもとにおかれ、都市としての防禦性のきわめて弱い擬制的軍事都市であった…(略)近世の城下町は兵農分離・商農分離による生活居住空間の分離と都市・村落の自衛的防禦とその城郭の解体と武装的解除を前提として成立したものといえる。」

また小野均が早くに指摘していた身分制にもとづく住み分けについては、「城下町的生活空間は封建的・身分格式秩序による地域的・空間的固定をその特色としている。(略)身分制秩序による居住区の分離と固定が近世における生活空間の構成を大きく規制した。このことはまた、城下町の核である城郭がその身分的閉鎖性の故に、「閉ざされた核」として城下町の都市生活の機能的核となりえなかったように、城下町の計画的矛盾の要因ともなったのである」とし、城下町の矛盾という捉え方が鮮明に打ち出されている。

西川は戦国期の京都の町や町組の地縁共同体としての結束、寺内町の宗教的運命共同体の達成に大きな評価を与える一方で、城下町についてはむしろその負の側面を抉り出そうとしている。この評価の転換は興味深い問題を含んでいた。

・武士という存在

城下町は武士の創出した都市であって、戦国期から近世にかけて日本全国にゆきわたった普遍的都市類型である。とすれば城下町をつくった武士という存在こそが城下町のアイデアを考えるために不可欠な要素ということになる。

(1) サムライは嘘つきだ！

延慶本『平家物語』に「越中前司最期」というくだりがある。すなわち、寿永3年(1184)源平合戦の帰趨を決する一ノ谷合戦、平家侍大将越中前司盛俊と源氏側武士猪俣則綱との戦いにおいて、盛俊優勢で、則綱を組み伏せ、今にも首をかこうとした時、則綱いわく「この合戦はもう源氏の勝ちだ。主君を失った貴殿はもうすぐ落人になる。私を助けたら、貴殿はもとより一門親族すべてを助けよう」と和議を持ち出した。両者のあいだに和議が成立し、仲良く並んで腰掛けていると、そこに則綱親戚の武士人見4郎が登場した。盛俊が人見に気をとられている間に、背後から則綱を突き刺し、首を取ってしまう。しかしこの首は人見に横取りされる。則綱もぬかりなく、わずかの隙に耳を切り取り隠し持つ。その後、論功行賞の場で、人見が盛俊の首を差し出し自分の手柄であることを述べると、則綱は隠し持っていた耳を出し、結局この手柄は則綱のものになる、という話だ。

このやりとりを取り上げた佐伯真一は古代・中世・近世の武士の戦いを描いたさまざまなテキストを詳細に検討し、古代から近世に至るまで、だまし討ちはごく常態の出来事で

あったと述べる。むしろ、だまし討ちを無自覚に肯定する意識がすでに古代に胚胎するという。それを自覚的に肯定する意識は、中世の前半から後半へと時代を経るにしたがって、しだいにはっきりと姿をあらわすようになる。すなわちだまし合いは倫理的に非難されるべき問題ではなく、むしろ武闘能力の不可欠な要素として、謀略、知略こそが賛美されていたのだ〔佐伯 2004〕。

佐伯の論によると、そもそも武士道なるものは、近世に入り平和な時代になって、儒教と結びついたかたちで、語られるようになったものである。しかしそこでも『甲陽軍鑑』のように、勇猛・果敢・武略・知略を賛える傾向が強く、「フェアプレイ」とは無縁の存在であった。死の美学を称揚する『葉隠』は、当時佐賀藩で読まれたばかりで、全国的には無名の存在であったという。佐賀藩でさえ、異端の書として秘本扱いしていた。『葉隠』が有名になるのは、明治39年以降のことで、われわれが思っているよりずっと新しい。しかしその潔い美学はその後日本軍隊のエートスとして翻案され、しっかりと根を下ろしたのである。

武士道といえば、英文で書かれた新渡戸稲造『武士道』（明治33年）が国際的にも有名である。しかし実のところ新渡戸は武士道という言葉を自分の造語と考えていた。彼は最初から外国人読書を想定してテキストを書き下ろしたのであって、日本の歴史や文化への知識がない読者に対して、西洋文化の枠組み、とくに騎士道に依拠しつつ、自己の内面をとらえ返す思索のなかから、武士道を「創造」したに過ぎない。したがって武士の死の美学や武士道に象徴される倫理的な行動規範は平和な時代に入ってからつくられた価値観なのである。

とすると、敵を欺き、だまし合いを常態とするプロの殺戮軍団がつくった城下町とは、一体何なのか、という新たな問いが浮上してくる。いままでこうした武士像を前提とした城下町論がなかったことはいささか不可解なのである。世界のあらゆる文明圏に誕生した都市を検索しても、武士や騎士が建設した都市は存在せず、城下町は世界史的にみて、きわめて稀有な存在なのである。

（2）武士の3形態

中世の武士、武士団を対象にした優れた先行研究は枚挙にいとまない。そのなかでも石井進の『中世武士団』ははじめて武士団と具体的な在地のトポグラフィと関連づけて描き出した記念碑的な作品であった。この研究を受けて五味文彦は『武士と文士の中世史』において、中世から近世にかけての武士の存在形態の変化を以下のような明快な図式で捉え直した〔五味 1992〕。

すなわち武士は当初、獣を狩猟して生業を営む「狩猟民」であったが、中世に入ると土地を媒介とした主従関係で結束した戦闘集団としての性格を強めつつ、在地において「農民」として定着した。そして戦国期になると、戦闘のために在地と戦場を行き来しながら、

有力な戦国大名は家臣団、職人、商人を配下に組織し、戦国期城下町を建設する（都市民）。このように狩猟民→農民→都市民というドラステックな変化を遂げるのが武士という存在であるが、狩猟、戦闘、移動という本性は時代を通じて継承された。わたくしもかつて「宿」という場の形成を考えたことがあったが、そこには移動を前提とし、宿衛のための場としての武士系の宿と、のちに宿場町として展開する町人地系の宿との2類型が見いだされた〔伊藤 1994〕。この武家地系の宿は高橋慎一郎のいう京都六波羅の「武家地」の性格と共通し〔高橋 1996〕、戦国期城下町の家臣団屋敷や近世城下町の武家地へと継承される武士の都市居住の重要な存在である。近世において城主が他の城下町に転封されるさい、家臣団もまた「鉢植」と称し、一団をなして移住した例が少なからずあるが、これも武士のいう存在の本来的に有する流動性に由来するだろう。

（3）武家文化の劣等性

戦国大名は戦闘に明け暮れていたわけではない。しばしばみずからの地位を正当化するために、あるいは名誉心を満足させるために官途獲得や上洛運動を積極的に行ったことが知られている。天皇の住む京都へ大名を駆り立てたもの、その理由は、「第一には近隣大名への対外意識、軍事的事情といったものが考えられるが、共通して見られる現象は、大名たちの抱懐する京都への特殊な感情を見逃すわけにはいかない」〔今谷 1992〕。

今谷明はこの「京都への特殊な感情」について、次のように説明する。「鎌倉時代以来の数百年の武家の伝統をもってしてもなお、彼らは自前の文化の優位性を公家に対して主張できないのである。戦国大名の文化的な動向として注目されるのは、宸筆の典籍のような天皇関連の文物を珍重し、絶えず中央に求めるという傾向がみられる。（略）かつての唐物崇拜に対し、戦国期には「公家物崇拜」とでも称すべき宸筆典籍が大名の間でもてはやされた。（略）彼らの心理の深層にあるものは、中央の文化なり文明に対する（技術も含めた）強烈な劣等意識ではなからうか。そしてそのコンプレックスこそ、天皇への特別な、一種屈折した思いであったと考えられるのである」と。

武士は武力を背景に力を蓄え、権力の暴力装置として存在意義を高めながら、ついにその頂点に君臨しようとしていた。しかし武士はつねに文化の劣等性に苛まされていたのであり、彼らの天皇崇拜や上洛は、そのコンプレックスの裏返しであったことは明白である。安土桃山文化の澁刺とした躍動する意匠は確かに武士の文化への新たな息吹を示すものであったが、その背後には伝統的な公家文化に対する反発がこめられていたはずである。公家は公家で武士の実力に対して表面的には従うものの、心の裡では文化や教養を欠いた成り上がり者として見下す態度は根強く残っていたのである。

（4）小京都のアイデア

戦国期の都市に京都を理想とした「小京都」が生まれ、その多くは戦国期の城下町であったことはあらためて注目に値する。京都はわが国の歴代都市のなかでも卓越的な地位に

あったことは疑いなく、平安京以降天皇が居住する特別な都市として憧憬の的であった。「すべて帝都の模様をうつした」大内氏の周防山口、越前朝倉氏の「越南の都」一乗谷城下町、応仁の乱を契機に在地に下向した一条教房が土佐中村で行った町づくりなどがよく知られている。

山口は大内弘世が延文年間（1356～61）に建設された都市で、「大内氏系図」には、「始めて吉敷郡山口に遷す。此の地の繁華は此の世に起こる。山口に祇園、清水、愛宕寺を建立し、統べて帝都の模様を遷す」とそのコンセプトが明瞭に記されている。弘世は山口建設にあたり、古代条里制を採用し、一ノ坂川にそって方形の大内館を構えた。館は堀と土居によって圍繞され、次の教弘の時代には館の北隣に築山館が増設された。

館の西側に南北道路（竪小路）、南側に東西道路（大殿道路）を通し、館周辺に陶氏、内藤氏などの庶族、重臣の居住区が割り出された。竪小路は南端で石州街道と交差し、街道沿いに大町、円政寺町、太刀売町などの町々が分布した。竪小路や大町筋にはさらに多くの横町や小路が細かく分岐し、多くの商人や職人が町屋を連ねたと想像される。

町割りと平行して、大内氏は京都ゆかりの祇園社や北野天満宮を勧請し、祇園祭の山鉦巡行も行ったのである。延徳4年（1493）の「大内氏掟書」には、築山館の築地の上から祇園会を見物することを禁止する条文があり、見物場所を確保するのめたいへんぐらい見物客で賑わっていた（注4）。これはいまも鷺舞として伝わる。また京都から名僧を招いて、山麓の各所に多くの寺院も建設された。大内氏は在京経験があり、京都をモデルとした町づくりを行ったことはほぼ確実であろう。

大内氏が建設した山口を江戸時代に復元的に描いた「山口古図」を子細に眺めると、山口は京都というより、むしろ戦国城下町の特徴をよく備えた都市とみた方が正しい。堀に土塁によって守られた館とその周辺の武家屋敷地区、街道沿いの市町、職人町などからなる都市構成は、明らかに戦国期に各地に建設された城下町にほかならず、町割りも京都のように整然としたグリッド状のものとはいえない。

東、北、西の3方が山に囲まれ、南に平野が拓けていること、中央に一ノ坂川が流れることなど、地形的条件が京都に似ていることと、京都を象徴する寺社をやはり似たようなロケーションを探して勧請したこと、洗練された祭礼や文化が京都から持ち込まれたこと、これらが山口を小京都たらしめた大きな条件であった。大内弘世は在京中に三条西実隆など当代屈指の文人たちとの交流があり、応仁の乱を避けて山口を訪れる公家や学者を歓迎した。連歌師宗祇も山口に招かれており、築山館でしばしば連歌が興行された。また京童を招き寄せ、彼らを町の辻々に立たせて、田舎言葉を矯正しようとしたという伝えも残されている。

戦国期ころから近世にかけて数多く作製された各種の「洛中洛外図屏風」もまた、京都という都市がいかに図像としても武士の間で珍重されたかを物語っている。たとえば三条西実隆の日記『実隆公記』には永正3年（1506）12月、越前朝倉氏が土佐光信の描いた「京中図」を新調したことが記されている。朝倉氏もまた京文化の摂取に積極的であ

った。三条西実隆は『伊勢物語』や『源氏物語』などの古典に通暁する一方で、和歌や連歌、茶の湯にも詳しい当代随一の文化人で、日記には多くの地方武士との密接な交友関係がうかがわれる。越後上杉氏、越前朝倉氏、若狭武田氏、周防大内氏などがしばしば日記に登場し、彼らは実隆から熟成した京文化を吸収したのである。

北条氏直は小田原の城下町建設にあたり、京の町屋の板葺をまねて、草葺民家を京風の板葺屋根にあらためたという伝えもあるように、次第に整いつつある京都の統一的な町並み景観もまた彼らの理想像のひとつであった。武士がやがて天下人として支配の頂点に立つ前夜の戦国期城下町は、都市としてはあらゆる点で未成熟であったし、武士ははまだ固有の都市の理想像をもたなかった。当該期の武家文化の劣等性と小京都の存在はそうした事情を示しているものといえよう。

・信長のアイデア

(1) 天のアイデア

戦国城下町から近世城下町の展開に織田信長が果たした絶大なる役割は既往研究が指摘するとおりで、ここでも否定できない。しかし長年にわたる信長研究の蓄積のなかでひとつの注目すべきブレーク・スルーがあった。

立花京子は、天正10年(1582)5月の信長への三職推任事件において、従来朝廷が主体的に推任していたとみられていたのに対して、文書を新たな観点から再解釈し、信長が京都奉行村井貞勝を通して朝廷に推任勅使派遣を強要してそれに成功したことを論証したのである〔立花 2000〕。三職推任事件とは、本能寺の変直前、信長の官職につき朝廷側から推任交渉があり、信長を太政大臣か、関白か、将軍かに推挙するための勅使を送ったが、信長は自らの意思の表示を避けたという事件である。

立花はさらに信長の全国支配への道程を再検証し、信長の全国制覇の正当性は、正親町天皇から付与された、源頼朝以降幕府将軍が本質的に保持する「天下静謐執行権」であることを主張する(注4)。信長の「天下布武」は頼朝の「天下草創」と同一理念であり、永禄13年(1570)3月1日に信長が将軍と同等の権限の獲得に成功したのである(注6)。さらに、信長は室町幕府将軍の保持する将軍権限を頼朝まで回帰させ純粹化させることにより、足利義昭を京都から追放する名分を得、さらには自己の政敵を朝敵として討伐することを可能にしたというわけである。

立花の研究は信長研究史のなかで信長のより徹底した全国制覇への戦略を具体的に明らかにした点で大きな意味をもつとともに、それまで信長でさえタブーとみられていた朝廷内部にまで信長の手が及んでいたことを示したことは重要である。有力な戦国大名でさえ、武家文化の劣等性に苛まされていたのであり、京都は依然として彼らの憧憬の文化都市であったが、信長はこうした戦国大名の保守性と限界を一举に超えうる革命児であったことを別の面で強調してくれたのである。「天下」という語は既成の言葉ではあったが、信長によって再発見され、追求された一種のアイデアであったと思われるのである。とりわけ「天」

という語に信長は異常なまでの強い関心を示したことは確実である。

(2) 信長の城と城下

信長は天文3年(1534年)那古野城(勝幡城)で生まれた。ここで天文24年(1555)まで過ごす。天文24年、信長は守護代織田氏を滅ぼし清洲城に入城する。尾張支配の拠点となる城郭で、信長の居館と惣構えがあったことが知られている[小島 2006]。

信長は永禄6年(1563)、より防御に有利な山城を必要とし、美濃を後略し小牧城へ移転する。考古学的な知見によると、長方形街区と短冊形地割が検出され、両側町の構成をとっていたという。永禄8年足利義輝暗殺後、花押を「麟」に変えている。

永禄10年(1567)、美濃を平定し齋藤龍興から稲葉城を奪い、岐阜城に入る。天正4年(1576)までここを居城した。「岐阜」という名称は信長による命名であって、信長が側近として重用した禅僧沢彦が中国の故事にもとづいて例示したものから選ばれたものと伝える。

岐阜に移ってからの信長の行動は迅速であった。すなわち永禄10年正親町天皇からの決勝論旨を手にするると全国制覇の大義名分がようやく整い、永禄11年足利義昭を供奉上洛し幕府を再興するとともに、征夷大將軍に着任する。義昭追放後、信長の強い意向により元号をそれまでの「元亀」から「天正」に改元する。ここにも「天」への強い執着がみられる。

岐阜城は、「宮殿は非常に高いある山(金華山=稲葉山)の麓にあり、その山頂に彼の主城があります。驚くべき大きさの裁断されない石の壁がそれを取り囲んでいます。第一の内庭には、劇とか公の祝祭を催すための素晴らしい材木でできた劇場風の建物があり、その両側には、2本の大きい影を投ずる果樹があります。広い石段を登りますと、ゴアのサバヨのそれより大きい広間に入りますが、前廊と歩廊がついていて、そこから市(まち)の一部が望まれます」とあるように(ルイス・フロイス著・松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス 日本史2 織田信長篇2』中央公論新社、2000年)、稲葉山山頂に城郭があり、信長とその家族はふだんそこで起居しており、来客があると麓の居館で接待した。特別な場合には、翌日山頂の城まで賓客を案内し接待したことが『信長公記』にみられる。

岐阜城下町の構成は、惣構えのなかに信長居館があり、「古屋敷」という地名は武士団集住区があったことを示している。その西側にはいくつかの町が存在していたが、惣構えによって囲繞されていた。惣構えの外の地理的に離れた場所には、信長によって楽座令が発給された加納市場があり、戦国期特有の城下町の構成を呈していた。

天正4年(1576)、ついに信長は念願の安土城の建設着手する。「平安楽土」から2字をとって「安土」と命名し、安土山の山頂に城郭を築こうとした。もっとも高い位置を石垣で囲い、そこに信長の居所であり城郭の中心的な施設となる「天主」を建設する。

安土城の縄張りは①外柵形や馬出しなどの複雑な出入口を備え、求心性の強い城郭プランであり、②礎石建ちで瓦葺きの建築群による耐久性を意識した建築への志向性があるこ

と。③高石垣による総石垣化や天守建造などによって見せる城としての強い象徴性が認められ、一連の織豊系城郭の展開の画期となったと評価される〔千田 2000〕。安土山はきわめて急峻な山であり、その山頂を中心とした縄張りのヒエラルキーとそれに対応する身分制にもとづくゾーニングは、城郭をひとつのモニュメントとして演出した結果生み出されたものと考えられ、強い垂直性の表現はそれまでの日本建築には存在しなかったものである。

問題となる天主復元については、主要な史料である『信長公記』の「安土山御天主の次第」にもとづき過去数多くの復元案が提出されているが、決着をみない。

内藤昌は池上右平作「天守指図」（静嘉堂文庫蔵）を発掘し、これをもとに天主台を含む現地調査を重ねながら詳細な復元案を世に問うた〔内藤 1976〕。内藤の復元案は吹抜を伴う大胆かつ独創的なデザインであったため、世間の注目を集めた。これに対しては宮上茂隆が徹底的に史料批判を加え、内藤が依拠した「天守指図」は「安土山御天守の次第」をもとに後の時代に復元した図である可能性が高く、史料的問題が多く到底認めることはできないと反論した〔宮上 1977〕。とくに内藤案の見せ場でもある、天主内吹抜空間と宝塔の存在は現状遺構からみても疑問視されている。

とはいえ「安土山御天守の次第」は現在のところほとんど唯一の基本史料であることはかわらず、各復元案は細かな点で微妙に異なるものの、「安土山御天守の次第」を通して知ることのできる天主の性格はおおよそ共通する。それによると安土城天主は7重天主で、狩野永徳による水墨画、金箔を多用したインテリア、中国故実や仏教、花鳥風月などをテーマとした各室からなり、独創的かつ豪華な建築であったことは確実である。そこにはチャイニーズ・ロア（中国幻想）、王朝ロア、仏教ロアともいべき複数のプログラムが共存する特異な建築であったという美術史からの見方も出されている〔大西・太田 1995〕。安土城天主は不明な点が依然多く残されているが、明らかにそれまでの建築類型とはまったく異なるタイプの建築が登場したことは間違いない。異なるプログラムを積層しつつ屹立する、垂直性の強い建築は信長のアイデア、とりわけみずからを神格化してまで「天」の高みに到達せんとする信長の意欲が凝縮した建築である。

安土山山腹から山麓にかけては武家屋敷地区が展開していた。信長は家臣に対して国元の屋敷を焼き払うなどの強硬策をとり、妻子を伴って城下町集住を強要した。これはのちに推進されることになる兵農分離のさきがけであって、当時信長軍以外の戦国武士団はいまだ兵農分離は徹底されていなかった。信長は専門的な軍団をはじめ意識的に組織した。城下の平坦地には町人地が広がっていた（現在の字下豊浦、常楽寺、慈恩寺付近）。天正5年（1577）、安土城下に楽市楽座令が出され、城下居住町人へ諸役免除などの特権を保証し、外部からの商工業者移住を促進した。この時、中国皇帝を意識した双龍に囲まれた天下布武の朱印をはじめ使用したとされる。

このように安土城および城下町は織豊系城郭の系列のなかに位置づけられるし、近世城郭および城下町の転換点となったという評価は疑いないところであるが、むしろその不連

続性にこそ注目すべきだろう。安土の前後で城下町という都市は大きくその性格をかえた。武家が抱えていた天皇や京都に対する潜在的劣等感は一掃された。武士の頂点に立つ信長こそ天に君臨する比類なき存在であることを信長は示そうとした。信長にとって天皇や朝廷はコントロールすべき一対象に過ぎず、京都もまた焼き払っても惜しくない存在であった。信長という存在はまさに激動の移行期にこそ登場できた特異点であり、信長が構想した都市アイデアは城下町という世界史上稀にみる都市類型を造形する原動力であった。そして忘れてならないのは、華麗な城下町の背景に控える都市の軍事都市として側面である。プロの殺戮軍団がつくりあげた都市の武断的な性格は。平和な時代に入ると失われてしまうことになるが、城下町という都市類型を成り立たせているもっとも基本的な性格である。

(3) 視線のアイデアー城下町のヴィスタ

近世城下町のヴィスタについて桐敷真次郎が先駆的な研究を発表したあと〔桐敷 1972〕、この視点を引き継ぎつつ、膨大な城下町史料を博搜しながら日本の城下町の全体像理解に大きな貢献をした建築史からの研究として宮本雅明の一連の論考がある〔宮本 2005〕。宮本の前近代日本の都市理解は都城と城下町を主要な都市類型とする点では吉田伸之とかかわるところはないが、その発展のプロセスについて、「日本ではこれらの都城が、城下町へさらには現代都市へと、連続的に成長を遂げることはなかった。古代都城とは一旦断絶した中から、中世を通して新たな都市要素が、その存立を保障する多様な『私』を拠り所として成長していった。これら都市要素を再編・結集することによって成立したのが城下町である」と述べる。続けて「こうした歴史を刻んだ前近代日本の都市は東アジア世界の中では異色である。むしろ、ローマの植民地に起源しつつも、中世に始まる『公共性』の論理の貫徹する新たな社会と空間を創り上げたヨーロッパ都市の歴史に相通ずる感がある」という注目すべき指摘をしている〔宮本 2005〕。

宮本がヴィスタ計画を中心に長年研究を続けた城下町論の一つの到達点は、中世から近世への転換点を「公」と「私」から再評価することであった。すなわち、「こうした城下町の建設を通して、中世社会において『私』の世界のなかに埋め込まれていた『公』の世界が自立を果たした。城はこの『公界』と『公儀』を束ねた一元的公権力を象徴する存在として機能した。城と城下町の建設を通して、『私』が卓越した中世社会の枠組みが解体され、『公』が卓越する近世社会の枠組みが形成されたのである」。

こうした観点から戦国期に大名が一貫して関心を示しつつつけた市町と城下の町との関係について、「『公界』に成立した市町を城下に結集した場合、その市場平和を保障する領主の視線は、城下町の都市プランを構成するうえで大きな役割を演じた。(中略)城下に開かれた新しい市町を、城主の視線が貫くよう、ヴィスタ(見通し)に基づいて町割することは、市場平和を保障する戦国大名の視線を常に浴びることを意味し、市町に対する城の果たす役割を明確に示してくれる」と述べる。安全で平和な領域における商業活動の賑わいの光景は戦国時代の混乱期において、ひとつの希望のアイデアであったろうし、戦国大名はこうした場の創出に向けて自覚的になりつつあった。しかしこの段階ではいまだ天守

は成立していなかった。

織豊政権下の城下町では天守が登場し、天守から市町を貫くようなヴィスタが成立するとともに、城下からは垂直に屹立する天守を見通すような視線が得られる。とりわけ宮本が注目するのは、ヴィスタの焦点に天守がたちあられたことであって、本町筋から見通せた本丸天守は文禄4年（1595）を境に消滅し城下町史におけるごく初期段階のみの現象といえるかもしれないが、「一元的公権力の存在を城下の人びとに深く印象づけたに違いない」と評価する。

城下町の類型はすでにみたように矢守一彦などの歴史地理学における蓄積があり、それを継承・発展させたのも宮本雅明の重要な貢献であった。宮本の整理によると、城下町の類型の発展は、総郭型から町郭外型へ、町郭外型から町開放型へと単純化される〔宮本 2005〕。この展開過程もまた自由な交易の場の拡大・発展という文脈から理解することができて、町郭外型が支配的になる17世紀以降は広範な領国単位の平和領域が達成されつつあり、もはや都市全体を圍繞する総構えは必要ではなく、むしろ必要とされたのは平和領域での自由な商業活動を下支えする基底的な空間と社会の枠組みであった。

（4）アイデアからプランニングへ―藤堂高虎の城下町設計

先述した矢守一彦は城下町の発展類型を考察するとともに、城下町の都市計画、すなわち町割りと屋敷割りについても先駆的な分析を行った〔矢守 1970〕。それによると町割りには大きく碁盤型と短冊型があり、屋敷割りには「京型」と「江戸型」があるという。この問題はその後内藤昌の江戸城下町研究に継承されたが〔内藤 1966〕、あまり活発な議論へ展開することはなかった。そうしたなかで、藤田達生は一般書という制限のなかで、江戸時代の城下町設計者としてよく知られている藤堂高虎の実像を見事に描き出している〔藤田 2006〕。藤堂高虎は、近世城郭の基本的なスタイルを確立した人物であり、江戸城ほか数多くの将軍家の城郭普請に関与した。高虎の城郭普請は諸大名の手本となり、「城郭の縄張り、石垣の積み方、建造物の工法・装飾、室内を飾る障壁画や調度品までが、一定方向に収斂した」という（藤田同書）。

当時の築城は大きくみて、①占地する、②指図・資材帳簿を作成する、③縄張りを打つ、④資材を調達する、⑤石垣を普請する、⑥建造物を作事する、という6段階の仕事があった。どれひとつおろそかにできない重要なプロセスであり、近世城郭の設計とはそれまでの中世城郭とは格段に異なり、資金・資材・労働力の確保など、周到な計画なしには実現不可能な一大プロジェクトであったといえる。城郭建設は同時に城下町をプランしていくことでもあり、「高虎は城づくりの名人として有名だが、まちづくりの名人でもあった」のである）。

藤堂高虎の伊予時代に行われた板島・大津の城郭は主に改修であったが、3筋からなる塹町プランをもつ城下町は彼が本格的に普請したものである。そして高虎の代表作となった今治城天守は、全国的にみても層塔型天守のさきがけといわれるもので、矩形の天守台

の上に規格材を整然と組み合わせることによって全体をつくりあげた。これによって、従来の天守が抱える構造的欠陥を克服しただけでなく、工期や工費を大きく短縮することができたのである。信長によって創出された天主はすでにみたように城下町のなかにおいてもっとも象徴的なモニュメントであったが、高虎は「天守を実質的に城内最大の櫓に変えてしまった」〔藤田 2006〕。天守はほとんど使われることなく、「泰平の時代の到来とともに居住性は低下してゆき、平時は武器庫として、戦時には最期の防御陣地としての役割しか果たさなくなってしまう。そして城郭の中心は、御殿へと移ってゆく」。望楼型天守から層塔型天守への変化は、天守と御殿の機能的な変化とも連動していたことになる。

城下町はいまや冷静で緻密な技術官僚によって計画すべき対象であった。高虎は、伊予今治で近世城郭・城下町の基本プランを確立したとみられるが、それを公儀普請を通じて全国的に普及させていった。軍事要塞としての城郭は政庁となり、城下町は「街道を引き込み、幅広く直線的な街路を交差させ開放的な街区をつくることで、地域流通の拠点とすること」に主眼がおかれるようになる〔藤田 2006〕。このプロセスは宮本が指摘したヴィスタ計画の消滅と大きく関係し、初期城下町に込められたアイデアは短い期間で後退し、技術的なプランニングが前景に出てきたことを示している。このことは幕府の作事方・小普請方における技術官僚組織の整備と一連の動きであった。

(5) 城下町の個性—金沢を中心に

以上のように都市アイデアという観点から城下町の都市史的な流れを追ってみると、織豊期以降の城下町の一般性・共通性が目立つことは確かであるが、一方で都市ごとに異なる個性もけっして無視できない。とりわけ近世中後期に巨大化した城下町は、その規模はもとより内実も多様で複雑化し、結果として成熟した文化的個性を帯びるようになる。

江戸・大坂・京都の三都以外にも日本列島には、金沢、仙台、名古屋、広島、熊本などの大規模な城下町が地域的中心として繁栄した。そのなかでも加賀百万石の金沢は地方城下町としては別格の存在であった。

金沢の発展過程についてはすでに既往研究に詳しい。ここでは金沢の個性において、本報告に直接関係する部分だけを摘記しつつ、あらたな観点も導入してみたい。

①中世寺内町からスタートし、城下町建設が行われたこと（大坂は石山本願寺を母胎としており、金沢の都市的発展と比較することのできる唯一の城下町である）。

一平地と大河川が織りなす複雑な地形を見事に利用した城下町であること。金沢は港町を城下町のなかに包摂しない。その点では江戸や大坂、名古屋などと異なるが、逆に水運に全面的に依拠しない、金沢を地域拠点とするような求心的かつきめ細かな陸路のネットワークをつくりだした。江戸や大坂、京都の巨大さには及ばなかったかもしれないが、巨地形・微地形を巧みに利用しつつ巨大化していった、近世巨大城下町のひとつも模範的な姿を示している。これは信長の天のアイデアから近世城下町全般のプランニングへという、やや

もすれば単線的な流れの趨勢のなかで、きわめて成熟度の高い緻密な都市の計画が行われていった結果である。

②金沢は吉田伸之によって「複合城下町」の典型例と位置づけられている。この複合性は城下町内部に長家などの重臣クラスの武家地の居住区が多核的に包摂されており、「城下町内城下町」的性格をもつにいたったことによる。金沢の北陸地域における中心性は都市の巨大化を促し、城下町の枠組みを超えてさまざまな要素（支藩的要素を含む）を都市内に次々と併呑していったのである。この点も金沢が日本の近世城下町のなかでは特異な位置を占める理由のひとつとなっている。

③陸路中心の城下町ではあったが、それゆえに城下には地形条件を巧妙に利用した用水が発達した。金沢城下町の用水システムの高い水準については、すでに多くの先行研究があり、ここであらためて強調する必要はないが、クリークを編むようにして成立した佐賀城下町などと比較しても、金沢の水系は城下町全体のネットワークの要として見逃すことができない。

④領域都市 金沢はけっきょくのところ「城下町」というよりは、城下町という枠組みを借りた「領域都市」ということができないだろうか。城下町という単純な構図は早くから逸脱しはじめた金沢はさまざまな要素を次々と併呑しつつ巨大化を遂げる。このことは金沢という領域全体のネットワークとして捉え直す必要がある。この問題は4章で再検討を加える。

おわりに—城下町のアイデア

以上の大雑把なスケッチから抽出される城下町のアイデア的側面のうち、とりわけ注目されるのは次の3点であろう。

(1) 文化の周縁から政治の頂点

戦闘をその本質とする武士はつねに文化的周縁にあり、独自の文化を形成することはなかった。とりわけ戦国大名はすでに天皇や公家を圧倒するほどの実力をもちながらも、官途獲得や上洛運動を繰り返し、天皇家や京都への憧憬の念を隠すことはなかった。一方、戦闘本能の最終的に行き着くところは全国支配であり、それが実現すれば次なるテーマは海外進出ということになる（秀吉の朝鮮進出）。天皇制を前提とする武士支配はもとより限界があって、朝廷を守る「天下静謐」が彼らの武力行使の大義名分であった。信長・秀吉によって天下統一が実現すると、みずからを「天」と見なし、「公儀」と認識するに至ったのである。武士は文化の周縁から立ち上がり、政治の頂点をきわめた。その特異な歴史の象徴が城下町という、世界的にみてもまれな都市の誕生であった。

(2) 「天」のアイデア

近世城下町の成立を考えるうえで、信長が果たした役割は大きい。信長は「天」のシンボルを天主で表現し、みずからを神格化して中国皇帝になぞらえた。天主が表現する垂直方向の視線のアイデアと内部を飾った図像のアイデアは信長のプログラムしたものであっ

たはずである。信長はそれとともに天下布武印などの印章（エンブレム）に強い執着を示した。こうした図像のもつ力を信じる性向が逆に独創的な天主を生み出したともいえる。

天主の創出は、高さへの志向と山頂の征服を意味する。それまで山はそれ自体聖地であって、都市の周辺を取り囲むのみであった。しかし信長以降、城下町は「天」からの視線支配に貫かれ、初期の城下町プランに反映するが、短期間で消滅してしまう。平和な時代の到来とともに、城郭は実務的な政庁としての性格が強くなり、天守が一度焼けると再建しないなど、城下町のなかで副次的な存在へと後退してゆく。城下町のプランニングは細かくみれば数多くのヴァリエーションが存在するが、大局的にみて伊藤鄭爾のいうトポロジカル・プランニング、すなわち城郭を中心として武家地・町人地・寺社地が取り囲むという構成はきわめてよく似ており、都市設計という観点からみれば独自性は乏しく、京都をモデルにしたものが支配的といえる。城下町は類型として明瞭であり、全国を覆い尽くすが、都市としてのヴァリエーションはきわめて貧困なのである。

（3）複数アイデアの共存

城下町は泰平の時代になり、当初の垂直性を失い水平性の強い都市へと推移してゆく。城下町は都市としての発展とともに、武士、町人、宗教など異なる身分的要素が地域を分けながらも共存する地域の中心的都市へと性格をかえていく。そこではもはや単一の都市アイデアが全体を貫くことはなく、複数のアイデアが互いに関係しあいながらも、共存する都市として成熟を遂げるのである。こうした複数のアイデアの輻輳する都市の代表例として金沢があらためてわれわれの眼前に浮上する。

注1 小野晃嗣『近世城下町の研究 増補版』法政大学出版社、1993年収録の付「小野君の歩いてきた道を憶う」（森末義彰）、解説（松本四郎）参照。

注2 寺内町の町割りは戦国期のものは確認できない。前川要は織豊系城下町の形成のプロセスで寺内町の町割りも戦国期に割り直されたとしているが（『都市考古学の研究—中世から近世への展開』柏書房、1991年）、その根拠は薄い。むしろ近世の町割りが城下町と異なるモジュールであることに留意すべきである。

注3 吉田伸之「城下町の構造と展開」は現時点でのもっとも包括的かつ高水準の城下町論である。本稿は、都市アイデアにも言及した後者の論文に負うところ大である。吉田もまた小野の研究の先駆性と到達点に高い評価を与えている。

注4 『大内氏掟書』佐藤進一・百瀬今朝男・池内義資編『武家家法 I』（中世法制史料集 3）岩波書店、1965年所収。

注5 決勝論旨の発給のこと。永禄10年正親町天皇から信長宛に朝敵討伐のために上洛を要請するむねの論旨が発給された。

注6 天下布武印とは信長が禅僧宗恩沢彦に命じて作成した印で、岐阜城に入城後（1567年）使用開始。足利義昭供奉の上洛への協力を求める書状にも天下布武印が押される。

従来、天下布武印は信長の天下統一の意思表示と見なされていた。

〔参考文献〕

- 伊藤毅「『宿』の二類型」五味文彦・吉田伸之編『武士と商人・芸能民』山川出版社、1994年
伊藤毅『都市の空間史』吉川弘文館、2003年
伊藤毅「グリッドとアイデア」『UP』393号、2005年a
伊藤毅「中世都市の空間」『UP』395号、2005年b
伊藤毅「宗教都市と交易都市」『UP』397号、2005年c
伊藤毅編『バスティード』中央公論美術出版、2009年a
伊藤毅「グリッド論」五味文彦・杉森哲也編『日本の歴史と社会』放送大学印刷教材、2009年b
伊藤鄭爾「日本都市史」『建築学大系2都市論・住宅問題』彰国社、1960年
今谷明『戦国大名と天皇』福武書店、1992年
大西廣・太田昌子編著『安土城の中の「天下」——襖絵を読む』（朝日日本の歴史別冊）朝日新聞社、1995年
小野晃嗣『近世城下町の研究 増補版』法政大学出版局、1993年
小野均『近世城下町の研究』至文堂、1928年
桐敷真次郎「慶長・寛永期駿府における都市景観設計および江戸計画との関連」『東京都立大学都市研究報告』28、1972年
小島道裕『戦国期城下町』（青史出版、年）ほか。?→『戦国・織豊期の都市と地域』青史出版、2005年
小島道裕「戦国期城下町から織豊期城下町へ」『年報都市史研究1城下町の原景』山川出版社、1993年
小島道裕『信長とは何か』講談社、2006年
五味文彦『武士と文士の中世史』東京大学出版会、1992年
佐伯真一『戦場の精神史——武士道という幻影』日本放送出版協会、2004年
千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、2000年
高橋慎一郎『中世の都市と武士』吉川弘文館、1996年
立花京子『信長権力と朝廷』岩田書院、2000年
都市史研究会編『年報都市史研究 現代都市類型の創出』山川出版社、2008年
内藤昌『江戸と江戸城』鹿島出版会、1966年
内藤昌「安土城の研究（上）（下）」『国華』987・988、1976年
中丸和伯「後北条氏時代の町（相模の場合）—小田原を中心として」地方史研究協議会編『封建都市の諸問題<日本の町II>』雄山閣出版、1959年
西川幸治『日本都市史研究』日本放送出版協会、1972年
藤田達生『江戸時代の設計者——異能の武将・藤堂高虎』講談社、2006年

前川要『都市考古学の研究——中世から近世への展開』柏書房、1991年
松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究』吉川弘文館、1967年
宮上茂隆「安土城天主の復元とその史料に就いて（上）（下）」『国華』998・999、
1977年
宮本雅明『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、2005年
矢守一彦『都市プランの研究——変容系列と空間構成』大明堂、1970年
矢守一彦『城下町のかたち』筑摩書房、1988年
吉田伸之「序」・「城下町の構造と展開」佐藤信・吉田伸之編『都市社会史』（新体系日
本史6）山川出版社、2001年
ルイス・フロイス著・松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス 日本史2 織田信長篇2』
中央公論新社、2000年
『大内氏掟書』（佐藤進一・百瀬今朝男・池内義資編『武家家法 I（中世法制史料集 3）』
岩波書店、1965年。

2. 16～17世紀世界都市の概観

城下町を世界都市、とりわけ西欧都市と比較する場合、まずは建築単体ではなく都市（一部指定も含む）がユネスコ世界遺産に登録されているものを概観するのが便利である。しかも城下町が成立する時期の各都市の動向を意識しつつ、以下国別にみていくことにするがリストはわれわれが実際に訪れたことのある都市に限定した。

世界遺産されている（あるいは世界遺産指定されたものが存在する）都市に関しては、その登録物件名を都市名の隣の括弧（）内に記入した。「A」「B」「C」の3つの記号は以下のような分類を試みようとしたものである。なお、「未」はわれわれが未訪問の都市に付いている。

A…16～17 世紀に大いに繁栄発達した。

B…16～17 世紀に成長の基礎ができた。

C…16～17 世紀に衰退した。

可能な限り、国ごとの動向を捉えるよう努力した。これにもとづき、16～17 世紀に繁栄した都市が通有する性格を発見することは可能であると考ええる。

1. France フランス

宗教戦争や隣国との戦争、ペストなどの疾病によって不安定な時期が長く続いた。17 世紀末には動乱が一段落し、都市に新たな建築群が建てられたり、国境地域ではフロンティア防御のための城塞がヴォーヴァンの設計によって数多く建設された。

・ Paris パリ（○パリのセーヌ河岸）B

：ローマ時代からシテ島を中心に発した。16世紀末にアンリ4世が即位すると、それまでの混乱状態からフランスの首都としての地位を奪回した。現在でも残る多くのモニュメントが建造され、オスマンによる都市改造以前の都市施設が数多く建設された。

・ Versailles ヴェルサイユ（○ヴェルサイユ宮殿と庭園）A

：17世紀にヴェルサイユ宮殿が造営され、パリを公式の首都としながらも、1682年から1789年にかけて実質的な首都機能はヴェルサイユに置かれた。

・ Le Havre ル・アーヴル（○ル・アーヴル再建地区）B

：ノルマンディーの港町。古い港が泥の堆積によって使えなくなったため、1517年に建市された。第2次世界大戦で大きな被害をこうむり、オーギュスト・ペレによって再興され、その都市計画が評価され世界遺産となっている。

・ Lille リール（○ベルギーとフランスの鐘楼群）B

：フランドル地方のフランス第4の都市である。16世紀は黒死病と宗教的なテキスタイル産業、そしてプロテスタントの抗争に特徴づけられる。16-17世紀前後でイギリス、フランス、オランダと支配国が頻繁に変わった。17世紀末のフランス統治開始後の3年間にほとんどの公共建築が建造された。

・ Le Raincy ル・ランシーB

：パリ近郊の町ル・ランシーの歴史は17世紀に建設されたル・ランシー城とともにあった。ル・ブラン、ル・ノット

ル、ル・ヴォーが設計にあたったこの城では多くの王族が優雅な時を過ごしたが、城は現存しない。

・ Blois ブロワ（○シュリー・シュル・ロワールとシャロンヌ間のロワール渓谷）B

：ロワールの古城の一つ、ブロワ城があることで有名。16世紀の宗教戦争中は、政治的に重要な位置づけを持った町だった。

・ Poitiers ポワティエB

：ポワティエはフランス西部の古い町で、4世紀の洗礼堂や多くのロマネスク教会が残る。ルネッサンス期に大学をはじめとする多くの公共建造物が建設され、町の様子が大きく変わった。政治的にも町長を中心として新たな試みを行おうとした。

・ Strasbourg ストラスブール（○ストラスブール旧市街）B

：フランスとドイツの国境線上に位置する都市。自由都市として16世紀初頭には早くもプロテスタントを受け入れ、市内にはプロテスタントとカトリックの教会が並んで建設されるようになった。17世紀末にはフランスに支配され、以後ドイツとフランスの間でその支配権が争われる。

・ Colmar コルマルB

：ストラスブール近郊の都市。周囲のアルザス都市に遅れて16世紀末にプロテスタントを受け入れる。17世紀の間にスウェーデン・フランスに支配され、政治体制が大きく変化した。

・ Besançon ブザンソン (○ヴォーバンの城塞群) B

: フランス北西部フランシュ・コンテの都市。16 世紀初頭に自治都市としての権利を得たが、17 世紀中頃のスペインの支配などにより、自治都市の地位を失う。17 世紀後期フランス支配下でヴォーヴァンによって城塞の設計、建設がなされ、18 世紀初頭に城塞が完成した。

・ Dijon デイジョンB

: ブルゴーニュの中心都市。14 世紀末～15 世紀初頭に最も繁栄したが、16～17 世紀にはブルゴーニュ議会がボースから移され、また対抗改革もあり、多くの新たな教会や礼拝堂、修道院、邸宅が建設され、18 世紀の新たな繁栄の礎となった。

・ Marseille マルセイユB

: プロヴァンスの港町。16～17 世紀は多くの問題を抱え、フランスとオスマン・トルコの間盟の海上中心都市として、港にオスマントルコの艦隊が停泊するなどした。ペストの流行のため、オテル・デューが建設され、内戦のなかで城塞が建設された。18 世紀には港が繁栄を迎える。

・ Lourmarin ルールマランC

: プロヴァンスのリュベロン地方の町。フランスの最も美しい村々の一つ。16 世紀に住民のほとんどがワルド派のプロテスタントであったことから町が焼かれた。

・ Orange オランジュ (○オランジュのローマ遺跡) C

: ローマ遺跡で有名なプロヴァンスの町。16～17 世紀には、ウィリアム 1 世をはじめとするオラニエ=ナッサウ家のオランジュ公国であり、ネーデルラント連邦共和国の総督を多数輩出した。1713 年にはオランジュ公国はフランスに併合された。19 世紀にオランダ系ボアア人が南アフリカに建国したオレンジ自由国もこのオレンジ=オランジュ (オラニエ) にちなむ。

・ Domme ドンムA

: 百年戦争時に建設されたドルドーニュ地方のバステードである。16～17 世紀には宗教戦争に巻き込まれたり、農民一揆が起こるなどするが、17 世紀には繁栄を迎えた。

・ Toulouse トゥールーズA

: トゥールーズ王国として中世期に繁栄したが、百年戦争などを経て疲弊していた。しかし15 世紀末～16 世紀にかけて着色料アイの産業が盛んとなり、市は非常に繁栄した。ベルニエ邸やアッセザ邸といった特徴ある邸宅が建設されたのはこの時期である。17 世紀にカトリックの勝利が確定し、カトリックの修道院や教会が数多くトゥールーズへ移った。また、都市の2 つの象徴、ヌフ橋とミディ運河は17 世紀に完成した。

・ Villefranche-de-Conflent ヴィルフランシュ・ド・コンフラン (○ヴォーバンの城塞群) B

: ミディ・ピレネー地方のスペインとフランスの国境に位置する城塞都市である。12 世紀初頭にはコンフラン地方の首都となっていた。西仏戦争の末、17 世紀中頃にフランスの手

に渡ると、ヴォーヴァンの手によって城塞がデザインされ、施工が開始した。

・ Carcassonne カルカッソンヌ (○カルカッソンヌの歴史的城塞都市) C

:カルカッソンヌはミディ・ピレネー地方の城塞都市である。中世期まで繁栄したが、17世紀のピレネー条約の結果、国境線の位置が変わったためにその重要性を失い、城塞はうちすてられた。

・ Bordeaux ボルドー (○月の港、ボルドー) B-A

:古代から重要な港町として発達したが、支配と解放が繰り返された。17世紀半ばからフランス革命までが近世ボルドーの絶頂期であり、ワインや奴隷貿易だけでなく、中継貿易でも大いに栄えた。18世紀中頃には新古典主義の都市計画がなされ、それが現在でもよく残っている。

・ Seaux ソーA

:パリ近郊にある町で、ソーの城館と庭園が有名である。コルベールによって17世紀に購入された既存の城館をル・ノートルが改修・設計し再構成した。町の発展も城館の発達ともにあった。

・ ミディ運河 (○ミディ運河) A・未

:ピエール＝ポール・リケによって考案され、1666年から1681年にかけてフランス南部に建設された3000kmの運河。これによってボルドー、サンテミリオン、ラングドック地方のワインは飛躍的に生産量を伸ばした。

2. オランダ

17世紀は海洋貿易によってオランダは黄金時代を迎える。多くの貿易都市が発展し、港町が大いに栄えた。

・ Amsterdam アムステルダム (○アムステルダムの防塞線 ○アムステルダムのシングル運河内の17世紀の環状運河地区) A

:13世紀に漁港として築かれたオランダの首都。16世紀には海運貿易の港町として、その宗教的な寛容さもあり多くの移住者を迎えながら、ヨーロッパ屈指の都市へと発展した。17世紀には黄金時代を迎える。国際的な貿易ネットワークを備え、世界でも最も裕福な都市となった。2010年にシングル運河内の17世紀の環状運河地区が世界遺産に登録された。

・ Franeker フラネケルA

:1374年に都市圏を獲得したフリースラントの都市(フリースラント都市については、まとめて後述する)。1585年から1811年にはオランダで2番目に古い大学が置かれていた。

・ Harlingen ハーリンヘンA

:フリースラントの港町。16世紀に貿易の重要性が増すなか、町を拡大させていった。

・ Hindeloopen ヒンデローペンA

:13~14世紀に都市圏を獲得したフリースラントの港町。17~18世紀にかけて、海外貿易によって黄金時代を迎え、大いに繁栄した。

・ Willemstad ヴィレムスタッド (○オランダ領アンティルのヴィレムスタットにある歴史地区、中心市街、港) B・未

: 15 世紀末に発見された場所を17 世紀から植民地化してできた町。南アメリカ大陸の北に位置する。オランダ、スペイン、ポルトガルの影響を受けた建築・都市計画となっている。

・ Beemster ベームスター (○ベームスター干拓地) B・未

: 17 世紀に起源を持つオランダ初の干拓地。建物や農地のレイアウトは10分に計画されたものであり、整然とした文化的景観を作り出している。その歴史的意義と、17 世紀以来の景観がいまなおよく保たれていることから、ユネスコの世界遺産に登録された。

3. ベルギー

ベルギーはオランダの独立戦争が起きるまで貿易で繁栄していた。オランダ独立の後は、その地位をアムステルダムなどに奪われることになり、多くの都市が衰退した。

・ Bruxelles ブリュッセル (○ブリュッセルのグラン・プラス ○建築家ヴィクトル・オルタの主な都市邸宅群 ○ストックレー邸) B

: 17 世紀以前に立てられた建物のほとんどは木造建築であったが、1695 年のルイ14 世による砲撃で町の大部分が破壊される。しかし、驚異的な早さで現在に残る石造りの街並が生み出された。

・ Anvers アントワープ (○プランタン=モレトゥスの家屋・工房・博物館複合体) A-C

: スヘルデ川に面するベルギーの港町。中世に繁栄した港町ブルージュの衰退のなかで、その地位にとってかわって発展し、貿易都市として16 世紀には黄金時代を迎える。出版文化の一大拠点でもあった。建物の数も倍増したが、オランダ独立戦争のなかで衰退し、17 世紀にはその地位をアムステルダムに譲ることになった。

・ Mechelen メッヘレン (○ベルギーとフランスの鐘楼群) A-C

: 1506 年から25 年間、ネーデルラントの首都として繁栄したが、その後ブリュッセルに政治の中心が移されると衰退した。

・ Ghent ゲント (○フランドル地方のベギン会修道院群) A-C

: 中世時代にはブルージュと繁栄を競うように発展し、その人口はパリにも匹敵するほどであった。コーレンレイやグラスレイには16~17 世紀のギルドハウスも数多い。17 世紀のオランダ独立戦争をきっかけに衰退する。

4. ハンガリー

16, 17世紀はオスマントルコの占領期にあたり、特筆すべき都市はない。

5. チェコ

17 世紀後半にはオーストリアによる支配を受けることになり、チェコ文化の空白時代が訪

れる。

・ Prague プラハ (○プラハ歴史地区) A-C

: 中世期カレル4世の時代に黄金時代を迎えた。16世紀後半、ルドルフ2世の治世になると、芸術や科学を愛する王の下、プラハに芸術家、錬金術師、占星術師などが集められ、プラハはヨーロッパの文化の中心都市として栄華を極めた。しかし、1618年のピーラー・ホラ(白山)の戦いから三10年戦争を経て、1648年に王宮がウィーンへ移転すると、人口は激減し、チェコ語の使用禁止や、宗教弾圧や文化弾圧などを受け、チェコは独自の文化を失い、2世紀以上にわたって「暗黒の時代」といわれるチェコ民族文化の空白時代を迎えることとなる。

・ Cesky Krumlov チェスキー・クルムロフ (○チェスキー・クルムロフ歴史地区) A

: 14世紀以降、町では手工業と交易が盛んだった。16世紀にはルネサンス様式の建物が数多く建築され、町は色彩鮮やかな華麗なるルネサンス都市へと変貌を遂げた。17世紀には領主が変わるものの、バロック様式の建物が加えられるなどした。

・ Olomouc オロモウツ (オロモウツの聖三位一体柱) B・未

: 三10年戦争が終結した17世紀後半、スウェーデンによる占領状態が解かれて再建されたオロモウツには、聖三位一体柱をはじめとしたバロック建築の建造物群が作られた。聖三位一体柱は1716年、石工ヴァーツラフ・レンダーの指揮および出資によって建設が始められたもので、レンダーの没後も職人たちが引き継いで1754年に完成させた。

6. オーストリア

・ Wien ウィーン (○シェーンブルン宮殿と庭園 ○ゼメリング鉄道 ○ウィーン歴史地区)

A

: ハプスブルク家は婚姻政策の成功により16世紀前半にはカール5世のもとヨーロッパ最大のドイツ系の帝国を築くに至る。オスマン帝国による第一次ウィーン包囲(1529年)などの事件もあったが、ハプスブルク家のもとで帝都ウィーンでは華やかな貴族文化が栄えた。1683年にもオスマン帝国による第2次ウィーン包囲を受けたが撃退、17世紀末からは旧市街の王宮ホーフブルクに加え、離宮シェーンブルン宮殿が郊外(現在は市内)に造営された。これが18世紀末から現在に至る「音楽の都ウィーン」の礎となった。

・ Salzburg ザルツブルグ (○ザルツブルグ市街の歴史地区) B-A・未

: 17世紀初頭、ザルツブルグではサンティノ・ソラーリが多くの公共建築物を建設し、現在のザルツブルグ市の町並みを作り上げた。イタリア・バロックからオーストリア・バロックへの変化をもたらしたのは、17世紀の終りのフィッシャー・フォン・エルラッハの仕事であった。この頃都市はザルツァッハ右岸へ著しく広げられた。1623年にはベネディクト派の総合大学が開校し、三10年戦争に巻き込まれなかったことにより、17世紀のヨーロッパの都市としては例外的に人口が増大した。17世紀は都市内の建築物が木造から石造に変化しはじめる時代であった。

・Graz グラーツ (○グラーツ歴史地区) B・未

: 13 世紀に都市権を得たグラーツには、多くの文化施設がある。1586 年にグラーツ大学が創設された。

7. デンマーク

未検討

8. スウェーデン

この時期、まだほとんど都市は無かった。

・ Stockholm ストックホルム (○ドロットニングホルム宮殿 ○スコークスシュルコゴーデン) A

: 多くの島々からなるスウェーデンの首都。13 世紀ハンザ同盟のもとで成長した後、16 世紀にスウェーデン王国として独立した後に人口も増加し、17 世紀にはスウェーデンは列強の一つに数えられるようになった。当時、都市と言えるような街は、他には海港イエーテボリ位しか無かった。17 世紀末にかけて、スカンジナビアの諸都市と国内の諸都市を結ぶ交易を、ストックホルムが独占していった。

・ Engelsberg エンゲルスバーリ (○エンゲルスバーリ製鉄所) B・未

: 1681 年、Per Larsson Gyllenhöök (1645 年-1706 年) が建設した製鉄所であり、19 世紀まで、現役の製鉄所として活動していた。

・ Karlskrona カールスクルーナ (○カールスクローナの軍港) B・未

: 1680 年にスウェーデン王カール11 世によって計画的に都市が建設された。カールスクルーナの建築物は、17 世紀から18 世紀初頭に建設され、現存している。

・ Falun ファールン (○ファールンの大銅山地域) B・未

: 銅工業によって発展した町。14 世紀には、市街地が形成され、市場が開催されていた。1641 年、ファールンは、特権を獲得することに成功した。このころには、ファールンは、スウェーデンで最大規模の都市に成長を遂げていた。採掘が続けられた銅山とファールンの旧市街には、17 世紀後半から19 世紀にかけて作られた工場、管理事務所、採掘坑といった鉱山施設、17 世紀に建設された聖堂が残る。

9. フィンランド

・ Helsinki ヘルシンキ (○スオメンリンナの要塞) B

: 1550 年、スウェーデン国王のグスタフ1 世によって、バルト海貿易の中枢であったハンザ同盟都市でエストニアの首都タリンに対抗する目的で建設された港湾都市。18 世紀のスオメンリンナ要塞の建設をきっかけに大きく発展した。

・ Pori ポリB

: 16 世紀に建設された港湾都市。海沿いに市場を建設することが求められていたなかで、

建設された。当初は住民が集まらなかったが、徐々に発展をみた。

・ Turku トウルクB

: 1229年にローマ教皇がこの地に司教座をおいたことから町が築かれたといわれる。1640年にスウェーデンのクリスティーナ女王によって、オーボ王立アカデミー（ヘルシンキ大学の前身）が建設された。以来1812年にヘルシンキが首都となるまでフィンランドの中心都市として栄えた。

10. ノルウェー

・ Urnes ウルネス（○ウルネスの木造教会）B・未

: 17世紀、身廊が建設されたことにより、教会は南に拡張された。1640年には洗礼盤、1655年には天蓋が1693年から1695年にかけて講壇が増築された。ウルネスの木造教会に窓がつけられるようになったのは18世紀になってからである。

・ Røros レーロース（○レーロースの鉱山街とその周辺）C・未

: ノルウェーでは、レーロース（銅）とコングスベルグ（銀）が重要な鉱山都市として17世紀から発達してきた。スコーネ戦争が勃発した1678年から1679年の間には、スウェーデン軍の攻撃を受け、一旦、廃墟となったことがある。17世紀から残る木造建築が評価され、1980年にUNESCOの世界遺産に登録された。

11. スイス

・ Chur クール（○レーティシュ鉄道アルブラ線・ベルニナ線と周辺の景観）A

: クールはクール司教の所在地であり、またグラウビュンデン州の州都で、州内で人口が最も多い自治体でもある。1400年頃から1797年までの、グラウビュンデンにおける三同盟共和国（Drei Bünde）の時代には、クールはゴッテスハウスブント（「神の家の同盟」）の中心都市で、また同盟間の会合が定期的に行われる場所の1つでもあった。

・ Zurich チューリッヒA

: スイス北部にあるスイス最大の都市で、金融・経済・商業・文化の中心地。16世紀には、人文主義者のフルドリッヒ・ツヴィングリによる宗教改革が行われ、西南ドイツ・スイスのプロテスタント勢力の中心地になる。17世紀に、宗教弾圧を受けたフランスのユグノー達を亡命者として受け入れ、手工芸が発達し、織物業の一大生産地になった。

・ Luzern ルツェルンB

: 16～17世紀のルツェルンは、他のスイス都市がプロテスタント化していくなかで、カトリック都市を維持し続けた。18世紀初頭にプロテスタント化するまでは戦争も少なく、16～17世紀には人口が急激に増加した。

12. イギリス

16～17世紀イギリスは宗教と政治の混乱状態にあった。18世紀には産業革命のなかで工

業が発展し、多くの都市が繁栄した。（産業革命以後の繁栄にフォーカスがあたるといっても、それ以前の記述があまり詳しくないようにも思われる。）

・ London ロンドン（○ウェストミンスター宮殿-ウェストミンスター寺院-聖マーガレット教会 ○ロンドン塔）B

：16～17世紀のロンドンは産業革命を控えた急成長期にあたる。16世紀に宗教改革が進展する中で修道院解散に伴いシティ内外で没収地の開発が進んだ。これにより、多くの人口を許容できるようになったロンドンには、当時の経済発展とあわせ急激に成長し始めた。1566年、エリザベス1世が王立取引所を開くとシティの重要性は急速に増大した。翌年1666年にはロンドン大火が起こった。再建されたシティは、木造から石造を中心としたものとなり、民間投資によって標準化された住居建築群が建造され、かつてレンの構想した都市程ではないが道路も拡張された。18世紀にはセント・ジェームズ・パークからリージェンツ・パークに至る大通りが敷かれ、街路沿いにピクチャレスクな建物が整然と並ぶ景観が形成された。

・ Edinburgh エディンバラ（○エディンバラの旧市街・新市街）C

：スコットランドの東岸、フォース湾に面するこの都市は、グラスゴーにつぐスコットランド第2の都市で、政治の中心。1603年にジェームズ6世がジェームズ1世としてイングランド王に即位すると、エディンバラの商業的・政治的重要性は低下した。1707年のイングランドとの合併によりスコットランド議会在解散するが、その後も古くからの堅固な城砦の街並みは保存され、スコットランド人の自主独立と反骨精神の歴史・伝統を今に伝えている。

・ Greenwich グリニッジ（○河口都市グリニッジ）B・未

：ロンドン近郊の港町。16世紀までは王宮が置かれていたが、イングランド内戦中に国立海軍大学となった。17世紀にはイギリスの人気の保養地として知られるようになった。

13. ポルトガル

アジアとの貿易およびブラジルの植民地支配により首都リスボンを中心に都市の発展がみられた。また、エヴォラやブラガなど内陸の地方中小都市も農業、手工業の発達により都市域が整備・拡大された。尚、ポルトガル第二の都市ポルトの発展はイギリスとの商業的結びつきを強めた18、19世紀にあたる。

・ アングラドエロイズモ（Angra do Heroísmo）アソーレス諸島

16c 欧州より新大陸およびアフリカ・インドへ向かう航路の中継地点として重要性を得た。卓越風を避ける地形上のメリットをいかした都市形成がみられた。

・ リスボン（Lisbon）

15c 末のヴァスコダガマのインド航海により得られた香辛料の利益により、航海の成功を記念してジェロニモス修道院・ベレンの塔が建設される。16c より国内の人口が集中、また外国商人も訪れる国際商業都市として発展した。17cはインドとの交易が衰えるが、ブラ

ジル産の砂糖を輸出し富を蓄えた。1755 年大震災と大津波に見舞われたがポンバル侯爵指導のもと都市が再興された。

- ・エヴォラ (Évora)

古代ローマ遺跡も残るアレンテージョ地方の州都。15c にポルトガル国王が居城し、黄金期を迎える。王宮や修道院の建設に加え、16c には都市の拡大に伴い水道橋が建設される。また、ポルトガルにおける対抗宗教改革の拠点となり、イエズス会により大学が創設された。

- ・ポルト (O Porto)

15c エンリケ航海王子はポルトより出航し、セウタを陥落させ、大航海時代の幕開けとなった。ポルトは15c~17c において造船業により大航海時代を支えた。17c 末よりイギリスのワインの需要が高まり、ドウロ産ワインの輸出港として急速に発展した。18c 19c はポルトの黄金期となった。

- ・ギマランイス (Guimarães)

北部ミーニョ地方に位置する。1139 年ポルトガル王国が誕生した地。もともとブラガからサンチアゴに至る巡礼地に位置する。15c16c はボルゴ (城壁外) において手工業が盛んになり、都市が中世の城壁を破り拡大した。17c 以降バロックやロココ様式の建築が建てられた。

- ・アルト・ドウロ (Alto Douro) ポルトワインの生産

ポルトガル北部を流れるドウロ川沿いは12c より修道院によるワイン生産が始まり、16c 以降輸出用の高品質なワインが生産されるようになり、ドウロ川の河岸は大部分がブドウの段々畑が造成され、川の水運を利用しポルトより輸出された。以降、現在にいたるまで主要な輸出産業となった。

非世界遺産

- ・ブラガ (Braga)

聖ヤコブ伝導の地としてイベリア半島のキリスト教化の拠点となる。町の中心に大聖堂が位置し大通りが交差する宗教都市。16c に大司教ディエゴデソウザにより都市改造が行われ、広場が新設され街路が整備された。

- ・アヴェイロ (Aveiro)

ポルトガルで唯一運河の発達し、製塩業や漁業のちにタイルや金属の生産で栄えた。16c 中頃暴風雨により河口が埋まり衰退した。

- ・ヴィアナドカステロ (Viana de Castelo)

13c ポルトガル王により建設された北部ポルトガルのミーニョ地方の都市。リマ川の河口に位置する。16c において北部ポルトガルの重要な港町で海外のポルトガル領に向けて多くの船が出航し、それに伴い都市が発展した。

14. スペイン

- ・ セビリャ (Sevilla)

グアダルキビル川に沿った川港都市としてイスラム王朝時代に大いに発展する。13c にカスティーリャ王国に占領され、15c 末よりスペイン王国の新大陸との貿易の独占港となり、インディアス通商院が設置された。17c 末よりその地位をカディスに奪われ、徐々に衰退していく。

- ・ サンクリストバルデララグーナ(San Cristobal de la Laguna) カナリヤ諸島
- ・ トレド (Toledo)

12c ルネサンスの舞台となったトレドは16c スペイン宮廷がマドリッドに移ったことによりゆるやかに衰退。

- ・ エルエスコリアル(El Escorial)

16c 後期、スペイン王フェリペ二世の命により建設された王宮兼修道院。中央集権および対抗宗教改革のモニュメントとしての性格をもつ巨大な宮殿建築。フェリペ二世は生涯この王宮で政務を行った。

- ・ サラマンカ (Salamanca)

13c スペイン初の大学が創設された。16c~18c において大学に加えて次々と専科大学(colegio)が作られた。16c サラマンカに学んだ者としてセルバンテス、イグナチウス・ロヨラがいる。

非世界遺産

- ・ カディス (Cadiz)

紀元前より港湾都市としての歴史をもつ。16c よりスペインの海軍の基地となり、敵国の攻撃の標的とされ、16c を通してイギリスから何度も襲撃を受けた。17c 末グラダルキビル川が砂で埋まったことによりセビリアから新大陸との貿易港としての地位を獲得し、18c に大いに繁栄する。

- ・ マドリッド (Madrid)

16c まで小都市に過ぎなかったが、16c 後半にフェリペ二世が宮廷を移し、王国の首都として市の骨格がつくられた。

- ・ バレンシア (Valencia)

13c アラゴン王に征服される。15, 16c は西地中海において重要性を高めた。

15. イタリア

- ・ ピエモンテ州とロンバルディア州のサクリモンティ (Sacri Monti of Piedmont and Lombardy)

<サクロモンテ>とは<聖なる山>を意味する。15c と16c はオスマン帝国が強大でキリスト教の聖地エルサレムへの巡礼が難しくなった。そのため、巡礼を擬似的に体験する新エルサレムがヨーロッパ各地に作られた。北部イタリアではそれを<サクロモンテ>といい、対抗宗教改革と結びついて多数造営された。

・パドヴァの植物園(Orto Botanico, Padua)

パドヴァ大学附属植物園。パドヴァ大学は1222年創立された。植物学者のフェデリコ・ボナフェーデの構想を建築家のダニエレ・バルバロ（ウィトルウィウスの『建築書』の翻訳者）が設計した。1545年開園。ジュスティーナ修道院の一部を利用し、大学附属施設としては最古の植物園といわれる。

・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』とサンタマリアデッレグラツィエ修道院

15c末、ミラノ公ルドヴィーコ・スフォルツァの依頼により描かれたテンペラ画。一点透視図法を用いている。サンタマリアデッレグラツィエ修道院はブラマンテにより同じく15c末に改修されたもの。

・ヴェローナ(Verona)

ヴェローナの歴史は古く、第二次ポエニ戦争の時にはローマ同盟市として戦った記録がある。ローマ都市化し、アリーナなどのローマ遺跡が残る。中世初期は蛮族の支配を受け、荒廃するが、12cにはコムーネとなり寡頭制を取る。内政上の混乱期を経て15cよりヴェネツィアの支配下に入り、以降は商業と文化の中心として発展した。軍事建築家ミケーレ・サンミケーリ(1484-1559)を輩出し、16cに新たな市壁と市門が造営された。

・ヴィツェンツァ(Vicenza)

ヴィツェンツァはローマ都市が起源であり、ヴェネトの一地方都市としての道を歩んだ。16c公共建築のコンペティションにおいて、パドヴァ生まれの建築家アンドレアパッラーディオ(1508-1580)の案が当選し、以降パッラーディオの建築作品が建ち並ぶこととなる。彼はルネサンス型万能人ではなく、職業建築家として建築の研究・設計のみに携わり、ヴェネト地方に数多くの邸宅(Villa)を設計した。

・フェッラーラ(Ferrara)

フェッラーラはポー川に沿った線上の中世都市を起源とするといわれる。14c以降エステ家の下、市域を計画的に拡大し、15c末(1492年)の第3次拡張計画(エルコレ一世による)はルネサンス都市(透視図法による演出の図が有名)として拡張され、街路ネットワークと市壁は宮殿・教会・庭園と結びつけられた。16c後半以降エステ家はモデナに移され、フェッラーラは教皇領となる。度重なる洪水の被害を受け、経済的にも衰退した。15c16cにおける宮廷人文主義文化の中心であった。

・ジェノヴァ(Genova)

世界遺産に指定されているのは16cに貴族の館が建ち並んだスタラーダ・ヌオヴァ(新市街)の邸宅群である。当時のジェノヴァにはロッシ(rolli)と呼ばれる迎賓館目録があり、ルネサンスあるいはバロック様式の館に外交上の要人を招いた。これは12cより形成された中世的な旧市街から少し離れた高台に作られた貴族の邸宅群であり、スペイン王国経由の金の輸入によりジェノヴァ貴族が金融業により富を蓄えたことが背景にある。

・フィレンツェ(Firenze)

トスカナ州に位置しアルノ川に接する。12cより自治都市となり、毛織物業と金融業で

富みを蓄え14c には人口が12万人に達した。サンタマリア大聖堂をはじめ、メディチ家の庇護のもと14c 末~16c 前期にルネサンス文化が華開いた。数々のモニュメントはルネサンスの傑作だが、街自体は中世の構造を大きく逸脱するものとはならなかった。

・ナポリ (Napoli)

ギリシャ植民都市に起源を持つ。12c よりシチリア=ノルマン王朝に征服され、以後スペインとフランスの王家によりナポリの争奪戦が繰り返される。16c17c は統一を終えたスペイン王国により属州として統治された。

・ローマ (Roma)

1420年教皇がローマにもどり、15c 中頃よりローマ帝国都市の復興が始まった。16c 初頭よりユリウス二世は芸術家たちをローマに集め、バチカン宮殿の造営が開始された。16c 後半にシクトゥス5世によってローマ拡張計画が計画され、バロック的都市計画の原型がつくられた。17c にはベルニーニ、ボッロミーニといったバロックの巨匠により多くの都市モニュメントが付加された。

・ヴェネツィア (Venezia)

13c 以降東ローマ帝国から東地中海の覇権を奪い14c, 15c に強大な海軍力を背景に地中海貿易を支配した。16c オスマン帝国の台頭により次第に東地中海の覇権を奪われる。15c 以降は内陸に勢力を伸ばし、ヴェネト地方を支配下に治める。16c, 17c はリアルト橋の建設、バロック様式の教会等モニュメント建設期にあたる。

・ウルビノ (Urbino)

イタリア中部マルケ州に位置する丘上都市。15c モンテフェルトロ公のもと学芸が奨励される。ドゥカーレ宮殿にあるピエロデッラフランチェスカ作のルネサンス都市の透視画が有名。

・マントヴァ (Mantova)

ロンバルディア州東に位置し、ミンチョ川沿いの地に干拓によって築かれた。15c ゴンザーカ家により学芸が奨励され、16c のジュリオロマーノにより設計されたパラッツォデルテが有名。17c ゴンザーカ家が断絶しマントヴァ継承戦争が起こる。ペストの流行も重なり、まちは衰退した。

16. スロベニア (Slovenia)

該当無し

17. クロアチア (Croatia)

・ Poreč (ポレッチ) 歴史地区のエウフラシウス聖堂の司教座建造物群

聖堂 6c ビザンチン 13c~19c に増築都市:ローマ植民都市を基礎としヴェネツィア支配下の13c~17c に徐々に発展。

・ Trogir (トロギール)

都市 ギリシャ植民都市起源（ヒポダミアン・グリッド説）、14世紀以降ヴェネツィア支配下におかれ、カテドラルや市壁の建造等の主要な都市建造物は13~15cのもの、16c以降ルネサンス・バロックの貴族の館が作られる。

- ・ Split（スプリット）

4cに完成したディオクレティアヌス宮殿を原型とするローマ人都市が起源。7cのスラブ人らの侵攻後、廃墟となった宮殿内を教会や住居に転用して、他に類を見ない都市景観を生み出した。15c以降ヴェネツィアの支配下に置かれる。

- ・ Dubrovnik（ドゥブロブニク）

ローマ時代から交易港として栄え、9cに独立13, 14cに一時ヴェネツィアに従属するも実質的には独立を維持する。16cにはアメリカ大陸、インドとも交易。15~17cはイタリアルネサンスの影響で独自の文芸が興隆し、都市建設においても市壁の要塞化、ルネサンス様式の教会建設等、現在の都市景観を形づくる重要な時代であった。東地中海の覇権がヴェネツィアからオスマントルコに移る中で、独立を維持し繁栄を誇った。

*ブリタニカ百科事典参照

18. ボスニア・ヘルツェゴヴィナ (Bosnia and Herzegovina)

- ・ Mostar（モスタル）

中世以前の歴史は明らかではない。15cにはネレトバ川兩岸に木橋が架かっていたが、16c中頃(1520~1566)に橋の石造化と街の要塞化がオスマントルコ支配下で行われる。ボスニア地方からアドリア海へ抜ける商業ルートとして重要であり、オスマントルコの下でモスク、マドラサ、ハマーム、商館などが立ち並び17c~18cに繁栄する。現存の橋はユーゴ内戦の最中クロアチア系民兵により破壊されたものを2004年に復興したもの。

- ・ Višegrad（ヴィシェグラード）のメフメド・パシャ・ソコロヴィッチ橋

16c末に大宰相メフメド・パシャ・ソコロヴィッチの命により建設されたドリナ川を横断する全長180mの大規模な石造の橋。オスマン帝国絶頂時の宮廷建築家ミィマール・シナーンが設計・建設に携わっている。尚、この橋はダニューブ平野とアドリア海を結ぶ商業ルート（主にサラエヴォ~ドゥブロブニク）上に位置し、オスマン帝国にとって重要な商業拠点であった。

非世界遺産

- ・ サラエヴォ (Sarajevo)

15c中頃オスマン帝国はハンガリーより現在のボスニア地方を奪い、サラエヴォの前身となるブルフボスナを州都と定めた。初代州知事イサク・ベグは宮殿やモスクを建造し、町の名をボスナ・サライ（宮殿）と名付け、以後サライの形容詞形サラエヴォが町の呼称となる。16cを通して、サラエヴォは内陸の国際商業都市として発展する。州知事となったガジ・フスレフ・ベグはモスクやマーケット、図書館を建て、都市の基盤を作ったとされる。また、彼はムスリム以外の宗教に寛容であったため、16c後半にはカトリック教会、

東方正教会、シナゴグの建設も許された。16c~17c を通してオスマン帝国の覇権の下で発展した重要な都市である。

*都市史図集より

19. モンテネグロ (Montenegro)

・ コトル (Kotor)

コトル湾に臨む港町。背後にロブツェン山(1749m)が控える。ローマ時代より天然の要塞として交易で栄えた。ビザンチン帝国下では自治都市、その後は基本的に自由都市として栄えるが、15c よりヴェネツィアに所属する。9c のビザンチン教会、11c~13c のロマネスク教会等の中世の建築遺産が多く残る。コトル湾の美しい自然景観と合わせて世界遺産に認定された。

*ブリタニカ百科事典参照

20. アルバニア (Albania)

・ ベラト (Berat) とジロカストラ (Gjirokastra) の歴史地区

ベラトはOsum 川沿いに発達した町でその歴史は紀元前に遡る。初めにKala と呼ばれる丘上に城塞が築かれ、徐々に川沿いの傾斜地に町が拡大していったと考えられる。13c~14c に東方正教会が作られ、15c 前半にオスマン帝国の支配下に入る。住民の多くはムスリム化し、住居やモスクなど大半の建築はオスマン帝国の様式である。一方、他宗教に寛容な性格により正教会は存続し、重要な聖堂は改修もなされた(18c)。

ジロカストラは13c に遡る要塞が起源であり、都市の大部分は17c のオスマン帝国支配下で拡大した。石造の垂直性の高い住居が建ち並び、細い路地と相まって文化的景観を形成している。

21. ギリシャ (Greece)

・ パトモス島 (the Island of Patmos)

エーゲ海南東部に浮かぶドデカニソス諸島の島。聖ヨハネが流刑された島とされる。1088年に神学者聖ヨハネを記念した修道院がビザンチン皇帝により建造される。13c~16c にはヴェネツィアが領有し、修道院の周囲に居住核が作られる。特に15c のコンスタンチノープルの陥落後、100 世帯に及ぶ人口が流入したとされる。修道院は自治を確立し、修道院を核とする要塞状の住居集合が形成された。16c 中頃よりオスマン帝国領となり、17c には関税特権により島は繁栄を極めた。

・ ロドス島 (Rhodes)

エーゲ海、ドデカニソス諸島における最大の島。古代ギリシャ・ヘレニズム時代を通じて文化の中心地であったが、ローマ時代に衰退。後に14c 初頭、ヨハネ騎士修道会が占領し、島全体を要塞化する。1523 年まで二世紀に渡りヨーロッパ側のオスマン帝国に対抗する最

前線であった。壮絶な籠城戦の結果に降伏し、オスマン帝国領下に入り、オスマントルコ様式のモスクなどが付加され、現在に至る。

- ・ コルフ島 (Corfu)

紀元前よりコリント人らによる植民都市が築かれる。古代ローマ時代は自治都市としての地位を築くが6c以降、ゴート人、ムスリム、ノルマン人などの侵入を許し、15c以降ヴェネツィア共和国の消滅(18c)までヴェネツィア領として繁栄する。16cは度々オスマントルコに包囲され、その都度、都市の要塞化は促進された。要塞は18c初頭に軍事建築家Filippo Vernadaの案を下に完成する。

22. セルビア (Serbia)

該当無し

* 非世界遺産 *

- ・ ベオグラード (Beograd)

穀倉地帯のパンノニア平原の中にあり、ドナウ川とサヴァ川が交わる地点に位置する。古代より戦略上の要衝として幾度も戦場となり、その数は百を優に超える。15cベオグラードはオスマン帝国の中欧進出を食い止める防衛線であり、二度の包囲戦で勝利した。オスマン帝国はスレイマン一世の代になってようやくベオグラードを陥落(1521年)させ、街は破壊され、キリスト教徒はイスタンブルへ移送された。以後オスマン帝国の交易都市として、18cまで商業的繁栄を誇り、人口はイスタンブルに継ぐ大都市に成長した。人口は10万以上に達したとされる。度々ハプスブルグ帝国に占領されるが、その都度オスマン帝国が再制圧した。ハプスブルグ軍退却時にセルビア人が同行し、セルビア人のハプスブルグ領内への人口流出が起きた。

23. ルーマニア (Romania)

- ・ シギショアラ (Sighioșara)

13cハンガリー王はドイツ系の住民のトランシルヴァニア地方への入植を奨励した(トランシルヴァニア・ザクセン人)。彼らは異民族に囲まれながら長らく自民族の言語と文化を維持したことで知られる。トルコの脅威に備え15cから16cにかけて市壁を拡大し強化。17c~19cはペストの流行・度重なる火事により人口が減少した。1840年には13cから続く商人ギルドを解体し、商人は町を去ってしまった。

- ・ トランシルヴァニアの要塞聖堂集落 (Villages with Fortified Churches in Transylvania)

シギショアラと同じくザクセン人の入植による。Biertanに代表される要塞化された聖堂集落はもともと外敵(タタール人・オスマン帝国)に侵入を許しやすいトランシルヴァニア地方独特のものであるが、都市造形はドイツ的とされる。また、扉の細工等、随所にザクセン人の工作技術の高さが見られる。Biertanの聖堂建設は15cに開始され16cに完了したとされる。集落の外壁は16c~17c初頭に完成し、南に迫るオスマントルコの脅威に備え

るものだった。

非世界遺産

- ・ シビウ(Sibiu), ブラショフ(Braşov)

同じくザクセン人のトランシルヴァニアにおける植民都市である。14c 以降陸の商業ルート上に位置し、発展を続ける。16c, 17c はオスマン帝国とヨーロッパ世界の境目に位置し、繁栄した。しかし、ドイツ植民都市ではルーマニアの正教会は認められず、またルーマニア人は商いが禁止される等ドイツ系住民から差別された存在であった。

24. マケドニア (Macedonia)

該当無し

25. ブルガリア (Bulgaria)

該当無し (リラの僧院 (19c) を除いて古代や中世の遺産が大半を占める)

15c 後半よりオスマン帝国の侵略に屈し、ソフィア、ヴェリコ・タルノヴォ、プロブディフなどの主要都市は教会や修道院の多くが焼かれ、荒廃した。しかし、ソフィアではオスマン帝国の支配下で16c に人口7 千であったものが、17c中期には5万5千に膨れ上がったというデータもあり、商業や農業分野で飛躍があったとみてよいだろう。

26. トルコ (Turkey)

- ・ イスタンブル (İstanbul)

ビザンチン帝国の首都で1453 年までコンスタンチノーブルと呼ばれた。メフメト二世により征服されて以後、オスマン帝国の首都となる。アナトリアの富裕ムスリムを強制移住させる一方、キリスト教徒も権利を制限しつつもそのまま住まわせた。東方正教会、アルメニア使徒教会、シナゴグも多くは存続し、多文化を許容する東西の交易都市としてビザンチン帝国時代末期を上回る繁栄を誇った。トプカプ宮殿や大モスクなど巨大な建築的モニュメント、またグランバザールなど世俗建築も多数建設され、現在のイスタンブルの姿を形づくったといえる。

- ・ サフランボル (Safranbolu)

香料サフランにその名の起源を持つ小都。13c より隊商宿の拠点となる。17c に隊商貿易のピークを向かえ、隊商宿が拡大し、住民より商人を多く収容するようになる。当時60室を有する宿も存在した。

- ・ イズミル (Izmir)

エーゲ海に面した港湾都市。古くはスミルナと呼ばれた。15c 初頭オスマン帝国の占領下におかれる。17c~19c には国際商業都市として繁栄した。アルメニア人はイラン製の絹をヨーロッパに売り利益をあげた。

27. ドイツ (Germany)

・ リューベック

12c 建設され13c~16c 前半にハンザ同盟の中心都市としてバルト海と北海の貿易を支配し、繁栄する。16c 半ばよりハンザ同盟の衰退と運命を共にする。

・ ブレーメン

ドイツ北部ヴェーザー川の両岸に位置する。14c にハンザ同盟に加盟し、帝国自由都市として小都市から徐々に貿易都市として成長する。16c より、港の防衛機能の強化を兼ねて、ヴェーザー川左岸に新市街を建設。17c には砂の堆積が原因でより下流に人工港を建設（オランダ技師による）。18c 以降は大西洋貿易の主要港として発展を続ける。

・ レーゲンスブルク

ドナウ川沿いバイエルン州の古都。9c より地方の経済と信仰の中心として発展し、11c~13c にかけて大聖堂、市庁舎、橋の建設が進んだ。13c には帝国自由都市となる。16c においてプロテスタントを公式に認め、17c の三10年戦争では戦災に遭う。

非世界遺産

・ ハンブルク

13c ハンザ同盟に参加し、繁栄する。16c には宗教改革を受け入れる。17c の三10年戦争などで大きな打撃をうけるが、18c 以降イギリスとの関係を深め、大西洋貿易に参画する。

・ ニュルンベルク

交通の要衝として11c 頃より成立したとされる。13c 帝国自由都市となる。アウクスブルクと並び、北イタリアとヨーロッパを結ぶ主要な交易都市であった。16c には「皇帝の都」としてプラハ・ケルンと並ぶ大都市として最盛期を迎え、デューラ - などの芸術家も活躍した。市はプロテスタントを受容し17c の三10年戦争の影響で経済が衰えた。

・ ミュンヘン

ヴェネディクト会修道院が市の起源とされる。12c バイエルン大公により市場、関税、貨幣製造所が作られバイエルンの経済的中心となる。16c 以降ドイツの対抗宗教改革の中心となる。17c は三10年戦争やスウェーデンによる占領、ペストの流行で人口が激減した。

28. ポーランド (Poland)

・ クラクフ

ボヘミア地方の交易都市として発展。ポーランド王国の首都となり14c には大学が創設される（コペルニクスが通ったと伝えられる）。15c, 16c はポーランドの黄金期でルネサンス建築が誕生した。ヴァヴァル城はフィレンツェ派の宮殿で16c のものである。17c にはポーランドの中心がワルシャワに移り、戦乱やペストにより都市の発展は停滞する。

・ ザモシチ

1580 年ポーランド王国宰相のヤン・ザモイスキにより建設された新都市。イタリア人建築

家ベルナンド・モランドにより理想都市として形態的に統一されたルネサンス都市となった。

・ワルシャワ

13c では小さな漁村に過ぎなかったが、17c 初頭スウェーデン・リトアニア・ポーランドを統べたジグムンド三世によりクラクフよりワルシャワに遷都する。王国の首都として17c~18c はルネサンス様式の王宮や教会が次々と建設された。

3. 16～17世紀世界都市各論

3. 1 ボルドー (フランス)

・英仏百年戦争

ボルドー (Bordeaux) が位置する南西フランス一帯はアキテーヌ (Aquitaine) と呼ばれる地域で、世界的なワインの産地として知られる。ボルドーはアキテーヌ州の州都であり、フランス全体では7番目に大きな都市である。

アキテーヌはフランスとイングランドが激しい攻防を繰り返した英仏百年戦争の原因のひとつであった。両国の100年に及ぶ戦いのきっかけはアキテーヌ地方を含む南西フランスの争奪にあったのである。

話は12世紀に遡る。アリエノール・ダキテーヌ (Aliénor d'Aquitaine) という美貌と教養を兼ね備えた一人の女性がいた。彼女は15歳の時、フランス国王ルイ7世 (Louis VII le Jeune) のもとに嫁ぎ王妃となったが、結婚生活15年目にして近親婚を理由にみずから離婚を申し出る。そして離婚成立のわずか6週間後に11歳年下のアンジュ (Anjou) 伯にしてノルマンディー (Normandie) 公アンリ (Henri) と再婚を果たす。ちなみにアリエノールとアンリはルイ7世よりさらに近い血縁関係にあった。

この男女の愛憎劇が思わぬ方向に発展した。すなわち、アリエノールはアキテーヌ公領はもとより、ガスコーニュ (Gascogne) 公領、ポワティエ (Poitiers) 伯領を含む南西フランス一帯の広大な土地の女相続人であったし、アンリはのちにイングランド王ヘンリー2世 (Henry II) になりイングランド、アンジュ、ノルマンディーを領有することになる。結果として、2人には英仏両国にまたがる未曾有の大領地がころがりこんできたのである。とりわけアキテーヌは肥沃な農村地帯であり、当時からブドウおよびワインの一大生産地であったことから、フランスがこの離婚・再婚劇で被ったダメージがいかに甚大であったかは想像に難くない。

百年戦争はその後この南西フランスの土地の領有権をめぐる攻防を縦糸として、そこに

両国の王位継承問題やワイン貿易、フランドル羊毛問題などのさまざまな横糸が絡み複雑化し、戦いは泥沼化する。シェークスピアの戯曲『リチャード2世』は戦費で疲弊したイングランド内部の熾烈な政争を活写したものであるが、主人公のイングランド王リチャード2世 (Richard II) はなんとボルドー生まれなのである。アキテーヌ地方は地理的にはフランス領内にありながら、イングランドとフランスの入会地のような様相を呈していた。ボルドーはいまでもコスモポリタンの雰囲気横溢する町だが、その源をたどると英仏百年戦争に行き着く。

・ジロンド派を生んだ町

ボルドーはフランスのなかでもパリを中心とする伝統的で因習的な地域から地理的に隔絶していたこともあって、コスモポリタンにして自由で闊達な思想を育てる培養基になった。そのことは、3人のMと呼ばれるモンテスキュー (Montesquieu、18世紀の法哲学者、「三権分立論」を唱えた)、モンテーニュ (Montaigne、16世紀の哲学者、主著に『エッセー (随想録)』)、モーリアック (Mauriac、20世紀フランスを代表する文学者、ノーベル文学賞受賞) がいずれもボルドー出身であることを指摘すれば10分であろう。

もうひとつ、フランス革命の時に旧体制に反逆し王政廃止に大きな役割を果たしたジロンド派 (Girondins) の本拠がボルドーにあったことも見逃せない。フランス革命の最終段階では急進的な革命路線を譲らない山岳派と穏健な共和制を目指すジロンド派が対立し、ジロンド派は衰退するが、ジロンド派のもつ思想はその後のフランス共和制確立のための基盤となったと考えられる。ジロンド派の構成員のほとんどが、ボルドーの裕福なブルジョワジーであった。ボルドー中央のカンコンス広場 (Place des Quinconces) 広場にはジロンド派の歴史的役割を顕彰した記念碑が立っている。

この広場は1810~22年に整備されたもので、12万6000平方メートルの面積をもつ。これはヨーロッパの都市広場としては最大規模である。ジロンド派記念碑はフランス革命100周年を記念して建設された。極左にも極右にも走らない穏健で合理主義的な思想の形成はアキテーヌ地方の豊かな経済を背景としつつ、英仏百年戦争のイングランド支配下、かなりの程度、自由・自治が認められていたという事実と関係があろう。

・フランスでもっとも美しい町

フランスの文豪スタンダール (Stendhal) は、晩年南フランス各地を旅行し、その見聞を記した旅行記を残している (『ある旅行者の手記』Mémoires d'un tourist、1838年)。スタンダールの旅はパリからボルドー、トゥールーズ (Toulouse) を経て、スペインとの国境地帯にまで及んだ。この旅行記は19世紀フランスの政治・文化・社会を文豪の透徹した観察眼が捉えた貴重な記録のみならず、良質の都市ガイドとしても読める。そのなかでボルドーの町は文豪にとって特別のものと映ったらしく、「フランスでもっとも美しい町」という最大級の賛辞を書きとどめている。冷静で客観的な叙述スタイルを変えなかったスタンダールにしては、きわめて稀有な表現といってよい。スタンダールが訪ねたボルドーはカンコンス広場など19世紀初頭の都市整備を終えたばかりであった。

ボルドーを代表する宗教的モニュメントは、サン・タンドロ大聖堂 (cathédrale St.-André) とサン・ミッシェル教会 (Basilique Saint-Michel) が双璧をなしている。サン・タンドロ大聖堂はボルドー最大の教会で、ロマネスク時代の遺構は身廊（入口から内陣にいたる中央部分）に一部残されているがほとんどはゴシック時代のものである。先に触れたルイ7世とアリエノールの結婚式はここでおごそかに執り行われた。

サン・ミッシェル教会はバシリカ形式のゴシック教会堂で、15世紀末から16世紀にかけて建設された。教会に付設された鐘楼は高さ114メートルに達する。気が遠くなるような長い螺旋階段を1段1段登り、息もきれぎれにやっと鐘楼上部に到達すると、そこからの眺望は筆舌に尽くしがたいすばらしさで、ボルドーの町の全景を眺望することができる。

・月の港－ボルドー

ボルドーは18世紀にその繁栄の極点に達した。ガロンヌ川 (Garonne) がボルドーに入ると三日月のように湾曲していることから「月の港 (Port de la Lune)」と呼ばれ、ワインをはじめとする各地の物資が行き交う国際的な貿易港として賑わった。町には18世紀のファサードをもつ都市建築が大量に分布する。18世紀の建築がこれほど質・量ともに残されているのは珍しい。

ボルドーはパリにおけるオスマンの大改造の約1世紀も早い時期に市門や広場、道路などの都市美観を整備したことで知られる。建築史家ドナルド・オールセン (Donald J. Olsen) の浩瀚な研究によると、都市を芸術作品と見立てて整備するのは19世紀国民国家の首都に共通した特徴であるが、『芸術作品としての都市－ロンドン・パリ・ウィーン』、ボルドーはその先駆をなしている。その時期に建設されたブルス広場 (place de la Bourse) は、王付建築家アンジュ・ジャック・ガブリエル (Ange-Jacques Gabriel) によって1775年に完成した。ガロンヌ川に開く広場は、まるでヴェルサイユ宮殿を思わせる背後の宮殿のバロック的な構成とあいまって、壮大な劇場装置をみるかのごとくである。

本物の大劇場 (Grand Théâtre) の方はコメディ広場 (Place de la Comédie) に面してたつ。この建築も18世紀のもので、バレ・ロワイアル (Palais Royal) を設計した建築家ヴィクトル・ルイ (Victor Louis) によって1773年から1780年にかけて建てられた。新古典主義様式の堂々たる建築で、パリのオペラ座を手がけたシャルル・ガルニエ (L. Charles Garnier) は、オペラ座を設計するにあたり、この大劇場から少なからずインスピレーションを得たという。

・世界遺産の転回点

2007年6月29日、ボルドーの町が28日付でユネスコ世界遺産に正式に登録されたというニュースが世界中を駆けめぐった。ユネスコ世界遺産の登録自体、一定のニュース性があることは確かだが、世界的な大ニュースになることは珍しい。ボルドーのケースは従来型の文化遺産にはないものを含んでいた。

認定されたのは、いわゆる歴史的街区だけでなく1960年代の人工地盤により開発されたメリアデック (Mériadek) のオフィス街やグランパルク (Le Grand Parc) の集合住宅など、

近代的な再開発地区を含む。その面積は 1810 ヘクタールに達し、市域のおよそ 50 パーセントにあたる。旧市街地が世界遺産に登録された事例は過去数え切れないほど存在するが、これほどの大規模な市街地面積の遺産登録はなかったし、しかも 60 年代以降の都市開発までが含まれる例はボルドーをもって嚆矢とする。

18 世紀の都市景観整備と当該期の建築の残存状況が世界遺産登録の切り札の一つとなったと伝えるが、町まるごと登録されたのはまさに画期的な出来事である。都市は歴史的街区だけで生きているわけではない。それぞれの時代の改変や更新が少しずつ加わりながら都市は成長する。こういうごく当たり前のことがいままで 10 分に意識されてこなかった。今回のボルドー市の登録はユネスコ世界遺産史上忘れられない快挙であり、都市と文化遺産をめぐる概念の転回点を予兆する、一大ニュースであった。

・メリアデック地区

世界遺産登録に含まれることになったメリアデック地区はボルドー市の西部に位置し、長い間広大な沼地として放置されていた。19 世紀に入って沼地が埋め立てられ低所得者層の労働者や職人が住みつくようになり、売春宿や居酒屋、芝居小屋などがたちならぶ歓楽街が形成される。ボルドー市は 1955 年この地区を全面的に再開発することを決意し、1963 年人工地盤を築いて商業およびスポーツ施設を備えた複合的なビジネスセンターが誕生する。地区内には 1960 年代から 80 年代にかけて、近代的な高層ビルやショッピング・モールが次々と建設され、ボルドー市の中心地区として大いに繁栄している。いまやボルドーにとって欠くことのできない地区であることは間違いなく、ここを文化遺産の範囲に含めたいというボルドー市の強い意向はよく理解できる。

フランスは再開発にさいして人工地盤をつくるのが好きな国で、ミッテラン (François Maurice Adrien Marie Mitterrand) 政権下開発されたパリのデファンス地区 (La Défense) でも大々的に人工地盤が導入された。そしていずれの再開発も一定の成功を収めていることが注目される (日本でも同じ 60 年代、大高正人設計による坂出市の人工土地がつくられたが、こちらの方はその後はかばかしくなかったようである)。

・造形への意志

日本の都市をみていると、統一的な町並みを残す町はたくさんあるが、それが「造形」された景観という印象をもつことはまずない。町並みの背景には風土や文化を共有した水平的な社会的結合の存在を想定することはできるが、そこに強い造形への意志を読み取ることは難しい。

一方、ヨーロッパの都市は石や煉瓦という堅固な素材でできているだけでなく、それ以上に都市が一つ一つの分節した造形芸術の積み重ねで構築的につくられていることがはっきりと感じられる。都市の景観にはそれぞれの時代の意志が貫徹している。ボルドーの歴史は古代ローマに遡るが、都市史的には 18 世紀の啓蒙主義的な都市開発と 20 世紀の近代的な都市再開発が 2 つの大きなピークを刻んでいる。ユネスコ世界遺産登録にあたって、この 2 つの画期が正しく評価されたのは、都市が造形芸術として捉えられてきた長い歴史

がなせるわざであろう。わが国ではなかなかまねのできないことである。

3. 2 トゥールーズ

・星の王子さま

『夜間飛行』や『人間の土地』などの作品を残したアントワーヌ・ド・サンテグジュペリ (Antoine de Saint-Exupéry) の代表作は、何といたっても『星の王子さま』である。この作品は最初、1943 年アメリカで刊行された。その後さまざまな言語で翻訳され世界中で読まれることになった超ロングセラーである。わが国では岩波書店がながらくこの翻訳権を独占していたが、2005 年に翻訳権が切れたのをきっかけに各社から新訳が相次いで出されたので、大きな書店には『星の王子さま』コーナーが設けられるほどであった。

サンテグジュペリは作家であると同時に有名な飛行士だった。彼の作品はパイロットとしての経験をベースにしたものが多い。『星の王子さま』に登場する「ぼく」も飛行士であって、著者自身遭遇したリビア砂漠飛行機墜落事故の実体験がもとになっている。

ところで第一次世界大戦後、フランスではじめて民間の定期航空路が開設された時、その拠点になったのがここで取り上げるトゥールーズ (Toulouse) であって、サンテグジュペリはトゥールーズとカサブランカ (Casablanca) を結ぶ航路の飛行士として勤務していたのである。

その後航空産業各社がトゥールーズに工場を構えるようになり、コンコルドの開発もトゥールーズで行われた。現在も、エアバスの本社がトゥールーズに置かれ組立工場が稼働中で、ヨーロッパにおける先端的航空産業の中核都市として不動の地位を占めている。このように航空産業都市トゥールーズは時間を遡るとサンテグジュペリと接点があり、世界的ベストセラー『星の王子さま』の誕生に一役買ったといえなくもない。

・交通と都市

現在ではトゥールーズといえば先端的な航空機産業がただちに想起されるが、もとをただとこの町は一貫して交通とともに発展してきた歴史都市なのである。

トゥールーズの発生は古代ローマ時代に遡る。すでにその時点から交通・軍事・交易の拠点として繁栄していた。すなわち中央を流れるガロンヌ川 (la Garonne) は、ピレネー山脈 (Les Pyrénées) のアラン谷 (Val d'Aran) を源としトゥールーズを経て、ボルドー (Bordeaux) でジロンド川 (la Gironde) に合流する。つまり水上交通を利用してフランスからスペインに向かう場合、必ずトゥールーズを経由せざるをえなかったのである。さらに広い範囲に目を配ると、ガロンヌ川は地中海と大西洋というヨーロッパの2つの海を結ぶ大動脈の一部を形成しており、古くから交通の要衝として栄えた理由が納得できる。同じ地理的条件をもつ南西フランスのもうひとつの大都市ボルドーも古来、交易都市として成長を遂げた。

トゥールーズにはもうひとつ中世人が頻繁に利用したサンティアゴ・デ・コンポステーラ (Santiago de Compostela) の巡礼路が通っている。この巡礼路はフランス各地からピ

レネー山脈を経てスペイン北部に位置する聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラに通ずる。ここはイエス・キリスト 12 使徒のひとり聖ヤコブにちなんだ聖地で、ローマ、エルサレムと並んで 3 大聖地のひとつとして多くの巡礼者を集めた。フランス側からはこの巡礼路につながる道が 4 つあるが、このうち「トゥールーズの道」がここを通過する。サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路は 1993 年ユネスコ世界遺産に登録されている。

トゥールーズにはもうひとつ世界遺産に登録されているインフラとして、ミディ運河 (Canal du Midi) がある。ミディ運河は 1694 年に完成した、ガロンヌ川から分岐する大量輸送ルートで、地中海と大西洋を結ぶ水上ルートを大幅に短縮するために開削された。しかもこのルートが完成するとスペインのジブラルタル海峡 (Estrecho de Gibraltar) を経由する必要がなくなり、通行税を払わなくてすむので、ルイ 14 世 (Louis XIV de France) の国家的プロジェクトに位置づけられ、当時最先端の土木技術を駆使して実施に移されたのである。ミディ運河ができたことによって、ワインの大量輸送が可能になり、ラングドック (Languedoc) 地方のワイン生産は飛躍的に伸びたことが知られている。

このようにトゥールーズは古代から現在に至るまで、「交通」とともに成長した都市であり、現在の航空産業都市というあり方もそうした流れの延長上に位置づけられる。

・宗教と都市

トゥールーズは交易・交通の要であると同時に、大司教座が置かれる宗教的拠点でもあり、さらには巡礼路の重要な経由点でもあったので、ここには数多くの宗教建築がたてられた。その最大のモニュメントがサン・セルナン聖堂 (Basilique Saint-Sernin) である。

サン・セルナン聖堂は初期ロマネスク教会堂としてもっとも著名なもののひとつで、ヨーロッパのなかでも最大級の規模を誇る。1080 年から 1120 年の間に建設された。10 字交差部から屹立する鐘楼は町のあちこちから望むことのできる高さを有し、トゥールーズのランドマークになっている。巡礼者はこの聖堂を目印としてトゥールーズに立ち寄った。平面は外周部に二重側廊を設け、修道士の祈祷を妨げないで堂内を一巡できる、いわゆる「巡礼聖堂」形式を採用している。内部はロマネスク教会特有の重厚かつマッシブな空間が現出している。

サン・セルナン聖堂のもうひとつの顔として、キリスト教異端を弾圧するための拠点となったことが挙げられる。トゥールーズやボルドーが位置する南西フランスは、異端カタリ派 (アルビジョア派ともいう) が分厚く広がる地域で、なかでもトゥールーズはカタリ派の中心となっていた。カタリとは「清浄」を意味する言葉で、キリスト教のなかでも極度に禁欲的な教えを信仰する一派であった。カタリ派は次第に当時のキリスト教の墮落を鋭く批判する民衆運動の性格を帯びようになり、南フランスの有力諸侯の保護もあって一大勢力を形成しつつあった。カトリック教会はこの批判勢力を無視できず、異端宣告を下す。その弾圧には徹底したものがあり、アルビジョア 10 字軍を派遣したり、異端審問制度を導入して改宗をはかるが、なかなか効果が上がらなかったようである (14 世紀になってようやく根絶されることになる)。

ゴシック建築の名品、ジャコバン教会 (l'église des Jacobins) もサン・セルナン聖堂と並んで見逃せない存在である。トゥールーズはドミニコ会発祥の地であって、ジャコバン教会の前身ジャコバン修道院はドミニコ会の修道院として 1230 年から 1385 年の間に建設された。「ジャコバン教会の椰子の木 (palmier des Jacobins)」と愛称されている内部のリブ・ボルトは圧巻である。まるで椰子の木のように放射状に広がるリブ。このようなカラフルで斬新な内部意匠はなかなかお目にかかれない。ジャコバン教会に隣接する修道院の回廊もすばらしい。中庭には手入れの行き届いた幾何学庭園があり、それを取り巻く回廊は気品に満ちた静謐さを湛えている。

・文化と都市

トゥールーズは「ville rose」、つまりピンク色の町と愛称されている。それはトゥールーズで使われている煉瓦がややピンクがかかった色であることが直接的な理由だが、この呼称はトゥールーズがもつ多様で華やかな文化の比喩的な表現となっている。すでにみた建築文化はもとより絵画、彫刻、文学、エンターテインメント、スポーツなどなど、南フランスの文化的中核を形成してきた。

アセザ館 (l'hôtel d'Assézat) は英語に直すと「the pink hotel」で、16世紀に建てられたピエール・ダセザ (Pierre d'Assézat) の邸館である。フランス古典主義建築の最初期の例であって、トゥールーズ煉瓦と石材を巧みに組み合わせた3層からなるウイングが中庭を取り囲むようにたっている。玄関にあしらわれた2本のねじり柱が、整然とした古典様式にアクセントを与えている。

1994年アルゼンチンの資産家ジョージ・ベンバーグ (Georges Bemberg) が永年にわたって収集した美術品をトゥールーズ市に寄付し、アセザ館は美術館に生まれかわった。現在はベンバーグ財団がその運営にあっている。ここにはフランスを代表するトゥールーズ・ロートレック (Henri de Toulouse-Lautrec) やピエール・ボナール (Pierre Bonnard) などの絵画作品はもとより、彫刻、家具などが数多く展示され、近現代フランス美術の殿堂となっている。ムーランルージュの踊り子や酒場の女たちを生涯描き続けたトゥールーズ・ロートレックは名前からもわかるように、南西フランスの統治者トゥールーズ伯爵家の出身であった。

・都市のトリプレックス

トゥールーズの中心、キャピトール広場 (Place du Capitole) にたつと、町中にたつさまざまな歴史的モニュメントが背後に控え、広場では毎日マーケットが開かれ、賑わいを見せている。この広場はきわめて広大で、広場の規模はトゥールーズという都市の大きさをよく示している。しかしトゥールーズはもちろん一挙に大都市になったわけではなかった。

都市が成立するための条件には交通、経済、政治、宗教などのいろいろな要素が想定できるが、トゥールーズはまずガロンヌ川沿いの交通の要衝に最初の都市基盤が築かれ、やがて宗教的な中心というもうひとつの属性を帯びるようになり、そして時間をかけて豊か

な文化を育んだ。このように交通、宗教、文化はあたかもトゥールーズという都市を形質化する3重螺旋の遺伝子 (DNA Triplex) のようである。

こうした遺伝子がある時代にはカタリ派という特異なグループを生む土壌を提供したであろうし、オック語 (Langue d'Oc) という地域固有の言語を普及させた。そしてピンク色の華やかな町と文化を育て上げたのである。一定の歴史的時間を経て成長した都市はどの都市ひとつ同じではない。それは都市の外観だけでなく、都市の雰囲気や個性など可視化されない部分にも深く刻印されている。トゥールーズにはそうした「都市の遺伝子」がいまなお、脈々と生き続けているようにみえる。

3.3 セゴヴィア (スペイン)

・水道橋の残る町

スペインの首都マドリッドから出る郊外行きの鉄道に乗って約2時間、のどかな田園風景のなかに突如、巨大な土木構造物が姿をあらわす。これが有名なセゴヴィア (Segovia) の水道橋で、紀元50年頃のローマ帝国時代に築かれたものである。ローマの水道橋はいくつか遺されているが、これほど完全に近いかたちで保存されている例は少ない。それゆえ、セゴヴィアは丘の上の中世都市とともにローマ時代の水道橋のある町として、1985年ユネスコ世界遺産に登録されたのである。総長813メートル、最高点28.5メートルの規模をもつ水道橋は128のアーチによって支えられ、2万個以上の花崗岩のブロックからなる。町のスケールを遙かに超えた巨大インフラストラクチャー (以下、インフラと呼ぶ)、いや「記念碑」といった方が正しいかもしれない。

塩野七生氏の畢竟のライフワーク『ローマ人の物語』のなかで、ローマ帝国のインフラのみに焦点を当てた番外編の1巻がある (『すべての道はローマに通ず ローマ人の歴史X』新潮社、2001年)。このなかで塩野氏は帝国にとって広域の街道や水道橋はもともと本質的なものであり、その巨大さ、長さ、見た目の美しさ、すべてが帝国の威信をシンボライズするとともに、領土支配の文字通り基幹施設として機能し、精巧極まりない技術の結晶であったことを再三にわたって強調する。ローマ帝国は版図拡大を次々と実現する一方で、資金と労働力に糸目をつけず、こうした気が遠くなるような壮大なインフラづくりに精を出したのである。ローマ帝国の皇帝たちには、メガロマニアック (巨大願望) 症候群ともいべき強迫観念があったのではないかと思いたくなる。ローマの平和 (パクス・ロマーナ) と繁栄を永遠にするために。

セゴヴィア以外にも、フランス南部ガール (Gard) 県のガルドン (Gardon) 川に架かるポン・デュ・ガール (Pont du Gard)、トルコ・イスタンブールのヴァレンス (Valens) 水道橋、チュニジアのハドリアヌス (Hadrian) 水道橋など、いくつかの水道橋が今日に伝えられてきたが、これらは紀元前320年のアッピア (Appia) 水道を嚆矢として紀元後3世紀までの間に築造されたものである。今年の世界遺産でフランスの一連のヴォーバン式軍事城塞が登録されたが、こうしたインフラ系の歴史的なモニュメントのなかでもローマ水道橋は規模に

においても精度においても群を抜く特異な存在であるといつてよい。水道橋は2層あるいは3層のアーチ橋であって、それぞれの層のアーチの大きさを変えることによって安定性を高め、1:3000 という微小勾配を一定に保ちつつ水を数万キロ離れた遠隔地に運ぶ。つまり繊細な緻密さと壮大な構想力を併せもつインフラであって、古代ローマ人の技術力の高さと長大な構築物を現実のものにした実行力にあらためて驚かされる。水道は地形のさまざまな条件をねじ伏せ、ひたすら目的地に直進する。水道の大部分は地下に埋設されていたが、谷地や川などの低い地形にさしかかると水道が地上に顔を出さざるをえないところがあり、そこにはこうした水道橋がその偉容をあらわしたのである。

・子豚の丸焼き

セゴヴィアの名物料理はなんといつても子豚の丸焼きコチニーヨ (cochinillo) である。1898 年創業の老舗カンデイド(mésón de cándido)が水道橋の脇に店を構える。巨大な水道橋と小振りなレストランの対比がなんともユーモラスであるが、考えてみるとこれらはけっして唐突な組み合わせではない。ローマ水道橋の多くは帝国の遠隔地かつ重要な前線基地に建設されたわけで、ある意味で「僻地」の象徴でもある。豚の丸焼きはたしかに豪快でヴォリューム満点の美味しい料理であるが、都会風の洗練された料理とはほど遠い。いまや多くの観光客を集める高級レストラン化しているが、もとはといえば素朴なセゴヴィアの郷土料理を提供する田舎料理のお店であった。子豚の丸焼きは銀の皿に盛られ、店主はそれを皿の上で豪快にぶった切って客に取り分ける。このやや乱暴な給仕の仕方は豚肉がいかにか柔らかいかを示すためのものであったらしいが、いまや観光客向けのパフォーマンスになっている。

豚といえばスペインはイベリコ豚(porc ibérico)と呼ばれる黒豚が有名である。イベリコ豚は生後しばらく母乳で育つが、その後は豊かな自然で放牧される。この放牧期間がイベリコ豚特有の甘みと霜降状の脂身をつくるのに重要なステップとなっている。セゴヴィア周辺の田園地帯にも多くの放牧地があつて、そこで育った豚のなかでもまだ成長していない子豚料理は田舎料理とはいえ、特別な日にしか食べないきわめて贅沢な料理であった。美食家にとってこたえられないのが、このイベリコ豚の後ろ足を塩漬けにしたハモン・イベリコと呼ばれるハムである。牛肉のような赤身と細かく線状に入る脂肪の絶妙のバランスが知られている。イベリコ豚は豚コレラの感染が疑われ、わが国では長らく輸入が禁止されていたが、近年ようやく安全性が確認され 2004 年以降解禁された。

・白雪姫の舞台

子豚の丸焼きで腹ごしらえをして町のなかに入ると、その急な地形に驚く。古代からこの地は交通の要衝にあたり、町が展開する比較的急峻な丘陵地には集落が形成されていた。町のもっとも高い位置の岩盤上に聳える古城アルカサル(Alcázar)の位置には、考古学的知見によるとかつてケルト人の砦があつた。

11 世紀に入ってフェルナンド 1 世(Fernando I)の子アルフォンソ 6 世(Alfonso VI)は、兄弟によって分割統治されていたレオン(León)王国とカスティーリャ(Castilla)王国を統

合し、広大な国土を支配する。アルフォンソ 6 世は、多くの伝説に彩られたスペイン史上の英雄であって、「勇敢王」とも呼ばれた。彼は国土を拡大する一方で、セゴヴィアという都市に目を付け、ここに拠点をおく。この時に築かれたのが上記のアルカサルであって、古代からしばらく断絶していたセゴヴィアの歴史が再開される。セゴヴィアは羊毛や毛織物産業が盛んになりつつあった一帯に位置し、しかも交通条件が古代以来整っていたので、国王の所在地という拠点性が与えられた町は急速に多くの商人や職人が集まり住む中世都市としての相貌を獲得していく。

アルフォンソ 6 世以降、歴代カスティーリャ国王は由緒あるアルカサルに好んで居を構え、それぞれの時代の改造や付加が行われた。1479 年カスティーリャ女王イサベラ (Isabella) とアラゴン (Aragon) 王フェルディナンド (Ferdinand) の結婚によりスペイン王国 (イスパニア王国) が成立するが、その前にイサベラ女王の就任式が行われたのも、このアルカサルであった。そして有名な 1492 年のコロンブスのアメリカ大陸発見の年、スペイン王国はイスラム勢力の最後の砦であったグラナダを陥落させ、いわゆる国土回復運動であるレコンキスタ (Reconquista) を完了し、帝国としての地歩を固めていく。16 世紀のフェリペ 2 世 (Felipe II) の時、スペインは絶対王政の頂点を極め、アルカサルにはブルーのスレート屋根を冠した円錐状の塔屋が足されて、まるでお伽話に出てくるような古城の外観がようやく完成する。

お伽話に出てきそうなお城は、実際お伽話の舞台となった。これはよく知られる事実であるが、ウォルト・ディズニーが 1937 年世界初のカラー長編アニメ映画として発表した「白雪姫」に登場するお城はセゴヴィアのアルカサルをモデルにしている。

ヨーロッパには中世の城館が都市の近傍あるいは都市内に存在するものが多数あるが、日本の城下町のように都市全体をコントロールするような存在ではなかった。城館はあくまで世俗権力の館であり、その内部は豪華絢爛の装飾品で埋め尽くされた別世界であったかもしれないが、それは内向きのものであって、都市に開かれることはなかった。ここでも日本の城下町との差違こそが際だつ。

・カテドラルと中世の町

ところでレコンキスタは、それまでイスラム勢力によって支配されていた大半の西ヨーロッパをふたたびキリスト教が貫徹する世界に取り戻すことであった。イスラム教の中心をなしていたモスクは次々と破壊され、カトリック教会が建設された。

セゴヴィアはアルフォンソ 6 世の時にカスティーリャ王国の支配下にあったので、都市の中心には早くから大聖堂が建設され、司教座が置かれた。丘陵地の微高地に君臨するモニュメント、セゴヴィア大聖堂 (Cathedral de Segovia) は、1525 年カルロス 5 世 (Carlos V) の時に建設されたスペイン後期ゴシックを代表する教会である。前身のロマネスク教会堂が 1520 年の大火によって失われたため、ひときわ立派な聖堂建設のために多くの建築家が参加したことが知られている。50×105 メートルの平面規模をもつ 3 廊式の本格的ゴシック教会堂がこうしてセゴヴィアの中枢を占めることになったのである。この大聖堂はその優

雅な佇まいから「大聖堂の貴婦人」(The Lady of Cathedral) と呼ばれている。

町は教会を中心として放射状に曲がりくねった坂道が通り、中世都市特有の細い街路に沿って4層、5層の都市住宅が高い密度で立ちならぶ。木造ハーフティンバーの集合住宅は外からみて何度も垂直方向に増築を繰り返した痕跡が確認できるが、いまなお現役で活躍している。

セゴヴィアの中世の繁栄を彷彿とさせる建築として、ロス・ピコス邸(Casa de Los Picos)を紹介しよう。この石造住宅はセゴヴィアの典型的な邸宅建築であって、15世紀に建設された。デザインの基調はルネサンス式にあるが、なんといっても目を奪われるのが正面を覆う花崗岩の意匠である。これは一つひとつの花崗岩のブロックをピラミッド状に加工し、それを正面の壁一面に埋め尽くすという趣向である。

この意匠をどのようにみるかが問題であるが、少なくとも都市的洗練からはほど遠い表現であるといわざるをえない。この邸宅は中庭にも豪華な輸入タイルによる装飾があり、富の表現がやや直裁的に過ぎるように思える。セゴヴィアはたしかにアルフォンソ6世以降、地方の中心都市として栄えたが、やはり田舎町であることにはかわりなく、それはこうした富裕層の邸宅にもよくあらわれているのである。

・インフラと都市

都市は一般的にいて、インフラによってその物的基盤を形成する。都市が拠って立つ地盤はもとより、周囲を防備する城壁や軍事施設、都市内をめぐる道路群、などなど人体に例えるならば「骨格」に相当する部分である。しかしそれだけでは都市は機能しない。そこにはエネルギーや上下水などを供給するためのインフラが必要になる。これまた人体に例えるなら人体を維持していくために不可欠な酸素や栄養を運ぶ血流に代表される「循環」ということになろう。そして最後に人体は細胞という単位の複雑な集合＝組織によって成り立っている。仮に都市インフラをこのように「骨格」－「循環」－「組織」という3つの位相で捉えてみると、都市を構成する建築から土木構築物までを一連のものとしてみる視点が開かれる。こうした視点は建築を含む都市組織(urban fabric)という従来のいい方とも親和的である。

セゴヴィアの例はあまりにも古代の水道橋というインフラ、これはローマ帝国にとっては「循環」であったかもしれないが、スケール的には「骨格」である。この水道橋の強度が強すぎたために、のちに成立するアルカサルや大聖堂、都市建築一ひとつひとつはなかなか魅力的なのだがーが霞んでみえる。そしてローマ帝国の「僻地」としての当初の位置づけは、ある種、垢抜けないセゴヴィアという町の基本的な性格をいまなお規定しているのではないかと思える。そういえば、白雪姫や7人の小人が登場するアニメの舞台もけっして華やかな都会ではなかった。

3.4 トレド(スペイン)

・あのギリシャ人

倉敷の大原美術館にエル・グレコ (El Greco) の「受胎告知」が収蔵されていることはよく知られた事実である。アジアに端っこの日本という小国に、しかも私立の美術館のコレクションにスペイン、いや西欧の巨匠のひとりであるエル・グレコの代表的作品があるということは、ほとんど奇跡に近い。この驚くべき快挙は、倉敷紡績の総帥・大原孫次郎と洋画家・児島虎次郎という史上稀にみる名コンビによってもたらされた。

大原美術館にはこのほかにもルノワールやゴッホなど世界的な画家の作品を所蔵しているが、とりわけエル・グレコのこの作品が大原美術館の手に落ちたのは偶然の連鎖がなせる技であった。渡欧中の児島がパリのとある画廊で競売のために飾られているのをたまたま発見し、作品のすばらしさに衝撃を受け、ただちに大原に多額の資金を送金させて買い取ったものである。当時はEメールなんて便利なものはなかったから、日本に連絡して送金されるまでの間、児島はこの作品が他の画商の手に渡らないか気が気でなかったろう。ともあれ「受胎告知」の落札は、画家のもつ絵に対する慧眼と児島の眼を信じて資金提供を惜しまなかった大原の二人がいてはじめて可能な出来事であった。

このエル・グレコという作家、実はクレタ島生まれの人である。本名をドメニコス・テオトコプーロス (Doménikos Theotokópoulos) という。エル・グレコはニックネームで、スペイン語で「あのギリシャ人」という意味である。そして彼の画業にとってもっとも重要な後半生はスペイン、トレドという町を舞台に繰り広げられたのだ。

グレコは晩年に「トレドの風景」という絵を残している。小林秀雄はこの絵が「嵐のトレド」と俗称されていることに言及したのち、「嵐は作者の心の裡のものである。トレドの町が10字架にかけられているのである。評家は、この絵の構成について、セザンヌを引合いに出したがるが、この絵の語る心の嵐は、寧ろゴッホに通ずると私は感じた。これも、この世の見納めと言った風なものを感じさせる稀有な風景画である。」と的確な指摘をしている (『小林秀雄全作品 22 近代絵画』新潮社、2004年)。

・グレコのトレド

もう少し、エル・グレコの足跡を追ってみよう。1541年クレタ島に生まれたグレコがヴェネツィア、ローマで修業期間を終えたのち、スペインの地を踏んだのは1577年、画家人生の円熟期を迎えようとしていた36歳の時であった。この時、スペインはフェリペ2世 (Felipe II) の治世下であり、都がトレドからマドリッドに移され、新首都マドリッドの郊外では王家の一大モニュメントとなるエル・エスコリアル修道院 (Monasterio de El Escorial) が建設中であった。グレコはこの大仕事を狙ってスペインに渡ったといわれる (中野京子『名画で読み解くハプスブルク家12の物語』集英社、2008年)。

グレコの絵はしかし王の好みに合わず、宮廷画家への途は閉ざされるが、グレコはマドリッドを離れ旧都トレドに腰を落ち着け、そこで水を得た魚のように旺盛な作家活動を展開する。トレドの町はグレコを歓迎し、グレコもまたこの町を愛した。グレコはスペインの永住権を獲得し、終生トレドで仕事をし続けた。グレコの代表作のひとつとして有名な「オルガス伯の埋葬」はトレドのサント・トメ (Santo Tomé) 教会の注文に応じて描かれ

たもので、その斬新な構図と精細な描写は当時大きな評判を呼び、グレコの名は一躍ヨーロッパ中に広まることになる。

先にみた「トレドの風景」はグレコ晩年の 1596～1600 年に制作された作品と推定され、小林秀雄がいうようにこの町の風景を愛おしむグレコの異様な熱情が作品全体に漲っている。エル・グレコの住んだ地区はかつてユダヤ人地区であって、ここには「エル・グレコの家美術館」(Casa-Museo de El Greco) と称する建物が公開されているが。これはグレコが実際に住んだ家ではなく、同じ地区にあった別の空き家を利用して 1911 年に再現したものである。したがってエル・グレコの家そのものではないが、16 世紀に遡る住宅遺構として貴重である。

・共存＝ラ・コンビベンシア

トレドの都市としての歴史は古い。スペインのほぼ中央、マドリッドの南 70 キロメートルのタホ(Tajo)川沿いのかかなり急峻な丘の上に都市的な集住がはじまるのは、遅くとも 5 世紀に遡る。タホ川はイベリア半島を東西に横断する最長の川で、スペインとポルトガルにまたがる水上交通の要である。ポルトガルの首都リスボンがタホ川の河口にあり、スペインの新旧の首都トレドとマドリッドがいずれもタホ川沿いに立地するのをみれば、この川がいかに重要視されたか一目瞭然である。トレドは町の 3 方がタホ川に囲まれていて、自然の要害をなしている。

トレドの特徴はこうした自然の要害に加えて、さらに堅固な市壁によって守られた都市内部には古くからさまざまな民族や宗教が入り込み、それらは互いに対立することなく緩やかな「共存」を果たしたという点にある。スペイン語の「ラ・コンビベンシア (La Convivencia)」は英語の the coexistence、つまり共存という意味で、スペインのレコンキスタ(国土回復運動)が終了し、ユダヤ教徒の国外追放が始まる 1492 年(イスラム教徒は 1502 年)までの間、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒がそれぞれ居住区を分けながらも平和の裡に併存・交流していた時代を指す。その中心的な都市がトレドであって、トレドは宗教と文化の坩堝として都市的な成熟度を高めていった。

アッ＝ザルカーリー(Al-Zarqali、1028～1087 年)という人物はわが国ではほとんど知られていないが、スペインでは 11 世紀に活躍したアラブ系の数学者・天文学者として有名である。アッ＝ザルカーリーはトレドに生まれ、さまざまな器具を考案して科学的な天文学の基礎を築いた。とりわけ彼の手になる天文表、「トレド表」はよく知られている。当時、トレドは宗教上の対立もなく、ヨーロッパでもっとも安全な都市であったので、各地から多くの学者がトレドに集まり、知の最先端を形成していたのである。

13 世紀のアルフォンソ 10 世(Alfonso X)の治世下、トレドは名実ともにヨーロッパにおける文化・学問の一大中心都市となり、アラブ世界ですでに高度な達成をみた哲学ほか各学問分野の膨大な蓄積をラテン語に翻訳しようとする一大プロジェクトが進められた。宗教・文化の坩堝となったトレドは学知においてもアラブとヨーロッパを架橋する重要な貢献を果たしたのである。このような事績からアルフォンソ 10 世は賢王(El Sabio)と

呼ばれる。

・宗教建築の展覧会場

トレドにおける宗教の共存は、結果として3大宗教のモニュメントとして可視化されている。トレドはまるで宗教建築の展覧会場のようである。

まずは、イスラム都市の旧市街を意味するメディナ (Medina) と称する地区にたつ建築からみてみよう。この地区には古くから裕福なイスラム教徒が居住し、その中心部にある「光のキリストのモスク」(Mezquita del Cristo de la Luz) は、イスラム教がこの地においてしっかりと根づいていた事実を雄弁に物語る。

このモスクはきわめて小規模で、わずか8×8メートルの大きさしかないが、当時の文化度の高さを示す珠玉の作品である。建立碑文が残されており、裕福なイスラム教徒の寄付によって999~1000年に建設された事実がわかる。正方形のプランは9つのベイ(区画)に分割され、それぞれの上部にはやや荒削りのムデハル(Mudéjar)様式の装飾を施した天井が覆う。ムデハル様式とは、国土回復運動の展開のなかで、11世紀から12世紀にかけてイスラム文化とキリスト教文化が混雑して成立した一種の折衷様式であって、寄せ木細工風の装飾や幾何学的文様に特徴がある。このモスクが建設された時期はまだムデハル様式はそれほど本格化しておらず、したがってこの小品は折衷様式のごく初期の、しかも年代のはっきりした貴重な事例といえることができる。

ユダヤ教のモニュメントとしては、サンタ・マリア・ラ・ブランカ(Santa María la Blanca)と名付けられたシナゴグ(synagogue、ユダヤ教の教会)がある。この建築はシナゴグとはいえ、1180年、キリスト教的土壌で育ったイスラム系の建築家がユダヤ人のために設計したものであって、最初から混雑した様式が採用されている。したがって、この建築もまた大きな分類ではムデハル様式ということになる。トレドは早くから宗教の共存が実現していたので、ムデハル様式が生まれる土壌がすでに用意されていたのである。

トレドの町の中心に鎮座するのは、やはりキリスト教会堂である。トレド最大のモニュメントであり、13世紀の盛期スペイン・ゴシックの代表作品として知られるのが、トレドのサンタ・マリア大聖堂(Catedral de Santa María de Toledo)である。この教会堂は数ある教会堂のなかでもっとも上位に位置する大主教座のある教会堂(Catedral Primada de Toledo)であって、1226年からスタートし15世紀に至るまで断続的に建設が進められた。この教会はしたがってトレドにおけるカソリックの総本山ということになるが、建築様式的にはゴシックを基調としながらも、そこかしこに折衷様式であるムデハル的ディテールがみられる。

鐘楼は当初2基立ち上がる予定であったが、実現したのは正面左手のタワーだけである。これもムデハル様式の影響を濃厚に受けたゴシック尖塔であり、トレドのランドマークとして親しまれている。トレドには急勾配で細い街路が迷路状に縫うように走っているが、街路の先にこの鐘楼が臨める場所がいくつか存在する。

・工芸と文化

フェリペ2世がマドリッドに遷都したため、トレドは16世紀以降古都という地位に甘んじることになるが、長い歴史をかけて形成された都市文化はそう簡単には衰えない。トレドは鉄製工芸品の生産でよく知られる。とくに熟練した技術と経験に裏打ちされた鑑識眼が必要となる刀剣類の生産はいまなおトレドが他の都市の追随を許さない。エル・グレコはおそらくそうしたトレドの文化の厚みと、他者を迎える都市の寛容さに魅入られるようにして、この地に定住することになったのだろう。

トレドの魅力はスペイン人がラ・コンビベンシアという言葉で表現しようとするように、やはり複数文化の共存にあることは間違いない。その共存の仕方は、それぞれが別々に存在していたわけではなく、高いレベルでの異種交流が行われたことに注意したい。学知・芸術・文化の混ざり合いは、要素の一つひとつが判別できないほどの一体性を示している。建築におけるムデハル様式はイスラム教・ユダヤ教・キリスト教の教会堂それぞれに共通してあらわれ、まるで音楽における通奏低音のような機能を果たしたといえる。こうした文化の共存共栄を可能にしたトレドという町はヨーロッパのなかでも特異な都市といってよい。

現代わたしたちは、文化という言葉にあまりにも慣れすぎていて、その重みや深さを10分に理解しているとはいえない。したがって、安易に異文化交流とか、多文化主義などのキャッチフレーズが飛び交うことになる。

トレドにおける文化の共存は、今日的にいうグローバリズムやグローバル・シティにおける文化交流とは対極的な位置にある。そもそも文化は本来きわめて個別的なものであり、場所に大きく規定された存在である。しかしトレドのように懐の深い都市は、外に向かって開き、多くのコスモポリタンを迎え入れる余裕をもっていた。そして文化の共存に至るプロセスは決して容易な道程ではなく、そこには長い時間の経過が必要であった。トレドという町はユネスコ世界遺産に指定された死んだ文化財都市ではけっしてなく、生き生きとした開放性を歴史的時間のなかで獲得した都市であるといえる。都市の美質のひとつに、トレドのように多種多様な要素を寛大に迎え入れつつ成熟していく姿があるとすれば、依然としてわれわれがこうした歴史都市から学ぶべき点は少なくない。

4. 小規模な<一群の都市>—フリースラント

1. はじめに

金沢の都市的特質は以上のような比較研究のなかで、「領域都市」としての側面にあるということが次第にベールを脱ぎ始めた。そのような観点から2010年10月現地調査を実施し、世界都市比較のための多くの論点を得ることができた。

ところで、21世紀に入り直面しつつある都市の問題群の背景のひとつは、都市をさまざまなレベルで下支えする基幹施設である都市インフラ（社会資本、エネルギー研究、社会

関係資本などを含む)の問題として焦点化することが可能である。しかし都市インフラの歴史・文化的側面や政治・社会的側面の研究は著しく立ち遅れており、建築史・都市史・土木史などを有機的かつ緊密に連携する方法と場の共有が俟たれている。

2. 研究概要

2.1 研究の目的

本研究では以下に挙げる3つの目的を設定している。

2.1.1 都市インフラ論

本研究は歴史的・複合的観点に基づく「都市インフラ」概念の拡大と深化を目的としている。ごく普通の人々が住む身近な住宅地の風景から、道路・鉄道・エネルギーを経て、地球規模の陸地と水にいたるまでを考察の対象に加えながら、新たな都市インフラ論の構築に寄与することを目指す。

ここでは以下のような類型化を試みている。

(1) 都市インフラの物理的側面

- 骨格：地盤（沼地干拓・埋立・地下・人工地盤等）、地形、港湾、軍事施設など
- 循環：交通（街路・道路、鉄道、水路・運河等）、エネルギー供給（薪炭、油）、上下水道など
- 組織：建築・敷地、空地、街路、街区、地区などの都市組織全体

(2) 都市インフラの文化的、政治・社会的側面

- 社会的共通資本、社会関係資本
- ：コミュニティ、教育、治安、文化など以上の目的に基づき、オランダ沼地研究会ではとくに都市と水との関係から生じる、広義の「都市インフラ」に着目し、研究を進めている。

2.1.2 小規模都市論 — 〈一群の都市〉論

産業革命以後、爆発的に規模を拡大したメガシティと呼ばれるような都市ではなく、比較的小規模なままで拡大せずに都市域を維持してきた都市を、研究対象としていかに焦点化するかについて、本研究を通じて思考したいと考える。メガシティがその巨大さゆえに多くの行き詰まりを抱えている現代において、小規模都市のありようは、これからの都市のあり方について考えるうえでも多くの示唆を与えてくれるだろう。

ここで我々が想定しているのは〈一群の都市〉という概念である。その研究対象地に、オランダのフリースラント州11都市（Elf Steden）を選んだ。11都市として括られるのは、Leeuwarden、Sneek、IJlst、Sloten、Franeker、Harlingen、Bolsward、Stavoren、Hindeloopen、Dokkum、Workumの各都市である。

フリースラント州は北海に面し、アイセル湖をはさんで北ホラント州と向かい合うオランダ11州のひとつである。フリースラントでは唯一フリジア語を公用語とし、住民は少数民族フリース人としてオランダ人一般と区別されるなど、社会的・文化的に他地域とは一線を画している。また、オランダの利水技術の起源として位置づけられるテルプ（terp：人工的な微高地上の集落）が、現在も数多く存在することが特筆に価する。

このフリースラントに属する「11 都市」とは、中世に都市特権を獲得し、政治や商業など様々な面でフリースラントの基盤となった歴史的都市群であり、現在に至るまで他の集落や町々と区別されている。11 都市は歴史的に繋がりを形成してきた都市群であり、様々な都市機能を互いに分担しながら発展してきた経緯がある。

一方で個々の都市は、歴史、文化、言語においてそれぞれ多様性を保持している。フリースラントの諸都市がその規模を小さいままに維持し、かつそれぞれの個性を失わなかったことと、都市間の繋がりがネットワークのありかたは実に注目すべきものである。我々はフリースラント州11 都市にみられるこのような姿について〈一群の都市〉というキーワードとともに取り上げ、検討してみたい。

これらの都市間ネットワークを担保し、かつ都市内部の空間的、社会的構成を決定づけているものこそは、既に述べたとおり広義の「都市インフラ」なのである。

加えて本研究では、これまでの都市史研究が個別の都市ないし都市内の地域を対象としていたのに対し、複数の都市をひとまとまりに対象化することで、都市という個別のものの領域から、都市相互の関係性へと視点を転換させることを狙っている。そして都市それぞれの機能分担のありかたや、都市間の類似性あるいは差異を論点化したい。このことこそが、金沢を城下町のみならずひとつの複合的な「領域都市」として位置づけるための一歩となるはずである。

2. 1. 3 国際的比較都市史研究 16-19世紀

本研究は16-19C の水と都市を主題とした国際比較都市史研究の一貫でもある。比較研究は、オランダ・フランス・イタリア・日本の諸都市をフィールドに、都市空間と都市インフラの関係の読み取り、低地の開発・制御を核としたものである。

3. 都市分析

3. 1 フリースラント 11 都市の原初形態に関する考察

3. 1. 1 フリースラントにおける集落類型とその分布

フリースラント州を包括的に扱った大型書*De Bosatlas van Fryslân* (Noordhoff Atlas Productions, 2009) によると、同州の集落はその形態からいくつかの類型にわけられる。そのうち11 都市との関連性を有するものには、Terpdorp、Vaartdorp、Wegdorp の三つの類型が挙げられる(図. 3. 1. 1. 1)。

以下順に、その成立過程と性格について略述する。

(1) Terpdorp : テルプドルブ

フリースラント州やドイツ北部においては、テルプと呼ばれる人工の盛土=微高地が造成されたことが知られている。これらの地域では広域に低湿地が分布しているため、満潮時に浸水を逃れる必要があった。この人工マウンドの規模は、都市スケールのものから一つの家族が居住する程度のもので多岐に渡るが、形状はいずれも正円に近く、中心が最も高い。そこに築かれる共同体の基本的性格は農業を基盤とするものであり、中規模以上のテルプは中央に教会が位置し、それを取り囲むように同心円状に住居が並ぶ構成をもつ。

(2) Vaartdorp : ファールトドルプ

前述のTerpdorp が人工であるのに対し、自然の微高地を利用したものである。Vaartdorp の特徴はファールトと呼ばれる自然水流沿いの微高地に立地し、舟運と結びついていた点である。中世以前のフリースラントにおいて舟運がどの程度発達していたかの詳細は明らかではないが、ある時期以降、交易に携わる非農業的性格も複合していったと考えられる。集落の形態は微高地の形に依存する。主には河川に沿ったリニアな形状で、原初期においては自然水流の片側(微高地側)に形成されたと推測される。舟運による交易の発達と都市化の過程に伴い、水路の両側に町が形成されたものもみられる。

(3) Wegdorp : ウェフドルプ

Weg すなわちWay(英)=道に沿って形成された集落を指す。これは上述の2 類型と比較してフリースラントに特有のものとはいえないが、低地地域において、道路は自然あるいは人工の堤防上に生まれるものであり、堤防(蘭語でdijk)の維持や建設との関わりを有する可能性が指摘できる。近世日本にみられる宿場町のように、道に沿って直線的に町が形成され、両側町の形状を呈する。この類型に分類される集落や都市は世界各地に多数存在するが、フリースラントでは水運が卓越していたゆえか、この類型は比較的少ないことが注目される。

(4) 3 類型の分布

図3.1.1.2 は、前掲書*De Bosatlas van Fryslân* の図版を転載したものである。これによると、北部から北西部の沿岸・内陸部においてTerpdorp が多く分布する。また、中部の湖水地域にVaartdorp が多くみられる。さらにWegdorpは内陸の東部から東南部を中心に分布している。集落の3類型はこのように分布する地域がそれぞれ偏っている。これらの分布は地質的・地理的特質と結びついているとみられ、11 都市の原初形態を考える上でも注目される。

3.1.2 11 都市の原初形態について

以上に概観した3 つの集落類型とその分布をもとに、ここでは11 都市の原初形態について考察する。11 都市の原初形態を厳密に明らかにするためには考古学的な調査を要するが、ここではあくまでも、集落類型から原初形態を類推する方法を採る。そのため、以下に記される内容はあくまで仮説段階であることに留意されたい。なお本考察では16C 末期にJacob van Deventer が制作した古絵図を参照している。またいくつかの都市は15C 以前にフリースラントの内陸部に存在していたミッデル海との関係によってその原初形態が大きく規定されていた。まずこの2 点について触れたい。

(1) Jacob van Deventer (ca. 1500-1575)の絵地図

11 都市の成立期はまちまちで、DokkumとStavoren は11C以前に交易都市として成立していたことが知られる。少なくとも15C には現在の11 都市すべてが都市権をもっていたことは、交易都市に関する史料からも明らかである。すなわちフリースラントの11 都市は、17C におけるオランダの黄金時代を遡る中世において、既に成立していたことになる。17C 以

前の11 都市の状況を描いた貴重な史料が、Jacob van Deventer によって描かれた16C 後半の絵地図である(図3.1.2.1)。Deventer の絵地図は測量に基づくもので、その信憑性は高いとされる。これらの絵地図には以降の都市図には確認できない河川が看取されるとともに、17C 以降には急激に拡大してその様相を大きく変えていった各図3.1.2.1 Deventer によるIJlst(16C 後半)<Terpdorp> <Vaartdorp> <Wegdorp>



図 3.1.1.1 集落の3 類型 (De Bosatlas van Fryslân より)

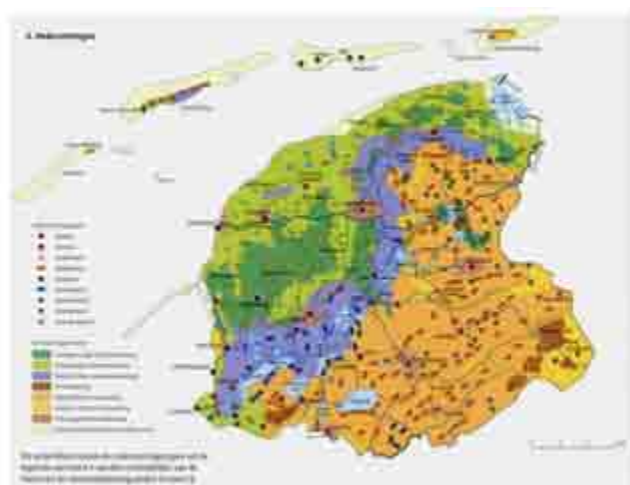


図 3.1.1.2 集落類型の分布図 (De Bosatlas van Fryslân より)

都市の拡大以前の姿が描かれていることになり、11 都市の原初形態を探る上で非常に重要な史料である。

(2) ミッデル海の消滅と都市形成

前掲した*De Bosatlas van Fryslân* によれば、かつて内陸に存在したミッデル海は図 3.1.2.2 のような過程で消滅していった。これによると、現在内陸に位置するLeeuwarden やBolsward は、かつてはミッデル海に近接していたことがわかる。海に近接する都市がこれと共存するうへでは堤防(di jk)の建設が必要不可欠であり、両都市についてはdi jkの建

設と都市の発展に不可分の関係がみいだされることが予想される。また、ミッデル海の消滅によって内陸部の水運ネットワークはダイナミックに変質し、都市間を結ぶ河川ないし運河ネットワークが整備されたことで、Franeker、Sneek、IJlst、Sloten などの各都市が交易の中継点として登場してきたものと考えられる。同時に、ミッデル海の消滅過程にあたる13-15C、フリースラントの水路網の原形が形成されたと考えられる。これら内陸中継都市の確立と同時に、州の内外を結ぶ港町も発達した。HarlingenとWorkum という2つの港町の発展は、中継都市の登場と州全域での水路網の発達とに平行な関係をもつとみられる。

(3) 11 都市の原初形態に関する考察

いま述べた2つの観点と、図3.1.1.1で示した3つの集落類型をもとに、11都市の原初形態を図式的に示したのが図3.1.2.3である。都市それぞれの原初形態に関する推定方法の詳細についてはここでは省略するが、いくつかのキーワードを挙げながら、その特徴について列挙したい。

- Terp : 微高地

人工のテルプ(図ではtと表記)、あるいはそれに類する自然微高地(図では(t)と表記)を有する。低地地方においてはこのような微高地が居住の拠り所となったはずであり、同地域における居住の手法と技術の原型を示す類型である。微高地の形態は各都市によって異なる。この点がその後の都市の発展やその形状を規定する大きな要素になる。

Leeuwarden、Franeker、Bolswardといった比較的大きな都市は2つ以上のテルプから構成されている。一方、Dokkumは1つのテルプからなるが、その規模がかなり大きい。よってDokkumは成立当初から、集落というよりはも都市的なスケールを有していたと考えられる。

-Vaart : 水運

Vaartdorpの分布から類推して、この型の集落を起源とすることが予想されるのは、IJlst、Workum、Stavoren、Sneek、Slotenである。前3者はいずれも、運河を中央に挟む両側町的な形状を示し、互いによく類似している。一方、後2者は自然水流の片側のみに町が形成され、線的というよりも面的な展開をみせる。これは微高地の形状に加えて、当初重要であった自然水流の役割が次第に失なわれていった結果と捉えられる。

-Haven : 港

StavorenとHarlingenはともに海港都市であるが、現状では海と町の向きが異なっている。Stavorenでは海に対して町が平行に伸び、Harlingenは直交する。しかしStavorenの海岸線が当初は図のようであったことを考慮するならば、原初期において両者は共に海岸線に対して直交する形態であったといえ、フリースラントにおける都市形状と海岸線との関係を考察するうえで注目される。

-Weg : 道

11都市の中でWegdorp型の要素を確認できるのは、フリースラント南部に位置するSlotenのみである。17Cに隆盛した都市で、その規模はきわめて小さいながらも特権的な

都市であると考えられている。しかも現在みられる町の構成が、運河と道が直交する十字型のプランをもつことから、しばしば「理想都市」的であるとも称される。しかしその原初形態はむしろ、非相称性が勝るものであったことが指摘できる。すなわち、教会が町の東側に立地することから、東部のVaartdorp が町の起源と考えられる。町を南北に貫く運河が開削されたことで、南のゾイデル海（ZuiderZee）と内陸都市とを結ぶ水運の中継点としての地位を高め、西から伸びる街道の終着点としてWegdorp の性格を兼ね備えたと考えられる。以上より初期形態は十字というよりもT字型であったと推測されるのである。

3.1.3 問題点と今後の課題

以上、フリースラントにみられる集落類型を手がかりに11都市それぞれの原初形態について考察した。現段階では推定に頼らざるをえない部分が多く、分析はまだまだ不完全だが、今後各都市の街区調査やこれに基づくさらなる分析を踏まえて考察を進める予定である。またここでは*De Bosatlas van Fryslân* のみに基本情報の多くを求めたが、ほかに考古学や集落研究も参照していく必要があるだろう。とりわけ集落段階における街区の形成状況については不明点が多く、複数のテルプがどのように連結したのか、またテルプ上の地割がどのようなものであったかなど疑問は尽きない。また現在確認できる各都市の主な道や運河の形態が、原初期に確立されたものをかなり継承している点も興味深い。たとえばDokkumでは都市内に運河がなく、道によって規定される街区構成とその組織が発達している。またSneekでは、テルプ状の微高地の中心に向かって運河を引き込んでいる点が、他の都市にはみられない運河の形態であり、こうした特徴と11都市それぞれの形成期の様相は深く関わっていることが予測される(図. 3.1.3.1)。11都市は低地という類似した環境下に成立したが、それぞれの都市は地形や立地条件に関する微妙な差異を備える。全ての都市が低地居住という共通の困難と課題に直面していながら、その解決法は多様であった。それらの手法と技術の積み重なりが、現在の11都市の個性に結びついていると考えられる。

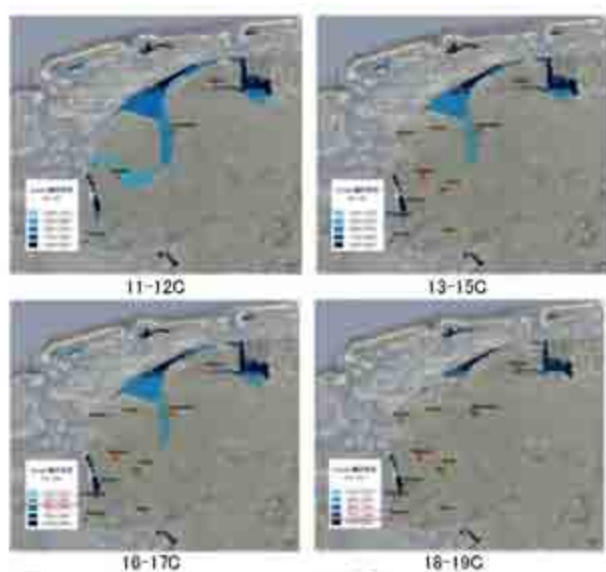


図 3.1.22 (De Bosatlas van Fryslân より作成)



図 3.1.25 IJlst 都市の原初形態推定図

3.2 都市分析 I - IJlst (エイルスト)-

3.2.1 IJlst 略史

(1) 起源

IJlst はミッデル海に流れ込む河川に沿って形成された町であると考えられている。中世以前のIJlst に関する史料は乏しく、14C にユトレヒト商人によって書かれた記述が最古である。言い伝えによれば、1268 年に領主 SikkoSjaerdema から自治を認められたとされ、13C 頃には町が成立したと考えられる。フリースラントには一般にStinsと呼ばれる城館が広く分布するが、IJlst の南端にも“Ylostins”と呼ばれる城館があり、そこに有力者が住まうとともに、付近に教区教会と同心円状に広がる町並みがあったとされる。

(2) 16C まで

13-16C にかけて、町中央の水路に沿って町屋型のリニアな敷地割りが形成された。バルト海やケルンなどのドイツ都市を結ぶ南北の交易の中継都市として栄えたことがうかがえる。1379 年には毎週市と二年市が開かれるようになり、1424 年に自検断(Halsrecht)を得る。

(3) 17C

17C のオランダ黄金期には、市場都市としての役割および地位を隣接する都市Sneek に奪われ、造船業などの木材加工に特化した手工業都市としての性格を強める。この時期の町の拡大は、Bolsward へ向かう北西部の運河沿いに限定される。

(4) 18-19C

1836 年の地籍台帳には、造船大工、大工、なめし皮職人、靴職人など複数業種の職人居住がみられる。また、18C ごろからスケートの家内生産が始まっており、1868 年にはNooitgedagt(ヌーイトヘダフト)という名のスケート製造工場が操業を開始した。これによりIJlst の近代化が進行し、労働者住宅が都市内に増加した。

3.2.2 中世末期IJlst の都市形態

16C 中頃のDeventer の絵地図と17C のSchotanus の絵図を参考に、IJlst の原初形態について推定図を作成した(図3.2.2.1)。IJlst が位置するミッドル海の南側にはVaart 型の集落が多く分布することと、ゆるやかに湾曲する中央の水路が元は自然河川であったと推定されることとの2点から、IJlst はVaart 型集落を起源にすると考えられる。また、町の南端には東側に教会堂、西側に城館が存在したことがSchotanus の絵図(図3.2.2.2)よりわかる。現在両建築は失われているが、信仰の拠点と政治の拠点が町の南端に存在したことは、最初期にはそこが町の中心部であったことを示唆する。

続いて当時の政治形態について記す。S. J. Fockema によると、IJlst の古い議会はEeheer と呼ばれる首長と、Meyriochteren と呼ばれる議員による寡頭制であった。Eeheer とは古くはCourt と同義であり、IJlst における首長の特権的地位を象徴している。首長Eeheer は町の城館であるYlostins に居住し、宅地を開発してそれらを賃貸経営する権利をもっていた。運河沿いに展開するリニアな短冊型の敷地割りは、Eeheer による都市開発によって造成されたものと考えられる。

また、前掲文献によるとIJlst は南北交易の中継点として栄え、とくに造船や木材加工が盛んであった。こうした手工業はギルド制に基づくものであったと考えられている。町の中央には南端の教会堂とは別に礼拝堂が設けられ、ここは職人ギルドの集会所も兼ねていたとされる。すなわち政治権力と宗教権威は町の南端に存在した一方、職人身分の拠点は町の中央に存在した。

ここからは次のことが言えるだろう。すなわち中世末期の16C において、IJlst には異なる社会的身分の人々が居住し、それぞれの拠点は都市内で空間的に分節されたものであった。IJlst ははじめ南端の教会堂と城館を核とする単極構造であったが、経済の発展に伴って商工業階級が台頭し、二極化の道のりを辿ったものと推測される。

図3.2.2.1 IJlst の原初形態推定図

図3.2.2.2 Schotanus によるIJlst の絵図(17C) [部分：教会堂と城館]

図3.1.3.1 Dokkum とSneek の原初形態推定図

3.2.3 近世以降のIJlst にみる都市の柔軟性

IJlst の商業活動のピークは16C 以前にあり、17C オランダの黄金時代において町はそれほど拡大しない。結果として中世末期までに成立したVaart 型の集落形態を維持したまま、今日に至っている。16C 以降19C まで衰退も発展もみせないという定常状態を保ったことは、一体何を意味するのだろうか。IJlst は単純な都市形態でありながら、様々な事態に対応する、ある種の柔軟性を有しているとも言い換えられよう。ここでは今後研究を進める上での論点について述べたい。

(1) リニアな都市形態と社会的ヒエラルキー

16C よりIJlst は単純な線形の形態を維持し続けた。しかし、この単純な構造のなかに

支配者層と職人層がそれぞれ異なる位置に空間的拠点をもっていたことは、既に指摘した通りである。外形だけをみるならば、同じ敷地割りの連続としてしか映らないIJ1st の町並みも、その内部には社会的ヒエラルキーが存在した。時代ごとの様々な都市的要請を、空間的には同規模程度の領域を維持しながらIJ1st ではどのような解決がなされてきたのかという点は、今後とくに掘り下げたい点である。

(2) Sneek との併存関係

Sneek はIJ1st の東方約5km の地点に位置する町で、11都市のひとつである。その発生時期はIJ1st とほぼ同じ頃と考えられるが、都市の規模と形態には大きな差異がある。地理的条件からSneek がより優位な商業上の立場をもっていたと考えられるが、5km という非常に近い距離にありながら、IJ1st がSneek に包摂されずに独立した行政体を維持してきた点は特筆に値しよう。Sneek とIJ1st とのこのような併存関係がどのようにして保たれてきたのか、両都市の歴史をともに観察することで、フリースラント11都市の個性や特殊性の一端も明らかになることが期待される。

(3) 近代の受容と都市の空地

「近代化」の時代を20C 初頭までに限るならば、IJ1st においてはこの近代化というきわめて大きな時代的变化さえもが、中世以来の都市の規模および領域を柔軟に利用することでその内側に展開させたことが注目される。たとえば1868年に設立されたスケート工場Nooitgedagt は、住宅の裏側にある広大な空地を利用して建設されている。また、労働者住宅は、既存の町屋型住宅を改築しあるいは裏側の空地を旗竿敷地として開発することで供給されている。以上は、フリースラントの11都市に小規模な都市の連携からなる〈一群の都市〉論をみいだそうとする我々がとくに興味を寄せる点であり、今後さらなる検討を予定している。

3.3 都市分析 II - Sloten (スローテン)-

3.3.1 Sloten 略史-都市の要塞化を中心に-

スローテンはフリースラント州南部に位置する。11都市の中で最も小さな都市で、その規模は直径200m の範囲におさまる。町の中央を流れる運河とそれに直交する街路からなる10字形の街区構成をもち、都市の輪郭は壕によって限られている。19-20C の近代化によって工場や住宅地の開発が行われたものの、壕の外部に及ぶ都市域の拡張はほとんどなく、運河や街路沿いに建ち並ぶ切妻の建物群が作りだす景観は、中世末から近世にかけての都市の姿を彷彿とさせる。しかしそれらが決して中世末や近世の姿そのものではないことに、我々は注意する必要がある。

(1) 起源

南北に流れ、ゾイデル海（現エイセル湖）へ注ぐ河川と西側からドイツへ向かう陸路との結節点が、初期集落の発生地と考えられている。2.1.2 に従えば「Vaart 型」と「Weg型」の混合形態が集落の原形と考えられ、既述のとおり初期形態はT字形であったと推定している。

(2) 13-16C 中期

13C 頃には濠や城壁が造成され、楕円形の要塞都市が成立していた。当時の都市の姿を伝える図像資料は存在しないが、Jacob van Deventer が描いた最古の都市絵図（1560年）にみられる町の形態が、すでに確立されていたものと考えられる。Sloten は1426年に都市権を獲得した。1523年にホラント伯の支配下におかれ、1531年にはカール5世によって要塞の解体令が出された。ただしこの際の解体は不完全で、Deventer の絵図にはその状況がうかがえる。

(3) 16C 末-17C

16C 末には再び都市が要塞化された。西側に3つの稜堡と高い城壁が築かれ、yckelerpoort と Koepoort という2つの市門が設置された。1672年には再度、防御設備の造成が行われた。とくに都市の西の入口にあたるWyckelerpoortの前にはBreedstraat という広場的な空地がつけられたことが1664年の絵図からみてとれる。

(4) 18-20C

19C のフランス支配下において、要塞は再度解体された。19C 末には市門や市壁が撤去され、橋の付替えが行われた。ナポレオン法典下に描かれた1832年と1887年の2点の地籍図からその様相がみてとれる。20Cには都市の近代化にともないミルク工場が設立された。

3.3.2 Sloten の都市形態に関する史的考察

ここでは絵図と地籍図を用いてSloten の都市形態に関する考察を行う。Sloten を描いた絵図史料としては1560年（Jacob van Deventer）、1581年（Braun & Hogenberg）、1616年（Nicolaas Geilkercken）、1622年（P.Feddes）1664年（Schotanus）の5点、地籍図は1832、1887年の2点を入手している。

これらを相互に比較すると、16-19Cを通じてSloten は同規模の都市領域を維持し続けていることがわかる。前述したように、要塞化とその解体の数世紀にわたる繰り返しが、都市の輪郭を断続的に規定してきたひとつの要因であると考えられる。それは、都市内の空間構成を規定するうえでも重要な外的契機となった。都市の空間構成に最も大きな変化を与えたのは、16C末における2度目の要塞化である。要塞化の前後にあたる1581年と1614年の絵図を比較してみると、とくに町の東部分が大きく改造されている。変化は大きく以下の3点である。

第一に、教会の裏手にあたる通りの家並が描かれなくなっていること。第二に、中央運河に直交していた複数の街路が失われ、そのあとが宅地化されていること。第三に、第一、第二の変化によってブロック型の街区がなくなり、町の主要な家並は運河に面するリニアなものへと変化していることがあげられる。これらの変化は、要塞の建設によって外周部の水路が防御、中央の運河が舟運へと機能が一元化されたことに起因するものと考えられる。都市の東側をかたどる濠は南北に流れる自然河川の名残で、東側へ湾曲していた。一方、中央の運河から北へ延びる運河は、町が形成される過程で掘削されたものである。1581

年の絵図には、小型の船は中央運河沿いに接岸しているほか、大型の船は町の東側の護岸付近に描かれている。詳細は不明だが、この時点では都市内部の港湾設備はさほど整っておらず、東側の自然河川が船の主要な動線として機能していたことが推測されよう。対して1616年の絵図みると、中央運河の北側にはHet Diep と書き込まれ、都市内に港が建設されたことがうかがえるほか、都市の北側と東側にそれぞれSneeker poort、Wolt poort という水門が設置され、停泊中の船も描かれている。また外周部には城壁や稜堡とその上の大砲が描かれ、周縁部の防御設備が造成された様子がみられる。

都市を囲む水路付近の土地は壕の整備によって周縁化され、港の整備によって舟運機能は中央運河に集中化された。それらの課程が、Sloten の街路・街区・建築を大きく改変していったと考えられる。都市の東側の自然河川の役割が弱まって、中央運河の存在が前面に押し出されたことと、これに直交する陸路の存在が、Sloten を十字型の平面構成に置き換えていった。

つまり十字型プランをもつ“理想都市” Sloten は、元来もっていたより多重的な空間構成が単純化された結果このような姿をもつに至ったことが推測されるのである。中央運河東側の街区と、これに続く街路が1581年から1616年までの間に消滅したと考えられることについてはすでに述べたが、街区および街路スケールで生じたこれらの変化は、同時に宅地および建築スケールにも影響を及ぼしたことが考えられる。

すなわち教会の南側には、2つのゲートルをもつ家“ダブル・ゲートルドハウス”が現在位置しているが、こうした特別な住宅の存在は、Sloten においては前述したような都市構成の大きな改変との関連が想定されるのである。すなわち、ダブル・ゲートルドハウスの間口幅は他の住戸より広い。その寸法体系が通常の宅地割と異なっているのは、その敷地がかつて街路であったことを想像させるのである。



図 3.3.21-2 Sloten 都市絵図 1581 年(上)/1616 年(下)



図 3.3.23-4 Sloten 都市絵図部分 1581 年(上)/1616 年(下)

3.3.3 19C の土地所有傾向からみる都市構造の分析

以下では、地籍図と地籍台帳史料を用いて、土地所有の側面からSloten の都市構成について分析を行う。現存する1832 年と1887 年の地籍図および地籍台帳史料のうち、前者はデジタルアーカイブ化されておりweb 上で利用可能である(HIS GIS)。今回はこの地籍台帳史料を素材として、19C の土地所有傾向から近世の都市構造を遡及的に考察したい。

地籍台帳には、一筆ごとの土地所有情報が以下の8 項目について記されている。①名 (naam)、②性 (voor naam)、③居住地 (woon plaats)、④職業 (beroep)、⑤登記番号 (legger)、⑥土地種別 (soort eigendom)、⑦土地面積 (inhoudsgrootte)、⑧土地分類 (klassering) である。上モノである建物の情報についても①家屋番号 (gebouw)、②家屋種別 (soort eigendom)、③収入 (bei inkomen) の3 項目が明記されている。うち

とくにここでは土地所有者の情報に着目する。

Sloten における土地所有傾向とその特徴は、教会が立地する中央運河東側(区分X)、運河西側(区分Y)、そして区分Y の裏手(区分Z)の三つに分類できる(図3.3.2.1)。これらのなかでもとくに区分Z の土地の大半を区分X の土地所有者が、残りの一部を区分Y の土地所有者が所有していることが際立つ。さらに区分Z 内には独立した土地所有者が著しく少なく、仮にあってもその宅地面積は運河沿いのそれと比較して狭小なものが多い。区分Z とは、先に考察した都市の城塞化と解体にともなう市門の設置や橋の架け替えが繰り返された場所である。絵図上でも小規模な住宅が散在するのみで粗放的な宅地利用が目立ち、倉庫のような大きな建物や積荷も描かれている。このことから、区分Zは城塞化による影響を断続的に受けつつ、都市のストックヤードや、小規模ないし零細であるような住居を含む多様な居住者を内包した場所であったことがうかがえる。

次に区分X、Y における土地所有状況を、これらに立地する建物の種別と土地所有者の職業に着目してみると、区分X は3 つの細区分、区分Y は2つの細区分に分類できる。

区分X における細区分の特徴は次の通りである。X1 の土地所有者は区分Z の土地のほとんどを所有しており、市長や税管理人といった世俗権力者を中心とする。X2 には教会や市庁舎が立地している。X3 は一筆ごとに所有者が分かれ、肉屋などの商店が多い(図3.3.2.2)。区分Y における細区分の特徴は次の通りである。Y1 はかつて城館が位置した場所である。Y2 には区分内に複数の土地所有がみられ、パン屋などの小売商を主体とする。また、運河側にみられる広場的な空地が市として使用されていたことが17C の絵図に記されていることから、区分Yには流通・商業的性格が卓越していたと考えられる(図3.3.2.3)。

以上から一見均等に分割されているかのような十字形の都市形態の内部には、非対称の構造が存在することがわかる。とくに、都市の外部へつながる南北の運河と、自然河川を整形したと考えられる都市東側の湖を、細区分X2に位置する教会が所有していることから、都市形成期における運河の整形や掘削が教会の主導で行われたことを想像させる。地籍図から得られる土地所有者の情報は、あくまでも19C のものであり、そこに看取される状況がどの程度近代の傾向を反映し、また逆に15-17C など都市の形成期や発展期の状況に遡りうるかについては、今後峻別していかなければならない。しかし区分X、Y と区分Z の土地所有状況がもつ地先の、地元的性格から想像をたくましくすれば、Sloten の原初形態は現在の都市東側の区域を主体に片側町として始まり、区分X の土地所有者が都市形成における主導的な役割を担ってきたのではないかと推測されるのである。



図 3.3.3-1 Sotenの土地所有分布(区分 X,Y,Z)



図 3.3.3-2 Sotenの土地所有分布(区分 Xと細区分)



図 3.3.3-3 Sotenの土地所有分布(区分 Yと細区分)

3.4 都市分析 III - Hindeloopen (ヒンデローペン)-

3.4.1 Hindeloopen 略史

フリースラント南西部、ゾイデル海（現エイセル湖）の海岸沿いの岬に位置する“港なき船乗りの町”がHindeloopenである。中世から北海やバルト海沿岸部、イギリスとの通商を行うなど、フリースラントの他の都市や低地地方よりも海外との結びつきが強く、また特有の言語が発達したなど、他のフリースラント諸都市とは一線を画す独自の文化をもっている。また現在も都市内を網状に巡る水路が積極的に利用されており、水とのとくに密接な関係が他の都市とは異なる独特の風景をつくりだしている。

(1) 起源

8C 末に漁村的な集落が形成されたといわれる。1225 年に都市権を獲得し、12-13C にはすでに北海やバルト海沿岸部との通商を行い、1368 年にはハンザ同盟に加盟していた。微高地に教会が建設され、初期にはその周囲が居住核であったと考えられる。教会から延びる自然堤防上にあたるBuren の家並が現存するなかで最も古い地域である。

(2) 16-18C 初

オランダの黄金期にあたる16-17C に、ゾイデル海に対して開けていたHindeloopen はアムステルダムと結びつきを強化したこと、東インド会社から貿易の富が流入したことにより、船乗りの町として繁栄を迎える。都市の繁栄に伴って南東部に都市域を大きく拡張した。しかし一方では、度重なる洪水のために海に面する北西部の街区を失う。18C には都市人口がピークに達した。

(3) 18C 末-20C

18C に入ると航海輸送活動が中止され、世界貿易におけるアムステルダムの地位の低下と、バルト海交易の停滞とが引き金となり、決定的な衰退期を迎える。19C には通商にかわってゾイデル海での漁業が町の主な生業となり、工業的な近代化などはとくになされなかった。後述する1832年と1887年の地籍図の変化にもうかがえるとおり、都市の密度は低下の一途をたどる。現在は観光業が主たる産業となっている。

3.4.2 水路／運河類型の考察-Hindeloopen の特殊性-

Hindeloopen の都市内水路の特質を明らかにするため、はじめにフリースラントにおける都市と水との関係を水路や運河の名称から考察する。16-17C に描かれた古絵図、16-18C に描かれた広域絵図 (Atlas)、地籍図に記された都市内および都市周辺にみられる水路や運河の名前を悉皆的に収集すると、いくつかの水に関する単語を基底に、それらの名前がつけられていることがわかる（ただし、都市内の水路・運河すべてに名前が付されているわけではない。場合によっては通り名が運河の名前になっている場合、あるいはdijk=堤防といった名称がつけられている場合もある）。それらは①Sloot、②Haven、③Vaart（都市間運河）、④Wijk（都市内の運河）、⑤Gracht、⑥Meer の6つである。意味はそれぞれ、

排水、港、水運／運河、支脈運河、濠／堀、湖となる。これらはおおよそ水路や運河が担うすべての機能分類、すなわち①排水、②港湾、③運輸・交通、④生活舟運・用水、⑤防御、⑥貯水に対応している。もちろんすべての水路や運河が名づけられた名称に対応する単一の機能のみをもつわけではなく、それぞれが複合的な役割を担っていることが普通である。しかし、水路や運河の名称が表現するものが、まずは主たる機能であると想定してよいだろう。ここでとくに③の運輸・交通機能に着目し、1664年の古絵図によって11都市を比較してみると、Hindeloopen 以外の諸都市では③の水路・運河が都市内を貫通し、都市の中心部を構成していることがわかる。これらの水路・運河に平行して街路がとおり、付近には計量所や市も立地している場合が多くみられる。また都市の内と外との交点を見ても、水門や跳ね上げ橋が設置され、都市間をつなぐバイパス機能も併せ持っていることがみいだせる。一方、Hindeloopen では③の水路・運河が都市の外周部を巡り、都市内の水路・運河沿いには街路が付属しないことが大きな特徴として指摘できる。

次にHindeloopen 都市内の水路をみていくと、多くがWijk と名づけられていることに気づく。中央に流れる水路を主脈とみたとすると、そこから枝分かれして葉脈のようにのびていく支脈水路がWijk である。Wijk という名称をもつ水路・運河もHindeloopen に特有のもので、その語彙には“支脈運河”という意のほか、英語でいうところのdistrict、すなわち街区という意味もある。この語彙をふまえると、Hindeloopen は水路によって括り出される領域をそれぞれひとつの街区単位として、都市が構成されているとみなすことができる。

3.4.3 街区形成論理の考察と街区類型

前項では水路・運河の類型からHindeloopen の都市構成における論理の特質をみた。ここでは1560年 (Jacob vanDeventer) と1664年 (Schotanus) の古絵図の比較から、17Cにおける都市変容の過程を確認するとともに、前節でみいだした水路に圍繞される街区の括り出しが形成される過程と、Hindeloopen の街区類型について考察する。

都市拡張の前後における最も大きな変化は、主に2つある。第一に、南東部の宅地開発が行われたこと、第二に、1560年の絵図では地形に沿って湾曲していた外周部の運河の都市に対する入射角が、宅地の造成にともなってゆるやかに整形されたことである。

都市の形成過程をふまえて街区を分類すると大きくは区分A、B、Cの3つに分けられる(図3.4.3.1)。まず区分Aは1560年の古絵図に示されている部分であり、都市の原初の痕跡をとどめている。微高地に建つ教会周りの街区(①)、自然堤防上に家屋が片側街的に並ぶ街区(②、③)、粗放的な宅地利用が行われている街区(④)によって構成されており、とくに②、③は自然堤防の頭頂部に道が通るものの、建築線は揃っておらず雁行している。このことは初期集落の形成時における水の重要性和住宅の正面性の希薄さとに起因するものと考えられる。X部分は17Cの洪水によって失われる街区である。区分Aでは街区の3辺のみが水路に接しており、水路に圍繞される街区の特徴は強く現れていない。次

に区分B とC は都市の拡張にともなって新たに宅地が開発された部分にあたり、両区分とも4 辺を水路によって囲まれたアイランド型の街区によって成り立っている。とくに区分C は、全くの新しい宅地開発の結果成立した地域であり、街区の中央に直線的な道が通りかつ建築線が揃った、両側町的な街区（⑩、⑪、⑫）で構成されている。これは水路によって括り出されるアイランド型の街区の特徴と、中央に道を通してその両側を短冊型に地割するというシステムティックな町屋形式の宅地構成論理とが重合したものと考えられる。

対する区分B は教会周辺の街区（①）の延長としての街区（⑨）とアイランド型街区（④-⑧）の大きく2 つがみられる。後者は都市拡大と運河の整形にともなって形成された部分にあたる。アイランド型街区内部の南東部の湾曲する道は整形される以前の運河の痕跡であると考えられ、運河の整形によって他の街区に比べて巨大な街区として存立している。仔細にみていくと、この街区は先行する水路に囲繞されることに加え、隣接する空地同士が連結して生み出される道によって分節された細街区（④-⑧）をもつことがわかる。細街区の基本的な地割り線は区分A からの延長であるが、細区分⑤では他とは90 度ずれた、中央に流れる運河に直交する地割り線がみられる。④-⑦の細街区は中央に通る路地状の道を挟むかたちで、地先のないし地尻的な土地所有がみられることが特徴で、区分A、C に比べ宅地利用も複雑である。街区分析の章で後述するように、これらは都市の盛衰に対応した土地のやりくりの痕跡であると考えられる。

4. 街区分析

4.1 フリースラント都市の宅地類型

4.1.1 分析対象としての16C 後半の都市絵図

ここでは11 都市の宅地類型を抽出することを目的に、2009 年度と2010 年度の実測調査に基づく現状分析と、16C 後半の都市図を用いて検討を行う。16C 後半は、おおむね11 都市が今日みる都市域の様相を整え、発展しはじめた頃である。その後、17C において大幅に拡大ないし衰退した都市もあるが、この時期の都市構造や街区構成は現在まで継承されている。16C 後半の都市図分析は、中世の原初的集落と現状との間をつなぎ、かつ都市のマクロな形成論理と、宅地内部の建物配置やプランに至るミクロな空間構成との関係をつなぐ分析に位置づけられる。

ここで扱う都市絵図は、Sloten : 1581 年、Franeker : 1581年、Harlingen : 1570 年、IJlst : 16C（正確な年代不明）、Hindeloopen : 1588 年である（図4.1.1.1）。



図 3.4.3.1 Hindeloopen の街区分類

4. 1. 2 宅地類型の抽出と作業手順

道路や水路の関係から宅地を類型化するために、都市図に描かれている宅地一つ一つについて分類を行った。まず、水路の性格を主運河と支脈運河に分類し、次に宅地と主運河あるいは支脈運河との位置関係、さらに道路、運河、宅地の相互の配置関係を指標として作業を行った。その結果、主な類型として以下のA、B、C、D、E を抽出した(図4. 1. 2. 1)。A-E の5類型はまず、主運河に対して家並が平行するか直交するかの違いから大きく2つに分けられる。以下、これをそれぞれ「ヨコマチ」、「タテマチ」と呼ぶ。各類型は次の通りである。

(1) ヨコマチ

主運河に対して家並が平行する宅地類型である。A、B、C、C'、D、が該当する。類型A は主運河 - 道路 - 宅地の組み合わせからなる。主運河と道路はセットになっており、都市内交通の軸である。都市中心部によくみられる類型である。次に、類型B は主運河 - 道路 - 宅地 - 支脈運河の組み合わせからなる。類型A の宅地背後に支脈運河が加わったものとみなせる。支脈運河は生活舟運を担い、主運河より都市外周部に巡る。そのため類型B は都市外周部にみられる。そして、類型C、は主運河 - 宅地 - 道路から、類型C' は支脈運河 - 宅地 - 道路の組み合わせからなる。類型D は宅地 - 道路の組み合わせからなる。

(2) タテマチ

主運河に対して家並が直交する。類型E のみが該当し、主運河 - 道路 - 宅地の組み合わせからなる。

4. 1. 3 調査5 都市の宅地類型分布と街区の特色との関係

前述の宅地類型を用い、これまでに調査を終えた5 都市について、16C における都市域内の様相を塗り分けたものが図4. 1. 3. 1 である。以下都市ごとに、宅地類型の分布と街区の特色との関係について記述する。

(1) Sloten

都市中心部の主要運河両側にA とE からなる街区が形成される。B、C、C'、D は周縁部に分布する。水路に対して家並が直交するE（タテマチ）が、ヨコマチの辺縁というよりは、他の都市よりも比重の大きい要素として存在する点の特徴である。ここに、陸路と水路が合流し切り替わるSloten という都市のマクロな性格との関係が指摘できる。

また、縁辺部ではタテマチとヨコマチの論理の調整が行われている点も看取される。

(2) Franeker

都市中心部の主要運河両側にA とE からなる街区が形成される。B、C、C'、D は周縁部に位置する。都市を東西に横断する3本の主運河が宅地を強く規定していることから、ヨコマチがタテマチより大きい割合を占めると考えられる。ただし、部分的にその規定から外れているところもあり、自然河川から穀物を運ぶ船が入ってきたとされる北東部（図右上）や、教会から都市外へのびる陸路（図右下）がそれである。

(3) Harlingen

都市中心部の主要運河両側にA とE からなる街区が形成される。B、C、C'、D は周縁部に生じる。都市の大きな構成にはFraneker との類似が認められるが、運河と運河の間のタテマチの比重がやや大きい点を確認される。また、教会とその周囲の家並みは元々別の集落として存在したので（図右下）、そこは運河に規定されない全く別の構成原理によってなりたっている。

(4) IJlst

ほぼBのみからなる。これは水路にそって形成された集落の原型といえるリニアで単線的な形態を最も留めたものであるといえる。

(5) Hindeloopen

街区の大半がCのみから形成される。他の4都市においては宅地を第一に規定する運河が必ず両側に道をとめない、都市の内外をむすぶ大きな動脈の一部であるのに対し、Hindeloopenの都市内運河は支脈運河であり、生活舟運の機能に特化する。Sloten、Franeker、Harlingenでは主運河 - 道路 - 宅地の組み合わせを主たる類型とするが、Hindeloopenは支脈運河 - 宅地 - 道という特有の宅地モデルをもつ。これは宅地を第一に規定する運河の性格の違いによるものである。

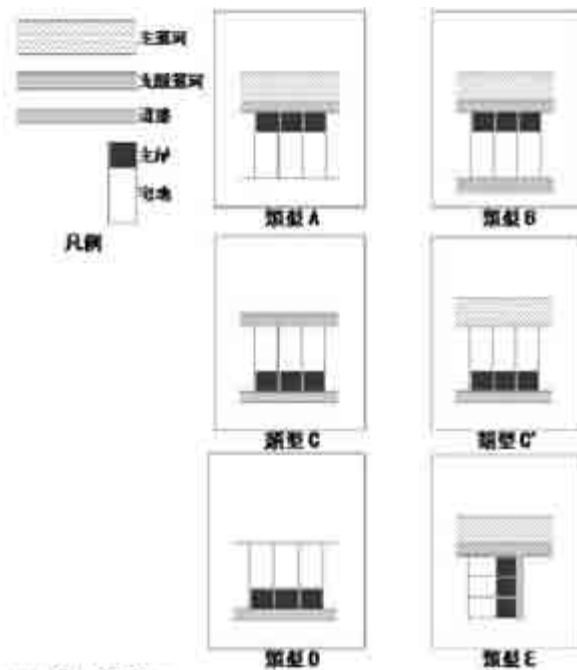


図 4.1.2.1 宅地類型

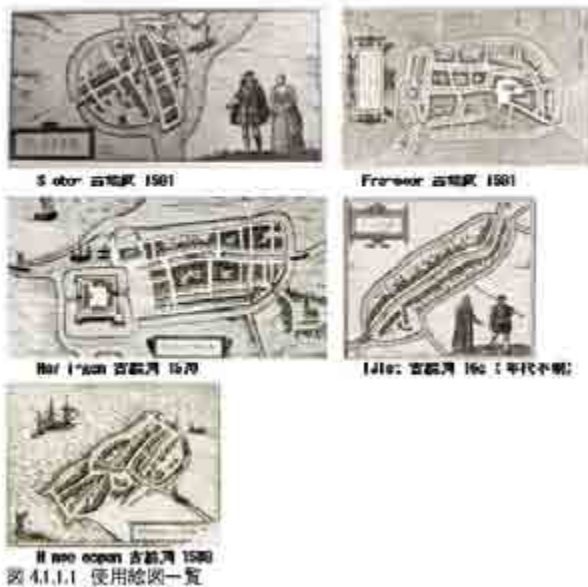


図 4.1.1.1 使用地図一覧

4.1.4 小結

11 都市の街区と宅地の空間構成を概観すると、一般的にタテマチよりもヨコマチの論理が強いといえる。つまり陸路よりも水路への志向が強い。ただし、水路と陸路の切り替えが行われるようなところでは、タテマチの論理の比重が高まる。また、宅地を規定する水路が都市の内外をむすぶ主運河であるか、生活舟運を担う支脈運河であるかによって、都

市内にあらわれる宅地類型や、それを集合・拡大したものであるが街区及び都市空間全体の構成が異なる。すなわち主運河の場合にはA、B が現れ、支脈運河の場合にはC、C' が現れる。今後考察すべき点としては、ここで扱った水路の性格のほかに陸路の性格を宅地類型の分類に加えていくことが挙げられる。

4.2 敷地の成立と利用形態

4.2.1 Hindeloopen — 宅地利用とそのパターン

Hindeloopen では運河北側の3街区(図4.2.1.1)について詳細に調査した。調査項目は、①屋根伏形状、②建物種別、③階数、④アプローチ、⑤建物隙間寸法、⑥建物間口寸法、⑦ゲートル形状、⑧ペイプメントの種類、⑨境界装置である。

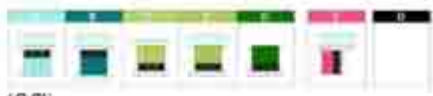
調査街区は教会から続く旧街区(Buren)と新街区(Nieuwestad)に挟まれ、かつ主要な運河(De Zyl Roede)と支脈運河に囲まれることで他の地域から切り離されたアイランド型の街区である。街区内はいくつかの地区に分節されており、本調査では旧街区から新街区へ横断し、途中支脈運河方向へ宅地割が変化している部分を含む3地区を実測した。以下、調査データを作図したもの(図4.2.1.1)を用いて、宅地形状の類型の抽出と、形状変化の痕跡から街区の復元的考察を行う。

(1) 路地空間と地先

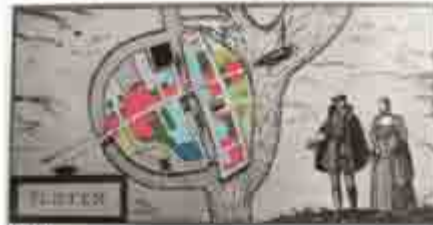
調査範囲には不定形な路地空間があり、各住戸はこの路地状空間を挟んで向かいの敷地も所有しているケースがみられる。1832年、1887年の地籍図を参照すると、住宅と運河との間に空地が連続していたものが、徐々に路地として明確になっていったことがうかがえる(図4.2.1.2)。もとはひとつながりであった敷地が路地により分節された事で、路地を挟んで地先を所有する形式に変じたと考えられる。この形式は調査範囲に限らず、indeloopenに散見される代表的な宅地のありかたである。



図4.2.1) 調査対象街区の屋根伏図



(凡例)



Sloten



Franeke



Harlingen



Lilje



Hindeloopen

図 4.1.3.1 各種市の宅地類型とその分布

(2) 宅地類型

実測調査から宅地の所有境界の現状を明確にし、さらに1832年と1887年のHindeloopenの地籍図と照らし合わせて類型化を行ったところ、以下5つが抽出された(図4.2.1.3)。なお、ここで「地尻」とよぶのは、路地を挟んで運河から遠い側にある宅地のことである。ここには通常主屋が立地する。また、以下で“合筆”、“分筆”と表現するのはあくまでも地番の振り分けによって画された“利用境界線”の変化であり、所有境界線の変化とは必ずしも一致しない可能性があることを注記しておく。

- a 地先の合筆1：運河に面した地先の土地が横方向に2～3筆合筆され、宅地が拡張されるケース。
- b 地先の合筆2：地尻と地先を共に所有し、かつ地先が隣地と合筆されて拡張されるケース。
- c 地尻の合筆：地先の所有を手放した後、隣地の地尻と合筆して拡張するケース。
- d 地尻の分筆：地尻の土地が路地に対して前後に分筆され、利用権が分かれるケース。
- e 分筆された地尻の合筆：dのように分筆された地尻の一方の土地を合筆し、L字型の利用境界をつくるケース。

(3) 宅地の分筆と住宅との関係性

類型e及びdにみられる地尻の分筆について、住宅平面との関係から考察する。なおここでは、街区調査範囲からは外れるが同アイランド街区内にあり、かつ実測調査を行ったKalvelstraat1を事例として取り上げる。この住宅のプランは、前室-寝室-後室の3部屋と、これらが面する廊下から構成される。1列3室型ともいえるこのプランは11都市において最も普遍的なものである。この住宅の平面図を1832年の地籍図と対応させると、前室+寝室をひとつのまとまりとし、これと後室との間に利用境界線が入っていることがわかる。これより、住宅は部屋単位で分筆、あるいは賃貸されていたことが推測される。部屋境のラインが宅地の所有または使用権を分節するこのようなあり方は、都市発展時の人口過密に対して、都市の領域を一定に保持したまま都市の内部で居住者の増加を吸収する手法を示しているように推察され、きわめて興味深い。それは宅地造成に多大な労力を要する低地地方ゆえの都市居住と宅地利用、住居の使われ方や居住の手法であるように思われるのである。

(4) 小結

Hindeloopenの都市空間は、その敷地スケールにおいては宅地の分割や合併などの編成を繰り返し、建築スケールにおいては住居の一室単位にまで及ぶ利用権の分節によって、柔軟に過疎化や過密化に対応していたと考えられる。しかもこうした変化は、都市の旧市街地や中心部のみにおこるものではなく、縁辺部を含めて横断的に生じた可逆的で流動的な変化であり、Hindeloopenのほぼ全体がこのような手法で居住の増減を調整していたのではないかと推測される。この仮説を検証するために路地空間の利用方法と、住宅平面と

宅地割との関係について詳細に分析することが挙げられる。路地空間の利用法の分析は、宅地と運河との関係や合筆ないし分筆の過程を追ううえでも重要であり、以上に行った住宅平面と宅地割の関係にかんする分析を、今後、他都市の街区調査と連動して進めることを課題としたい。

4.2.2 Sloten — 空地

運河沿いの道Voorstreek と、これに直交する街道の一部Dubbelstraat、さらにSloten 外周部を取り巻く壕に囲まれた、Sloten 南西の4分円状地区（以下、南西地区）について、2010年度に街区調査を行った。とくに我々は、VoorstreekやDubbelstraat 沿いに展開する構成原理が比較的明快な宅地群ではなく、これらの裏にあたる壕側の地域に注目した。同地域にみられる宅地利用や建物の配置、敷地境界線のありようは粗放的かつ複雑で、その構成原理を解明することは、Sloten の近-現代化過程について明らかにするうえで重要な事例になると考えたからである。以下、南西地区の年次的変遷を、絵図、地籍図、実測調査のデータなどを用いて分析する（図4.2.3.1）。

(1) 南側地区の概略

a. 絵図に基づく分析（16-17C）

- 1560年の絵図

1560年の絵図における南西地区には、家並みが運河に平行して形成されたVoorstreek沿いの街区（以下、ヨコマチ）と、運河に直交して家並みが形成されているDubbelstraat沿いの街区（以下、タテマチ）を確認することができる。一方、これらの南西にはほとんど建物がなく、空地になっている。ヨコマチはVoorstreek 沿いまで拡大しているが、タテマチの奥行きは比較的浅い。

- 1616年の絵図

1616年の絵図からは、稜堡及び城門の建設が確認できる。これに伴い、Dubbelstraatに通じていた橋がなくなって、南側に新たな橋が設けられている。街区の南端には、湾曲する細い水路のようなものが見受けられるが、ここが1560年時点における陸地の南端であったと考えられる。1560年と比較して、ヨコマチの重心が南西側に移動するとともに空地側に拡大して新たな街区を形成し、またタテマチが東西に拡大していることが確認できる。南西部には依然として空地が広がっているが、絵図からはこの空地に資材のようなものが積まれていることが読み取れ、ここが都市のストックヤードとして利用されていたことが推測される。



図 4.2.1.2 1832 年と 1887 年の地籍図にみる跡地空間の変遷



図 4.2.1.4 Kalvestraat 1 における敷地と住宅の利用境界線

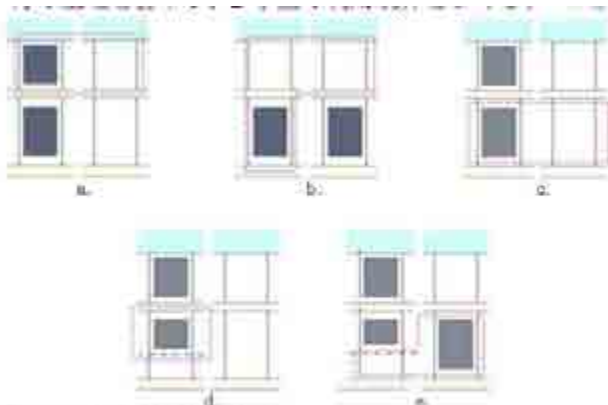


図 4.2.1.3 宅地類型のダイアグラム

- 1664 年の絵図

1664 年の古絵図においてはヨコマチが南西側に更に拡大し、タテマチも空地に向かって伸びている。

b. 地籍図、屋根伏図、街区調査に基づく分析

- 1832 年の地籍図

1832 年の地籍図によれば、ヨコマチのうち運河から奥まっている街区の建物が減少している。タテマチの建物もまばらになっているが、南側に新たな街区の形成がみられる。

- 1887 年の地籍図

1832 年の状況と比べて建物が増加していることに加え、既存の建築や敷地の利用が細分化されている状態が見受けられる。また、壕にかかっていた橋が北側に移動して Dubbelstraat に直接つながるとともに、元の橋に付属していた城門が取り払われている。

- 1974 年の屋根伏図

1974 年に制作された屋根伏図によると、1887 年よりもさらに建物が増加している。その多くは小規模なものである。かつて空地であった場所に建物が散在して建ち、タテマチ、ヨコマチの家並みからなる街区構成のルールが希薄化している。

- 2010 年の調査図面

2010 年に行った街区調査の結果によれば、1974 年時点よりもさらに建物が増加し、より密度が高まっている。以上の分析により、南西地区の複雑な空間構成は、次の経緯によって形成されたことが明らかになる。すなわち、運河沿いのヨコマチと街道沿いのタテマチがそれぞれ街区内部に向かって宅地の奥行きを伸ばしたり、あらたな街区の列を形成した結果、当初空地であった地区南西部では両者の原理が交錯した。ここで地割りパターンのせめぎあいがおこり、同地区の地割りや建物の立地は複雑な状況を呈することになった。このことは同時に、Sloten の都市構成に貫徹されている単純な次の原理を示している。つまり Sloten の宅地割りと街区構成は、運河に平行するか直交するかという 2 通りのパターンとその延長から成り立っている。この 2 つの型が、都市空間ぜんたいの構成に対してきわめて強い規定力をもっている。

既に 4.1.3 で述べたとおり、「ヨコマチ」と「タテマチ」の原理は他の 11 都市に共通するものであるとともに、この 2 つがどのようなバランスで展開するかが、宅地や住戸個々のミクروسケールから、都市全体の骨格に至るマクروسケールまでを決定づけている。

5. 住宅分析

5.1 住宅の構成と変化

現地調査では、IJlst、Hindeloopen、Sloten において 15 棟を実測した(図 5.1.1)。これらのプランについて、現状及び聞き取りなどをもとに復原を試みた結果、調査家屋には一つの基本類型があることを抽出した(図 5.1.2)。玄関が平面のいずれかの端に寄っており、そこに接続する廊下が裏庭までまっすぐのびる。その廊下に直交して 3 室の部屋が並ぶ。前面道路側から、前室、後室、その間のベッドルームである(図 5.1.3)。このベッドルームは非常に狭いもので、その上部は階段室、壁は天高の低い半地下の倉庫になっていることが多い。いうなればこの 3 室構成は、道に対する前後を反転させても成立するプランである。つまり前面道路から離れるにしたがって、部屋の“奥”性が高まる日本の町屋と比べ、11 都市における都市住居の平面では、道路と部屋との関係における各部屋の性格の均質性が際立つといえよう。このような特徴はフリースラントの諸都市と都市型住居の平面形態、およびその使われ方や住まれ方について考えるうえで見逃せない。これは 4.2.1 で述べたとおり、19C の地籍図上にあらわれる、家屋内部を貫通する利用境界線の意味ともきわめて密接にかかわる。

次に復原平面図と現状平面図を比較したところ、共通する 3 つの大きな変化がみられた。まず裏庭側の壁がさらに後退し、居室が拡大している。また、母屋の後ろに付属屋を増築

する例が多くみられた。付属屋にはシャワー室やトイレなどが設けられていることが多く、建設当初の母屋にはなかった水回りが、必要に応じて後から作られたとみられる。さらにもともとベッドルームだった場所がトイレに改造されているケースが多くみられた。1階平面のこのような変化には、ベッドルームの変化が大きく関係していると考えられる。つまり現在に至るまでに1階の寝室が上階に移された結果、ベッドルームが前室や後室と一体となって居室化されたり、水回りに改造されたりした。

次に敷地利用に注目すると、住居の横に隣接して前面道路から裏庭につながる路地をとっている例が多くみられた。これは家屋内を裏庭まで貫く“内路地”ともいえる廊下とともに、前面道路と敷地の奥や裏とをつなぐ動線である。この路地は幅をもつ“敷地境界線”であるといえよう。その所有や利用に関しては、いくつか興味深い聞き取りも得られた。たとえばこの路地に面する隣家の壁面の掃除は、路地の所有者が行うという。また路地部分のみの土地売買が繰り返されることもあった。その結果、19世紀の地籍図や現状の敷地境界線が隣家の敷地と雁行型に取り合っている事例もみられる(図5.1.4)。

さらに路地については、現代までに室内化されたものも多いことが推察される。たとえばスローテンなどの16-17Cの絵図には多くの路地が見受けられるのに対し、現在同じ位置にそうした路地はみあたらない。

5.2 小さなインフラとしての路地と廊下

以上のような構成をもつ住宅を都市との関係で捉える手がかりとして、敷地内の路地と、いわば“内路地”ともいえる住居内の廊下(Gang)に注目して分析を行う。11都市のそれぞれに看取される路地は一見すると同じような家屋間の隙間だが、それらの幅や使われ方、所有のあり方などにはいくつかのタイプがあることが予測され、都市空間と建築との関係を考えるうえで重要な意味をもつ。路地と廊下は生活動線と密接な関係にあるだけでなく、ひとつの居住単位といえる各室を、道路や運河・水路など都市のサーキュレーション全体と接続して捉えるとともに、これらすべての構成原理を探るうえでも有効な視点になると考えられる。



図 4.2.3.1 南西地区の変遷

5. 2. 1 路地・廊下の類型

現地調査と19C 地籍図の分析から、路地はその所有と構成形態によって次の4つの類型にわけられた(図5.2.1.1)。これらをひとまず、片側面型、側面隣接型、旗竿型、共有型と名付けた。片側面型は、建築が壁面線をそろえて建ち並ぶ場所に連続して看取される。側面隣接型は、一つの路地を両側の住戸が折半して所有するものである。旗竿型は古くからの家屋の奥に建物が新たに作られた結果生じたものである。共有型は道路に直交する長屋型住宅へのアプローチである。とくにIJ1stのように、中世と同規模の領域で居住の密度を高めた都市に顕著にみられる。なお後の2つは19C 前半から後半にかけて増加していることが地籍図から明らかで、11 都市の近代化とそれに伴う宅地空間の変化について考えるうえで注目される。

廊下の形態は、片寄型、中央型、屈曲型の3つに分けることができる。片寄型は先述のとおり、廊下に諸室が接続する。中央型は実測した住宅のなかでは1 軒のみで、これは内部が改造されていたため当初のプランを確認していない。しかし各都市には、ファサードの中央に玄関ドアを設ける住宅がしばしば見受けられる。通常玄関ドアから廊下がのびることを考えると、これらは中央型に相当する。今後これらの内見事例を増やすことが望まれる。屈曲型は、Hindelopen のNieuwstad12 のみに確認した特例である。これについては同住宅が教会の所有であったことや住宅の側面に位置する葬送の広場への動線との関係が予測される。

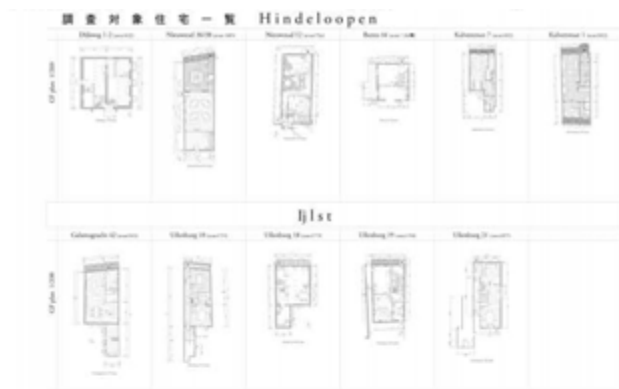


図 5.1.1 Hindeloopen, Hjst 住宅実測調査図面(GF)

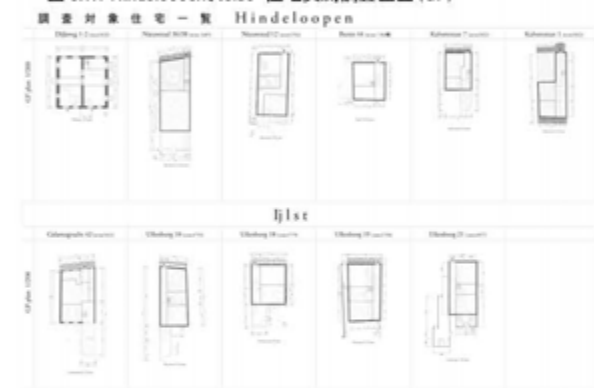


図 5.1.2 各住宅の復原図(GF)

Uilenburg 10 (anno1755)



図 5.1.3 1列3室からなる平面類型



図 5.1.4 雁行型路地の事例(Jlist)



図 5.2.3.3 GaramagntChu82 G-plan(左) F-plan(右)



図 5.2.3.4 事例1 (Liet.地籍図より)



図 5.2.3.5 事例2 (Liet.地籍図より)

5. 2. 2 Sloten の都市空間と路地・廊下の類型

以上の検討を踏まえ、Sloten の都市内に路地と廊下の位置をプロットした（図5.2.2.1 / 下図は1832年の地籍図）。なお図中に示した廊下はあくまでも記号であり、奥行きについては実際の長さを反映するものではない。これよりSloten では中央運河沿いに並ぶ住宅に、片寄型廊下と片側面型路地の組み合わせが連続していることがわかる。これに対して、運河に直交し東西方向にのびるDubbelstraat 沿いには、中央型廊下と片側面型路地の組み合わせが比較的多くみられることがわかる。また、中央運河沿いの角地には中央型廊下の家屋が多く立地している。時には側面隣接型路地もみられる。これについては、片寄型廊下 - 片側面型路地が連続することによる歪みを角地で吸収しているとも考えられる。敷地と路地の関係について、アムステルダムタウンハウスでは延焼防止などの理由から一定以上の距離を保つことが決められていたことを鑑みれば、建築があらかじめ一定の間隔をあけて建ち、その後どちらかの側壁にあわせて敷地境界線がひかれた結果敷地内の路地ができあがったものであるとも考えられる。

5.2.3 IJ1st の都市空間と路地・廊下の類型

図5.2.3.1 は1832年の地籍図からIJ1stの路地を抽出したものがある。その特徴は、空地の裏へ抜ける通路が卓越する地域と、そうでない地域とが交互に連続することである。ここには各都市内地域における裏側の運河の重要性や、職業分布との関係が推定される。また、IJ1stでは他の都市と比べて共有型路地を多くみることができる。図5.2.3.2は1832年と1887年の地籍図からそれぞれ抽出したIJ1stの路地分布図である。ここからは、1832年から1887年にかけて共有型路地が増加したことがわかる。隣接する都市Sneekとの関係や、IJ1stの近代化過程のなかで、敷地利用や居住の形態が変化したこととの関連が指摘できる。ここでは1832-87年の間に新たにできたことが確実な一例で、かつ我々が実測調査も行った住宅であるGaramagracht82を紹介したい。

同家は周辺の住宅と変わらない規模で、現在は一家族の住居として使用されているが、一時期6世帯が入居していた可能性がある。図5.2.3.3は、年代が確かではないがこうした時期の図面であるとみられる。玄関が3つあるほか、玄関からすぐ階段を上がって上階に入れるようになっており、1階と2階がかなり分節的に利用されていた可能性がある。さらにこうして分節されている各部屋の内部が、ベッドルームによってさらに細かく入れ子状に分節されている。手前の2つの居室にはそれぞれベッドがあり、入り口が2つあるので、それぞれ2人以上の人が寝ることができる。奥の居室は2階に寝室が2つあるが、ここも2世帯で別々に使用していたとも考えられる。また、19C後半の地籍図によると、一番手前の居室の横についている寝室の利用境界は個別に区切られており、住居内のこのきわめて小さな区画だけがさらに別人の利用に供与されていた可能性がある。これを裏付けるように、隣のトイレには外と通行可能な出入口がついており、あたかも玄関を兼ねていたかのようである。

次に、1832年から1887年にかけて共有型路地をもつ長屋型住宅がつくられた2つの事例を示す。1例目では、かつて1軒の住居であった家屋と土地の利用が分割され、小さな居住単位の集合に変じている(図5.2.3.4)。2例目は、かつて1軒であった住居の内部を利用境界でわけて集住し、その裏側にあらたに建物を建設するものである(図5.2.3.5)。これは船乗りや船大工の所有地のほか、主に農家の所有地にみられる。これらの職業と外周運河利用との関係は、路地分布の疎密とあわせて、都市の周縁部における宅地の空間構成について検討する手がかりのひとつになる。

今後はとくに、各住宅のなかに入れ子状に存在する居住単位として部屋の様相を分析することで、住居内の廊下や階段、地階や上階の敷地内の路地や空間構成を、道路や運河など都市全体のサーキュレーションとともに位置づけ、ミクロからマクロへとスケールを横断する視角を得ることを目指している。また、今回の分析では主として宅地とその周辺の構成に関する陸地側の分析に終止したので、以後は運河など水系に関する考察を一体に進めるとともに、11都市における家族ないし居住の単位やその構成に関する社会史研究もレビ

ューしながら、建築のプランとその変遷を都市空間の変化のなかに位置づけていくことを課題としたい。



図 5.2.1 Sloteri 路地・露下分布図

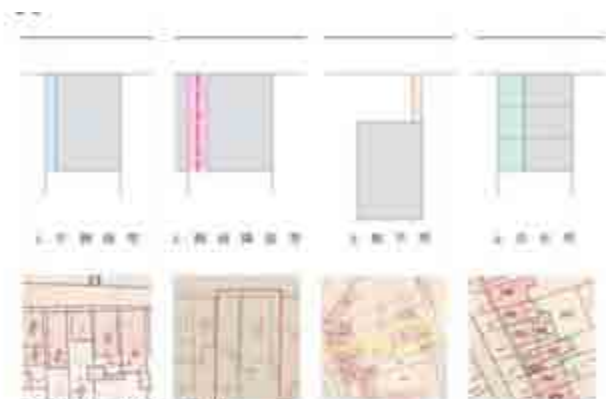


図 5.2.1.1 路地の4類型

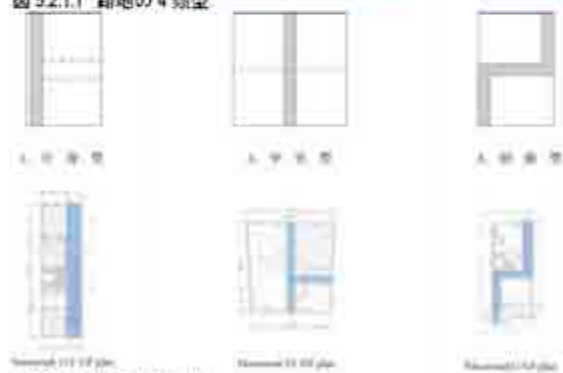


図 5.2.1.2 露下の3類型

おわりに

以上4章にわたって金沢城下町を世界都市の比較という観点から位置づけるための基礎

作業を行った。1章では城下町という都市類型について、2章ではヨーロッパ世界都市を16～17世紀都市という視点からみた時の各国ごとの差違をみた。3章では2章のなかでとりあげた4都市について各論を展開し、金沢の特異性を浮かび上がらせる布石とした。そして最後の4章で、実際に調査研究を行ったオランダ・フリースラント11都市からひきだされるさまざまな論点について詳細に分析を加えた。

このような研究を通して、金沢の世界都市としての位置づけを再度試みると以下のようなだろう。

- ① 16～17世紀都市：金沢は中世寺内町からスタートし、それを継承して城下町建設が行われた。これは日本的文脈では中近世移行期の都市ということができるが、世界史的観点からみると、ウォーラーステインのいう「近代世界システム」が地球規模で稼働しはじめた時期に重なり合う。金沢はまさにそうした時代の都市として西欧諸都市と比肩する内実をもっている。
- ② 地形コントロール都市：台地と大河川が織りなす複雑な地形を見事に利用した城下町であること。金沢は港町を城下町のなかに包摂しない。その点では江戸や大坂、名古屋などと異なるが、逆に水運に全面的に依拠しない、金沢を地域拠点とするような求心的かつきめ細かな陸路のネットワークをつくりだした。江戸や大坂、京都の巨大さには及ばなかったかもしれないが、巨地形・微地形を巧みに利用しつつ巨大化していった、近世巨大城下町のひとつも模範的な姿を示している。これは信長の天のアイデアから近世城下町全般のプランニングへという、ややもすれば単線的な流れの趨勢のなかで、きわめて成熟度の高い緻密な都市の計画が行われていった結果である。
- ③ 複合城下町：金沢は吉田伸之によって「複合城下町」の典型例と位置づけられている。この複合性は城下町内部に長家などの重臣クラスの武家地の居住区が多核的に包摂されており、「城下町内城下町」的性格をもつにいたったことによる。金沢の北陸地域における中心性は都市の巨大化を促し、城下町の枠組みを超えてさまざまな要素（支藩的要素を含む）を都市内に次々と併呑していったのである。この点も金沢が日本の近世城下町のなかでは特異な位置を占める理由のひとつとなっている。
- ④ インフラ都市：陸路中心の城下町ではあったが、それゆえに城下には地形条件を巧妙に利用した用水が発達した。金沢城下町の用水システムの高い水準については、すでに多くの先行研究があり、ここであらためて強調する必要はないが、クリークを編むようにして成立した佐賀城下町などと比較しても、金沢の水系は城下町全体のネットワークの要として見逃すことができない。
- ⑤ 領域都市：金沢はけっきょくのところ「城下町」というよりは、城下町という枠組みを借りた「領域都市」ということができないだろうか。城下町という単純な構図は早くから逸脱しはじめた金沢はさまざまな要素を次々と併呑しつつ巨大化を遂げる。フリースラント11都市の調査成果からもこのことは再確認できる。金沢という都市のおもしろさは、領域全体のネットワークとして捉え直すことによってはじめてわかる。

城下町金沢学術研究 2

発行・編集 金沢市

平成23年3月31日発行